

Gumna



これは、平成十六年十一月十六日から平成十七年二月二日までの、ネパール滞在の記録であります。シャプラニールに与えてもらったこの期間、ほぼ毎日スケッチブックにその日の出来事や考えたことを書き込み、それを仕事の合間にテキスト化していました。それをまとめなおしたものです。

読み返してみても、自分の思い出によるところをなしに眺めてみても面白いものになっているような気がしたので、一冊にしてみようと思ったのであります。と言っても、日記のようなもので、読む人を想定して、その人たちに「伝える」ことを目的としたものではなく、あくまで「書きたい」ことを書いています。また、それでも書けない時期に無理をして書いたり、あるいは余計なまでに書いたものもあるので、読み苦しいところがあると思いますが、ご了承ください。

さて、この本はどういうものなのか、考えてみました。

まず、「ゲムナ【ghun-na】」とは、ネパール語の動詞「ゲムヌ【ghun-nu】（歩く、ぶらぶらする）」の不定詞で、単純に「ぶらぶらすること」の意で使えるようです。見たことや経験したことを、感想を交えて気の向くままに書きました。上質とはいえないんですが、エッセイ集とも言えます。

また、毎日のくらの金額を使ったのか、記録しました。そのときどきにスケッチしたのや写真も挿し込みました。地図こそ載せませんでした。どこで、どんなときに描いたのかは、本文に記載されています。後で地図と地名を照らし合わせてみれば、ちよつとしたガイドブックになるかもしれません。その点で、ネパール旅行のための資料本とも言えなくないです。

また、ネパール研修にあたって、主な業務は新しく始まる『子ども関連プロジェクト』であることは、事前に知らされてきました。滞在期間は、自然と子どもに目を向けていたように思います。研修前には、少しでも日本で出来ることを、と思い、夏から秋にかけて、台東区の児童館でボランティアをしました。そもそも僕の育ってきた背景は、小劇団であり、建築であり、まちづくり・地域づくりであります。イシューとしての子どもというより、より生々しく捉えようとした子どもの本とも言えなくないと思います。

ま、そんなことはどうでも良いです。読んでくれた人たちが、楽しんでくれれば何よりであります。

グ
ム
ナ

十一月十六日 Mangalbaar

十二時半ごろ、トリブバン国際空港へ到着。小松さんが迎えに来てくれていて、まずホテル(Use)へ。ホテルはThamelという外国人の観光客がよく泊まる地区にある。荷物を置いた後、明日からの予定を確認して、小松さんの案内で少しThamelの両替所や日本食を食べるところなどを教えてもらう。

小松さんは事務所へ、僕は少しくあたりを歩くことにする。

カトマンズの屋間は大変あったかく、フリースとTシャツで十分だ。大分観光地化されていて、レンガ造りの五、六階建ての建物はここ五年くらいのものが多いのだろう。Thamelの中でも南の方へ行ってみると、交差点になっているところで市場が立っている。そこには塔が建っていて、町並みも古い(交差点をChowkという)。出窓といっているのか、ベランダといっているのか、あるいは庇といっているのか、その空間がかつこよく、大体6Mくらいの道幅に、三階建てぐらいの町並みが続く気持ちがいい。窓辺には女の人が外を眺めていて、聞いたことのある風景がみられた。しばらくするとカーテンの中へさっと隠れる。投げキッスでもしたらどうなるかしら、などと考えながらぶらぶら歩き続ける。

五時ぐらいになるとまちはすごい人出となる。大体この三十分ぐらいがピークか。

表の通りには子どもをあまり見ないなあと思っていたら、中庭から声が聞こえた。ので入ってみた。この中庭へは、建物の中へ入るように、少し天井の低くなった入り口を通らなければならない。初めてネパールへ訪れた人間には入りにくい。だけど入ってみると十数人の子どもたちが暴れまわっていた。このような空間への鍵をもてるかどうか。この日はもう暗いのでひとまず何もせずに帰路へつく。

晴れ

Use, Thamel

石鹸・洗剤・シャンプー・サンダル・水・スプライト 460Rs、チャーハン・モモスー
プ 169Rs.

十一月十七日 Budhabaar

外がまだ暗いうちに目が覚める。朝夜は大分冷え込む。聞こえてくるのはカラスの声と犬の声ばかり。部屋は4F(日本でいうところの五階)、白々と夜が明けると向かいのベランダで女の人が掃除を始める。

九時半ごろ小松さんの迎いでネパール事務所へ。車のナンバーについて説明してもらいながらやってきた。事務所内のものありかなどを説明してもらって、この研修についてオリエンテーションを受ける。

十二時、お昼。ダル、サーグ、タルカリ、アチャール、ムスというメニュー。もちろん手で食べる。あまりうまくは食べられないが、そのうち何とかなるでしょう。

午後、パートナー団体 SGP とのミーティングに出席。まくし立てるようなネパール語と英語、何を言っているのかもちろんわからないが、拾える単語を探ってみる。ミーティングの雰囲気を感じているだけでも、結構勉強になる。場所は SGP の事務所であったのだが、アウェイ・スタジアムでミーティングをしているという感じ。しばらくすると何人かの SGP スタッフが帰ってきて、いよいよそういう雰囲気だ。

この日は夕方から、ネパールでのもうひとつのパートナー団体 SDB のスタッフの親類がティカのセレモニーをするというので、小松さんが呼ばれているのにくっついて連れて行ってもらった。もちろんやんにまゆみさん（小松さんの娘さんと奥さん）にはじめてあった。セレモニーはゆうに三百〜四百人くらいは集まっていたのではないか。家の前の空き地を使って、10×30M くらいの赤や黄色の鮮やかなテントを張って。彼はお金持ちだったろうと思う。たらくく食べて、TAXI でホテルへ。

晴れ

Use, Thamel

一ヶ月分の昼食代 300Rs、TAXI 100Rs。（くらいだったか）

十一月十八日 Bribhaar

時差があるのだろうか。三時ごろに目が覚めてしまう。夜も寝るのが早い。昨日とおなじ、カラスと犬と、今日は鳩がホーホーと。六時にもう一度目覚めるが今度は二度寝。七時十五分ごろ起床。

本日から事務所へは歩いて通うことにする。事務所は Thapathali というところにあつて、ホテルからは五十分から一時間くらい。毎日違う道を行ってやろう。朝の雰囲気も、夜の雰囲気も、なるべく感じ取ろう。

ネパールでは、ごみはそのまま道の真ん中か、端っこかにまとめられる。袋に入れるなどはなくて、これを八時くらいになると、収集する人たちがスコップなどを使ってトラックの荷台などに入れる。袋に入れないのは、余計なごみも出ないし、よいのではないか。ごみを出すのがいやになるし。

カトマンズは朝でも埃がすごい。本当にものすごいって、咳が止まらなくなる。そんなことを気にしながら歩いていると、Tripeswar というところに差し掛かったとき、小川にぼいっと鞆ごと捨てる人があった。そういうものかもしれない。日本の田舎では今でもぼいっと川にごみを捨てる人が多くいる。やがて土に返るか返らないか、あるいは人が多くいすぎることかどうかってな違いなのかもしれない。昔のことや宗教を信じる

人を偶像のようにあがめないように、そう気をつけよう。

この日は Inter National Children Day なるものらしく、お昼にパートナーとなる CAP-CRON がストリートチルドレン関連の記事や写真を展示するという。そのセレモニーへ出席させてもらった。ストリートチルドレンの子にも、そういう子としてはじめてであった。このセレモニーには、参加できてよかったと思う。この子を目の当たりにしたということだけでなく、こういう国のセレモニーの意味合いが少しつかめた。

夕方、勤務後事務所を出ると、なにやらお祭り騒ぎな音楽が。タライ平原出身の人々のお祭りがあるのだという。事務所のすぐ裏の川沿いでやっているというから、小松さんと帰りに覗いてみた。なんか雰囲気は、日本の花火大会といった感じ。道に並ぶ姿はあるいは初詣のような。俗っぽい屋台のようなものや、きらきらしたプラスチックのひらひら、でも川にはろうそくを焚いて、お供え物もしている。こういうミスマッチがなんとも好きだ。彼らはこの日の日の入りを拝めたそうで、翌日のご来光も拝めるのだそうだ。朝までここに居座る人もいるという。さっむいよー、きつと。

ぶらぶらと歩いて帰る。

晴れ

Use: Thamel

トマトスープ・タカリススペシャル(チャーハン) 110RS、水 15RS.



十一月十九日 Sukrabaar

寒くてなかなか布団から出られない。日本にいるときと一緒だ。

このホテルに泊まり続けるのは金銭的にやはり大変なので、安いゲストハウスの宿泊候補をいくつか朝回りたい。朝いつもより早めにロビーへ降りると、灯油のにおいがする。このあったかいにおいが大好きなのだ。

二つみて回った。どちらも朝早速ぎで誰もいなかった。しようがないから昨日と違う道を行ってみた。広めの道を歩いていったのだが、ネパール語の数字を覚えようと口に出しながら歩いていたら、どこを歩いているのか分からなくなった。確かにもうすぐ Thapathali というところまで行っていたはずだ。けど今はどこを歩いているのかわからない。うわお。

でもいいものを見た。間口二間くらい、一坪くらいの肉を捌く商店たちの町並み。こういうのは、あるところ〴〵に集まるんだろう。そのほかいろんな町並みを見ながら、なんとなくのオリエンテーションを頼りに歩いていた。もう時間がないので TAXI に乗った。乗った場所は Thamel だった。

この日、ホームステイの候補であるお宅へ小松さんに連れて行ってもらった。藤倉さんも借りているらしい。といっても彼はほとんどいないらしいが。大変いい部屋で、Use よりも断然いい。二間半×三間くらいの広い部屋で、大きなベッドが片すみに。しかも下宿賃も大変安くしてくれるというので、すぐ決めてしまった。場所は Patan の中、南西のあたり。三階の部屋を借りることになった。そのだんなさんは日本語教室を開校しているらしく、奥さんも少し日本語がわかる。これが僕にとってよい方へすところぶかどうかは僕次第。いいほうへすすころばしたい。翌日から入ることに。

晴れ

Use, Thamel

インターネットカフェ 15Rs、夕食 30Rs.

十一月二十日 Sanjbaar

日本人会の大運動会があつて、それに（小松さんが勝手にエントリーして）参加した。手は抜かない。

朝小松さん家族と待ち合わせをしていたのだが、なかなか現れない。待っているうちに一枚スケッチが完了してしまった。といってもなんてことはない、僕が待ち合わせ場



所を完全に勘違いしていたから。ホテルへ戻って場所を聞いて、MAXで行った。待合わせ場所のためのネパールらしい確認の仕方を覚えなければならぬ。会場の名前も僕が思っていたのと違っていた。我ながらびっくりした。

運動会では、こんなにも日本人がいるのか、という感じだった。それ以外にも、特に。でもいい人もたくさんいた。

この日からホームステイ。運動会後十五時ごろホテルで荷物を取って、挨拶に。おいしいチャイを入れてくれる。

一緒に来てくれた小松さん家族も引き上げたので、ひとまずスケッチでもしに散歩へ出かける。とてもいい場所が見つかって描いていたら、やがて子どもたちが集まってきた。何言っただがわからないけど、関心持ってくれているらしい。最初は女の子だけだったがやがて男の子も集まってきた、階段の上にひっそり座っていた僕の周りはずい盛りがりを見せる。一人の男の子がスケッチブックを貸せというのでノートと貸してやった。DANWSHという神様を書いた。シヴァの子どもらしい（スリジャナさんに聞いた）。一人の女の子も実は貸してくれと言っていたらしい。「くれ」といわれているのだと思っただめだといってしまった（日本語で言う、「行ってくる」みたいに、「貸して」とぐれでひと単語を作る）。今度散歩しているときに出会ったら、何かでお返ししよう。

ご飯はおいしい。洗濯ももちろん自分ですることに。

晴れ

Homestay

TAXI 300Rs. ホテル代 68USD

十一月二十一日 Aitabaar

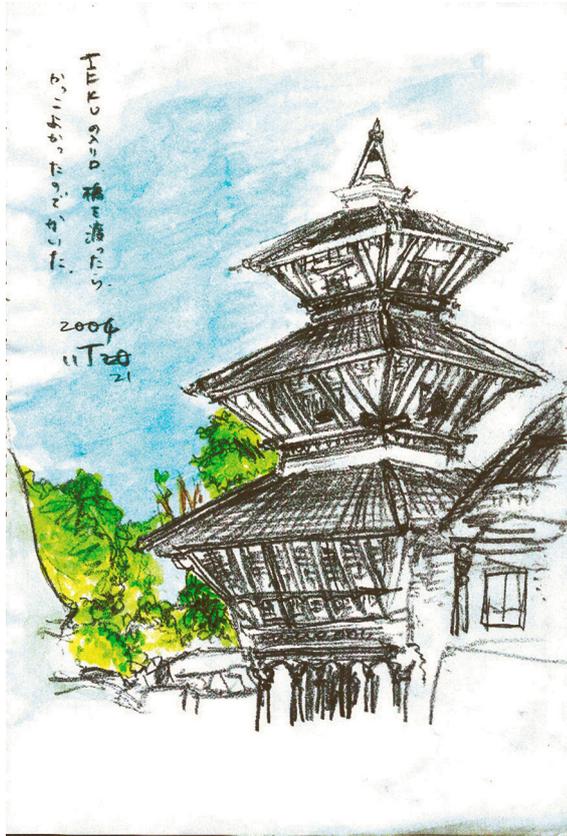
朝は布団の中でごろごろしてしまふ。寒いって言うよりも、何となく。この国へ目的を持ってきて、こんな贅沢でいいのだろうか。

今日は歩き回ると決めていた。まず午前中、一時間ほど南へ下った。Handicraft Centerまで続く大通りをリングロード(カトマンズを囲う環状線道路)まで歩く。リングロードの外側には柵田の風景があった。段々畑か。息が漏れてしまった。ネパールへ来るときに、一番意識していた風景だったから。近いうちにあそこら辺にも、この辺りで見えたクラフト屋さんにも顔を覗かせたい。

お昼を食べて、再度出発。Kathmandu CityとPatanをはさむようにして、Bagmatiという川が流れている。この辺りまで行ってみよう。メインストリートは通らずに、くねくね曲がった裏道を歩いてみた。オリエンテーションだけ意識して。

雰囲気は建物の豪勢さがなくなってくるのだが、Bagmatiまでの道はあまり面白くな





かった。だけれども、川の付近までたどり着くと、対岸になにやらスラムっぽい雰囲気がある。川の南側 (Pan側) には、ベトナムではよく見かけるような、親水空間ともいえる場所があった。そこには女性が洗濯をしている。牛を見張っている男性がいる。気持ちが良いのでここでスケッチを一枚。かの男性に道を聞いて、対岸西側にある「Jem」という地区へ川沿いを移動する。「Jem」へは橋を渡っていくのだが、橋の下には大変なごみ场。どこへ行っても橋の下は汚いものだ。

橋の先には寺院が見える。その前には大階段が水際まで下りていて、階段の前の広場では子どもや女性がくつちやべっている。とても気持ちがよくなって、そして寺院の塔がとてもかっこよかったので、こいつをまた一枚。

この辺りはとてもよい。水際とは大変豊かな空間だ。寺院から歌も流れてきている。ここは「Pachai Bhairav」という寺院の敷地内のようだ。

この二つの水際の地区は、貧しい人々が集まっているのだろう。町並みや、鉄を切っている人、木を製材している人、ごみを燃やす人などの風景がそのような気を起こさせた。少し色の黒い人が多かったような。それでもとても素敵な目をしていた。にこりと笑って挨拶すれば、にこりと返ってくる。

結局「hanai」まで歩いてしまった。もちろんこの間迷った道を確かめながら。オリエンテーションと景観が結びついてきたので、今度はもつと東の地区へも足を伸ばそう。散歩をしていて少し考えた。これまで何人か見たストリートチルドレンも貧しそうなところの家の子ども、そう違うように見えない。もちろんリスクの点で違いはあるのだら

うけど、それは一番か二番かの違いであって、そこに本質的な差は絶対値でどのくらいもないのかもしれない。もつとよく知って、また考えたい。

この日の散歩をしてみても、空間性でいえば、今ホームステイしているところのまちは、抜群だと気づく。またスケッチしよう。

晴れ、朝は曇り

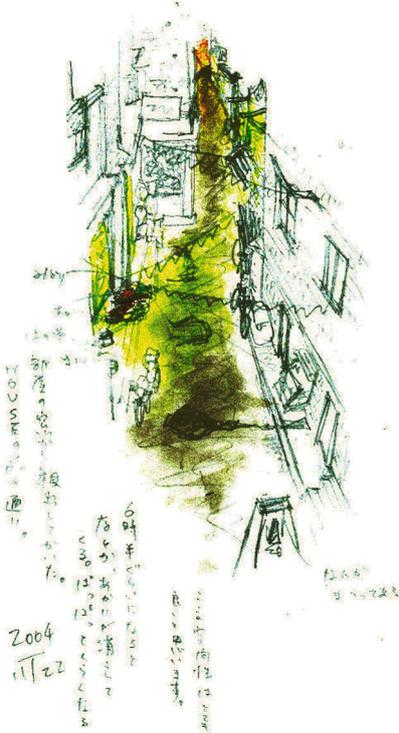
Homestay

下宿代 5000Rs.

十一月二十二日 Sombear

朝通勤時、あの子らはたぶんストリートチルドレンだろう。道端で鉄くずのようなものを集めていた。二人組みのペアの子と、四、五人でいる子ら。鉄パイプのような大きなものを持っていて、朝の埃で霞む遠くの方からだんだんクリアになってくる彼らの姿に、おお、っと思ってしまった。

この日は腸チフスの予防接種を受けるつもりだったのだが、朝から JAZON の彼らが出したという、警察とストリートチルドレンとの関係を調査したブックレット出版の記念セレモニーがあるので、スリジャナさんと出かけることにした。まゆみさんに



はわざわざ僕の送り迎えのために朝から来てもらっていたのに、悪いことをしてしまっ
た。

いつものセレモニーの通り、代表者格の人が前に並んで座っている。その中にレワッ
トさんもいる。彼が前に座っていること、それ自体もこのように形式が重んじられる場
所では、大変なことなのだろう。彼だけは、スピーチのときに手を突っ込んでいなかった。

晴れ、朝は曇り

Homesday

Nothing

十一月二十三日 Mangbaar

こちらの生活にも慣れてきていると思ったら、前の夜はすぐに眠ってしまった。たぶ
ん九時ぐらいだったろうか。疲れたのかな。歩きすぎ？ そんなこと言ったらあの荷
物もちに人たちに笑われちまわあ。やはりこの日も五時には目が覚める。少しネパール
語の勉強をしていたがすぐ飽きて、なんだかこの日は少しハイで、スイングに踊ったり
ごろごろしたりしていた。

レワットさんに事務所の近くで会う。大通りから入ったところに事務所はあるのだが、
彼らJAFONのメンバーはよくあそこら辺にいるようだ。彼はいつもいい顔をしている。

お昼には腸チフスの予防接種をやっと打ってきた。そのとき十二時くらい。珍しく
TAXIに乗った。ちょっとカトマンズの地理や言葉がわかると面白い。曲がらないでも
よいところを曲がったので、「どうしてまっすぐ行かなかったの？」とネパール語で素
直に聞いてみた。彼は「Jump」といった。

ネパールへ来てはじめての停電が起こった。停電に備えたバッテリーだろうか、
ピーツ、ピーツといっている。スリジャナさんが後ろでONOFFと小声でいっている。

この日は始めてづくしで雨も降った。いつも晴ればかりだったから、傘なんて持つて
きていなかった。仕方のないことだから、TAXIに乗って帰ろうと思ったのだが、カト
マンズではこの時期に雨が降るのは大変珍しいことらしい。こういう日だからみんな
TAXIを使っらしく、運ちゃんも足元をみて、料金をかぶせてくるらしい。そもそもあ
まりつかまらならしい。(小松さんによる)

癪だし交渉するのも面倒くさくなって、歩いて帰ってやった。

雨が降って少しひんやり。埃も立っていないくて、これもなかなかいいものではないか。
この霞は排気ガスかな。

この日からやすこさん(藤倉さんの奥さん)が、ホームステイ先へ帰ってきている。

晴れ、のち雨

Homeslay

TAXI 70RS.

十一月二十四日 Budhabaar

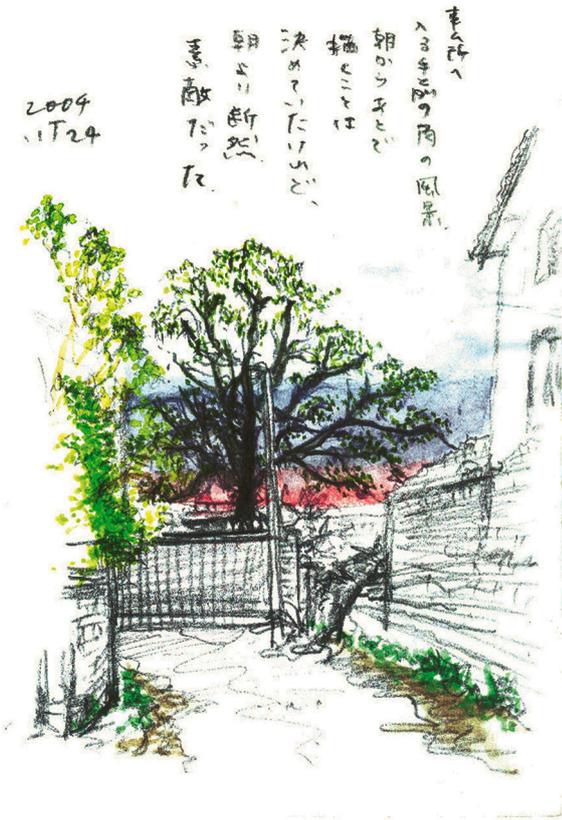
まーた早く寝てしまった。九時くらいだったろうか。

やすこさんとお父さんも一緒に食事をとる。大体夜と朝早くにネパール語の勉強をして、朝ごはんのときに話しかけるのだが、二人がお母さんと三人で話を始めた。少しずつ単語を拾うことができるのだが、やはり入っていくようなことは出来ないよ。でも聞くことも大変勉強になる。ああ、こんな言い方でいいんだ、つてな感じだろうか。

今日は朝ごはんが早めに終わったので、七時半ごろ出発できた。長い時間かけて歩くことが出来るのに、いつもとおんなじ道を通ってしまった。なにやってみて、おれは、寒いと下を向いてしまう。考え事もしてしまう。もうちよつとのんびり、歩きたい。

ちよつとずつ日本のニュースが気になってきていて、小松さんとスリジャナさんが SOUP 関連のミーティングしている時間にくすねて、メールマガジンを探った。日経のにした。

少しでも思ったことがあれば、メモったりテキスト化したり、時間の許す範囲でして



いる。うーん、SOUPのミーティングの後に、僕も加わって子ども関連の打ち合わせをするはずだったが、長引いて明日回し、うーん、のんびり日向でJAFONとCAP-CRONのプロポーザルを読み直した。

朝は曇り、昼から晴れる

Homeslay

Nothing

十一月二十五日 Bhhbaar

少し布団の中でごろごろしたが、起きてネパール語の勉強を試してみた。夜より朝のほうがすっきり頭に入ってくるような気がする。これでごろごろしなくなったらよいのだが。

六時を過ぎると夜が白々と明けてくる。屋上に洗濯物を干しにいったら、ヒマラヤが見えた。はじめてみた。

まだ行ったことのない道を行こう。でもやっぱり道に迷うのだ。ちゃんとした地図が手に入るわけではないし、これは自分の体の中に空間と方向とをキヤッチするアンテナを持たなければならない。まず歩く！

Patanの町はよい。Thamelも人がいなければ素敵な町並みで、あの南の辺りのエリアならばとても気分がいいのだろう。だがいかんせん朝から観光客相手のリキシャがやってきましたりするし。Patanは見知らぬ僕という日本人を見る目さえ怖がらなければ、静かであり。神様はいるんなどころにいるらしい。道の脇やドアのふもと、地中に掘り込まれていたりする。

やはり道に迷っていたのだが、Patan Gateが目の前に現れて、やっと地図上の位置がわかったので、もうちょっと散歩してみたくなった。まだ出勤定刻まで時間があるし。と思っていると建物の中庭への通路から人が出てきたので入ってみた。天井に当たらないように頭をかかめながら。中庭には出たものの、もうちょっと奥まで行けそうなので、さらにくぐって行ってみた。今度こそ行き止まり。女性が二人洗濯物をしていた。どう見たってあやしいので、首をすくめて“Bato... (道はあ...)”と言ってみた。そしたらあっち。だって。あっち。だって!? 行き止まりではなかったのだ! でっかいでっかい町家のような空間。外から奥の奥まで、つながっていたのだった。とても素敵だと思つた。で、そんなことしているから、やはり道に迷つた。やっとこさ道へ出てきてあらためてそれを確認する。

でもこの日はヒマラヤがよく見えていたので、あっちが北だろう、だからあっちだろうってな感じで歩いてみた。畑が見えてきた。おそらく地図にはない道を歩いている。



いっしょで、描きました。
ミコは子ども遊んでいたり、そのあついたりする
れ。ほりうどもたらひ集めて来てしまつた。

9時 6:00 AM
2004
11T25

この辺に新しい住宅がたくさんできています。建設中の建物がたくさんある。こちら辺に住んでいる人の家かな。レンガの建物で、変な住宅地っぽい感じだから、そうではないのだろう。これは僕の勝手な考えだけど、すごく小さなスケールで、問題にならないような感覚で、タルーたちが追われたような状況がここにもあるのだろう。東京の木造住宅のように。後でまたスリジャナさんにも聞いてみよう。

川沿いに出てきた。いよいよのよそ者っぷりに不安になってきた。どこにいるのかも分からないし。川に沿った草むらの獣道のような道を、分かれるところまで歩いてやろう、と思っていたら、程なくして橋が見えた。たぶん、最初に地図で見たとくに行きたかった橋だ。ほっとして草を分けていくと、レンガの寺院がひょっこり。この出会いはとても美しい。これもスケッチしなければならぬ。そして寺院の向かいにはスラムがある。川と橋と寺院とスラムと。うーん、この間「Home」へ歩いていったときの風景とダブる。今度はカメラを持たずにあそこら辺を歩こう。

今日はJAFONとCAP-CRONのプロポーザルのチェックがあった。論文の審査をしているようで面白い。この数字の妥当性は？。この章と節の関係は？。そのほかにもこのミーティングでは勉強になった。

帰り、ヒマラヤが夕暮れにとてもきれいに見えたので、描きたくなって足早に帰った。この前のようにステイ先の屋上から眺めてみたいから。ステイ先には誰もいなかった。仕方がないし、まだ明るくて調度よいので、この間からスケッチしたかったステイ先の近くの広場へ。あつという間に子どもたちの群れ。僕の描き終えた後、やっぱり貸せとというので貸してやったら、二人の少年が描いてくれた。とてもイメージが似通っている。というか、最初の彼ので喚起されたものかもしれない。

明日も来いって、絵の具を持って。どうしよう、明日は遅いんだよなあ。「帰らなきゃ」というと、すぐ「そっか、いいよ」といつてくれる。いい子たちだ。

晴れ、ヒマラヤが見える

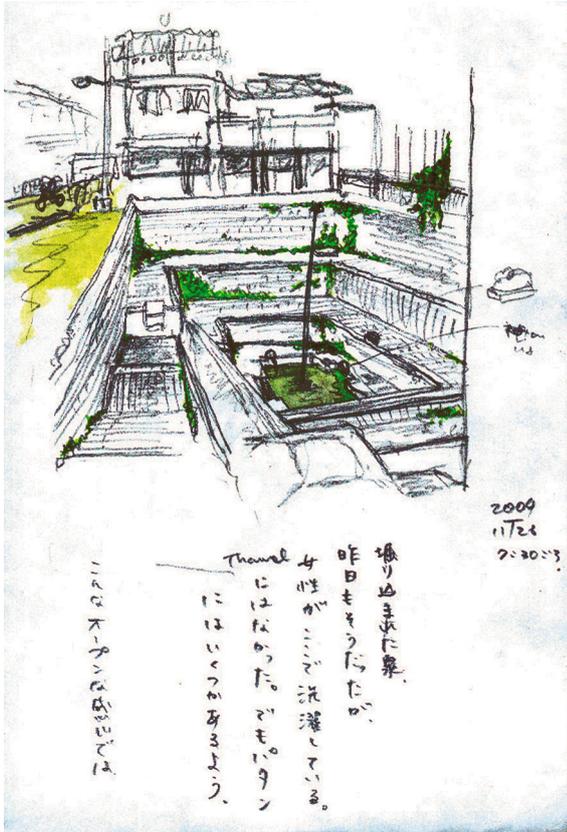
Honesty

Nothing

十一月二十六日 Sukrabaar

もう夜遅くまで起きているのはあきらめ気味になってきた。だんだん慣れればよいではないか。

この日も早く出ようと思っていた。七時前にふらりと部屋を出ると、聞きなれたリズムの低い声がお父さんがダイニングの一隅で経を唱えていた。香の煙がふわんと漂ってくる。邪魔しちや悪いと思って、なかなか入れずにいたら、お母さんが気づいてくれ



た。座ってもよいというので腰掛けてお茶を飲んだ。あつたかくて、あまーいのだ。

経は毎日読んでいるものらしい。今まで気づかなかつたのが不思議だ。朝はかなり早く起きているというのに。これはネワールのものでなくて、ネパールのものだそうだ。といっても神様に対するものでなくて、先祖に対するもの。一定の早いリズムで読んで、途切れるところでゆったりと、そしてかいーんと金属の音。経を聞いているのは好きなので、気持ちのよい朝を迎えた。

昨日めぼしをつけていたところへ足早に訪れ、スケッチをとった。でもこの後また昨日と同じ道に行くのはもったいないと思つて、事務所の裏の川沿いを歩いていった。川沿いはとても気持ちがいい。

この日は午後から JAHON と CAPCRON とのミーティングがあつた。ネパール語で行われるのももちろん何を言っているかわからない。でも聞こえる単語を拾つていって、何を言っているのか想像していると、なんか主体的に取り組んでいるような気になつてきて、わくわくする。のだけれども、勝手な想像が一人歩きして、すっかり心が離れてしまつていた。これはいかんわ。プロジェクトに対する理解がもつとあつて、ネパール語で話すことができれば、とても楽しいと思う。彼らがどういふ思考の持ち主なのか、日本語で話しているときみたいに感じてみたいもの。

今日はネパール語レッスンで同じだった、田中さんという人がちようど時期が重なつてカトマンズへ来ているというので、晩の飯でも一緒に喰らおうと Thamel まで出てきた。といつても CAPCRON のミーティングが長引いたので、待ち合わせを一時間遅ら

せてもらって。

彼女はまったくの観光客で、そういう人とたまに会っていると面白い。まあそんな程度もあるとちょっとアレだけれども、彼女は観光客っぷりを逆手にとって、こっちの人たちの生活を盗もうとする、僕はこっちの人の中に潜んで自分の殻を破ろうとする。彼女の方が地元の人にとっても潔いかもね。

晴れ

Homestay

Nothing

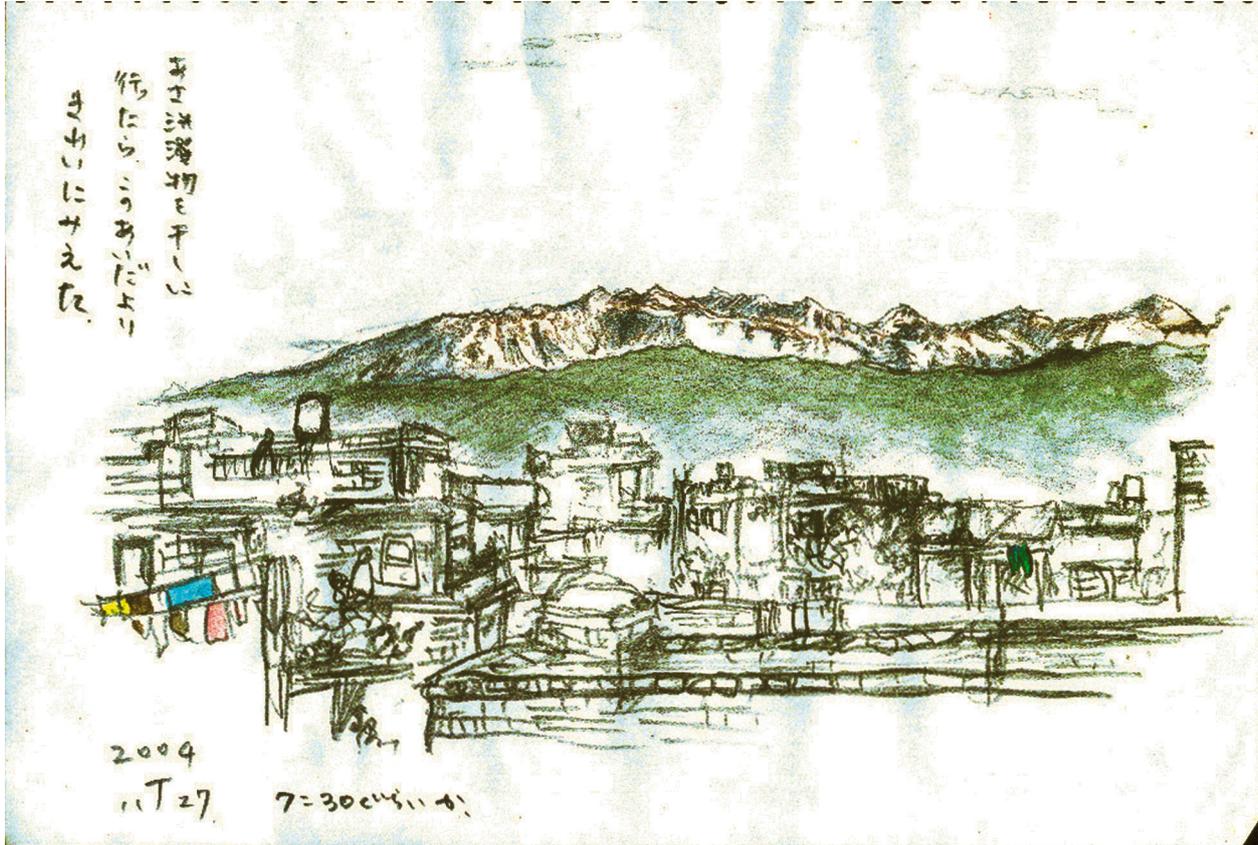
十一月二十七日 Sanbaar

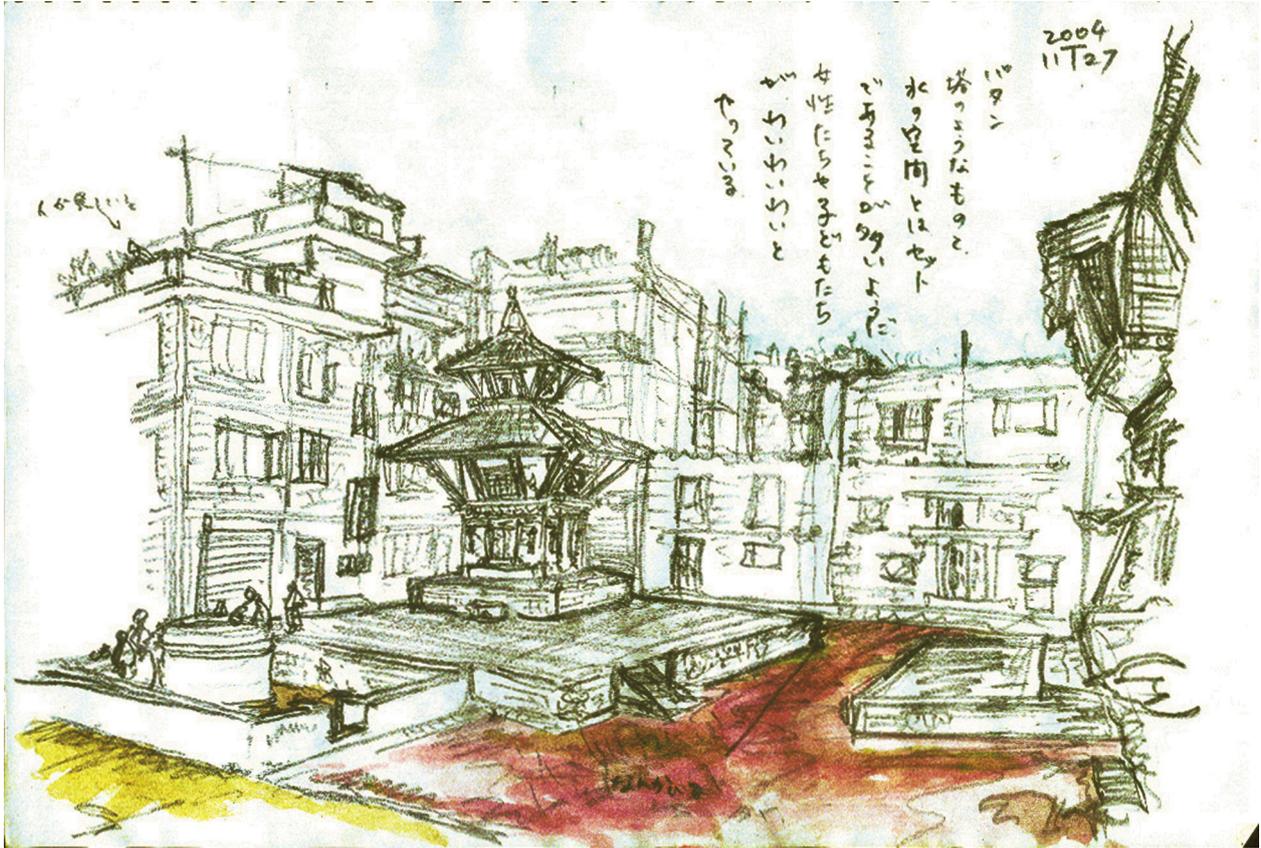
朝洗濯をして屋上へ干しにいったら、ヒマラヤさんがとつてもくつきり見えていた。たぶんこれまで一番見えた日ではないかと思う。それくらい朝から晴れていた。

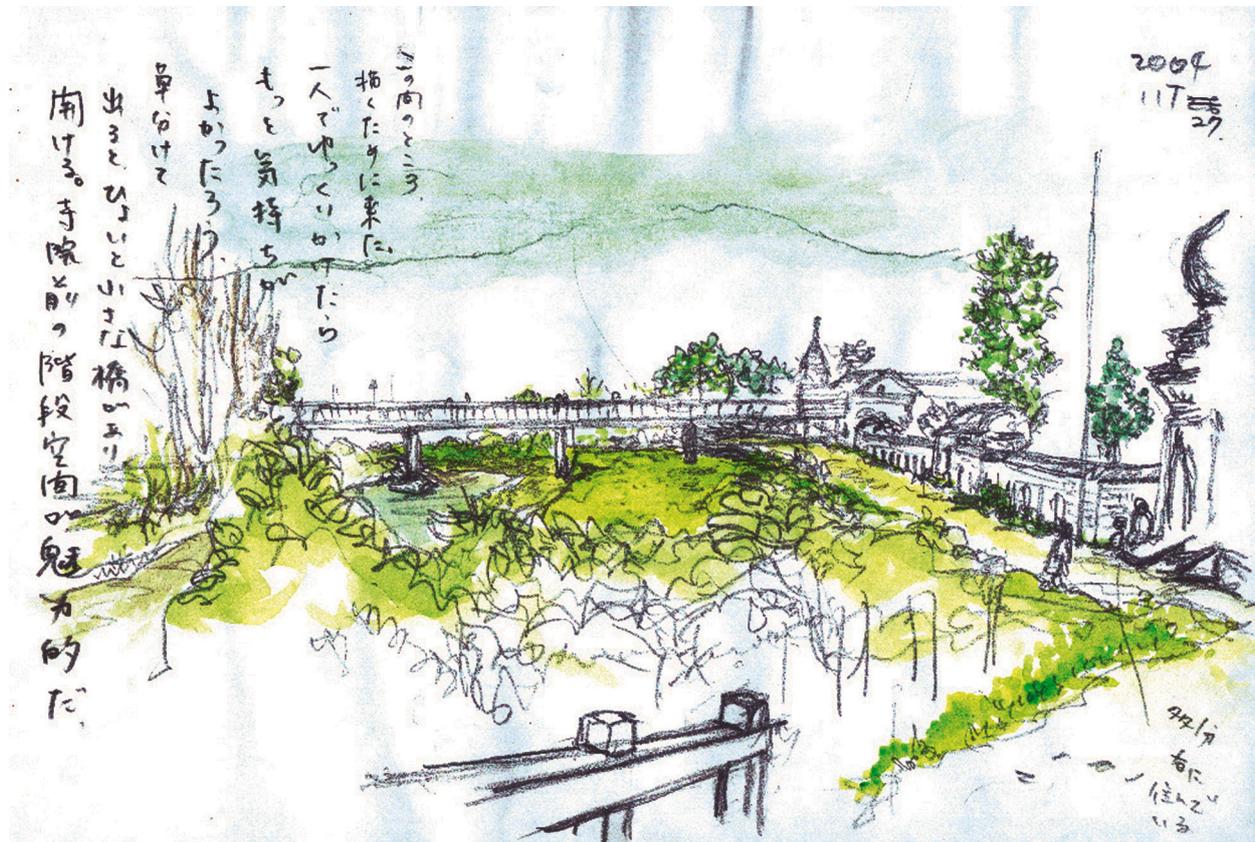
おかげをいただいて、やすこさんと少し話していたら、地図が手に入るといって Thapatkai に行けば map-shop もあるというので、もっと詳しい地図が手に入るだろうとのこと。よかった。あまりにも今もっている地図がわかりにくくて、あと地名もあまり載っていないので、うんざりしていた。行ってみようと思う。

すぐ事務所の方へ行ってもよかったのだが、足は自然と Patan の方へ。やすこさんから借りた地図があつてよかった。迷った道を確かめ確かめ行こう。Patan の広場近くで洗濯をしている人たちがいる。塔のふもと。少なくとも Patan では、どうやら水とこのような宗教的な空間とは、かなり密接な関係があるようだ。その後やはり川原まで歩きたくなくて、この間見つけた寺院と橋のところまで行ってみた。そして対岸のスラムの方へ。このスラムというのは面白い。この中でも商売があつて、タバコなんかを売っている店があつた。多分こういう経済が回っているんでしよう。そしてきつと、きちんとしたルートを持つているんだろう。表通り（スラムが連なつて通りができている）を歩きながら家を覗くと明るい光が。川原の方で野菜を作つたりする様子が伺え、その風景を想像してみる。各家から奥の光が見える。この時間は、ちょうど子どもたちが体を洗っていた。道の反対側の草むらでは、家族っぽい人たちがどつきり座つて日向ぼっこをしている。2011 先くらいには牛たちが草喰っている。なんか平和だ。

ダッカでは、こういう近くのスラムからストリートチルドレンになっちゃう子がいると聞いていたっけ。またちよつと考えてしまった。レイプの話や嫌がらせの話。JAFON のプロポーザルや本にも載っていたけど、これはストリートやそういつた背景を持つている子だから起こることなのだろうか。人間がある程度の時間そこにおいて社会をつくっていくと、自然と起こるものなのかも、と思つた。出来事としてはきつと起こる可能性





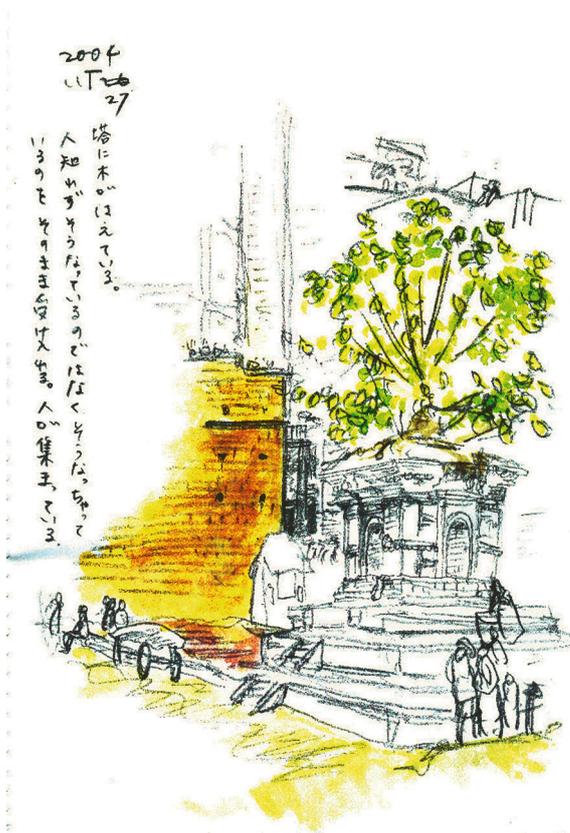


があるのだろう。日本でも、その他の先進地でも、今もきつと起きている。別にそういうことをする人間を認めようとか許そうとかいうんでなくて、そこでむやみに怒ってしまつては、本当に必要なことが見えなくなつてしまうのではないか、ということだ。被害者と行為者両方へのまなざしが必要だから。ひとつの考え方として、持つてはおこう。Aparajyoの地域へ向けた活動が、とても重要だということをもまた思つてみた。

事務所まで、川沿いの道を進めるだけ歩こうとしてみた。とても大きな木があった、その下におうちがあった、蔓の草の下の日陰で人がたむろしている。とても気持ちのよい空間だ。スケッチしていたらいつの間にか後ろに二人いて、ずっと見ていてくれた。描き終わった後、そのうちの一人が見たいというので、スケッチブックを渡してやった。彼も絵を描くのだという。色付けはしない、ペン画なのだそう、部屋に自分の描いたものを飾っているという。彼と一緒に歩いて道まで出てみると驚いた。これはタライのお祭りで下りていった道。そう、事務所のすぐ近くだったのだ。事務所の裏にこんな素敵なところがあったなんて！小松さん知らないかもしれない。

午後はPanの東側を歩こうと思つていて、昼を食べた後まもなく出かけた。ちよつと小高い、公園の入り口のような階段が見えたので、何か気を引かれるものがあった上つてみたら、芝生が広がっていた。周りは杉かなんかで囲われていて、住宅街とも隔たりがあつて、ちよつと気持ちがいい。地元の人もなくさん集まつていて、何人かずつのグループになつていて。とても気持ちよさそう。きっと誰かと一緒だったら、僕らも座つたり寝転がつたりしていたらう。





Mangal Bazar の前の道を挟んで、北側と南側とで雰囲気がちよつと違う。タイプーというらしいが(あとでやすこさんに聞いてみた)、それをかぶっているネワールの人たちが、彼らの作る空間と、反対側のまたちよつと違う顔立ちの人たちとの空間の違い。南側にはあまり絵心のわくようなところはなかった。ネワールの空間の気質の高さがとても気持ちよかった。また、南側では女性が頭を洗ったりするのをよく見かけた。僕がホームステイをしているような地区ではまず見られない風景だろう。メインストリートから一本南へ入った道には、Handi Craft という看板もいくつも見られた。ショップかどうかわからない。もしかしたら local NGO が入り込んでいるような地域なのかもしれない。

事務所へ寄って、メールなんかをチェックして、ステイ先へ帰った。

晴れ(快晴)

Honestay

ラジオ 350Rs、地図 149Rs、TAXI 130Rs.

十一月二十八日 Aitabaar

ちよつと昨日歩きすぎたかな。さすがに足が張っている。でもそんなに疲れというよ



うなタイプのものは感じない。よく寝、そしてよく食べているからだろうか。試しにス
ケッチした場所と日にちを地図に落としてみた。自分がどういう目で地図を眺めている
か、わかるような気がしたから。

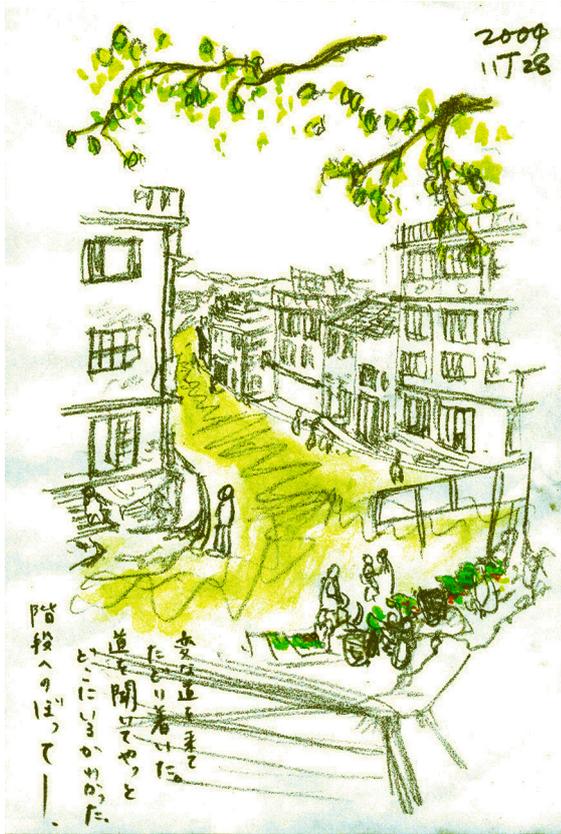
ネパール語の勉強をしていたが、ちよつと考えごとの頭がいうことを聞かなくて、思
い立って事務所へ出かけた。ついでにメールやらもちよつとやって、ステイ先へ。今日
のお昼はヌードルをいためたもの。ダルバートも好きなのだが、これも好き。ジャンク
な感じ、でもファストフードではない感じ。

食べてすぐ出かけた。

この日はなるたけ分かりいい道を歩こう。最初から地図もあるので、地図の位置とを
確かめながら。すると Inter National な建物が集まっている場所へ。何ということだ！
何しに來てんだ！ 今にも人が死んでしまいうような、息苦しい空間。人間の香りがまっ
たくしない。少し気分を書しながらもまっすぐ行くけれども、地図があってもわからな
いものである。方角がわからないし、スケールもよく分からない。

そんなこんなでため息をつくように歩いていたのだが、やつと気分が少しよくなった。
ちよつといい空間に出会ったから。こちら辺りは、たぶん所得でいえば貧しい人たちな
のだろう。空間への接し方からそんな感じがする。雑というか、おおざっぱ。悪いとい
うのではなくて、おおらかさがあり、例えばネパールなんかでは、気質が高い感じがす
る分、少しちまちました感じがある。

この間の Teku のあたりの橋を渡って、ぐるっとスラムっぽいところを回って、ト



リブバン大学のほうへ歩いていった。わざと大回りしていったのだが、Kuleswor (Kathmandu City) の南西部、Tripeswor Road と Ring Road と Bishnumati River に囲まれているところ() のトリブバン大学へ向かう南北にまっすぐ伸びた道は、なんとまあ、つまらないことか。何とかトリブバン大学にもたどり着いたのだが、入ってすぐ「飽きそう」と思った。こりゃいかん、なんかあるかもしれないから、誠実に歩こうと思ったんだけど、やっぱりすぐ飽きてしまった。この大学内で見ただよかつたのは、たぶん敷地内にある柵田の場所だけだった。

大学敷地を飛び出して、道でない道を行く。そもそも地図に載っている範囲なのかもあやしいものだ。足が汚れながら、もう、ちよつと気持ち悪い感触になりながらも歩いてみた。やつと出た道っぽい道の交差点合から、大体の場所を検討つけた。人に聞いてみたらあつていそうなので、安心。ここは Kripur のある交差点。ここにちよつとした市場ができていて、階段の下に数人の女性がござ広げて売っている。階段にのぼって、この交差点をひとつスケッチしてみた。

もう地図の端っこだし、この道を行くと地図から外れてしまうのだが、その先でこの道とこの道とがつながっているだろうと、地図に乗った指先で投げやりな予想を立てて歩き出した。不安になりながらもこつちだろという道を行く。ずつと下る道。水浴びしているアヒルたちと犬数匹と、子どもがたぐさん遊んでいる場所が、とても心地よかった。

やつとこのことばつと道へ出て、さつき牛たちも渡っていた橋を渡る。こちら辺も

住宅地になりそうな雰囲気だ。ここからは一本道で、ステイ先のほど近くまで行ける。途中の Dhubihat という chowk へ出た。まちの周縁の地域っぽさと、地形と人間臭さがある、ちょっといいところだった。すぐ近くなのでまた来たい。

十八時ごろステイ先へ到着。ちょっと疲れた！

晴れ、昼間は暑いくらい、日に焼けた

Homestay

水 15Rs.

十一月二十九日 Sombaar

とても寒い。

変な夢を見ておきた。人がどんどん入れ代わって行って、シチュエーションもどんどん変わっていく。僕にとっても影響のある出来事が続いているのに、僕だけがついていけない、そんなお話。今朝のご飯はおかゆ。とてもおいしかった。たぶん塩だけの味付けで、しょうがとにんにくが入っている。

今週は SOUP のフィールド (Patan 地区) を散歩する週としよう。大回りしていつも出かけよう。塔がごちゃ混ぜになっていて、そして道幅の狭い町並みは気持ちがいい。でもまだ生活までは見えてこない。urban poor、って誰だろう、硬いレンガの中にしまわれているのだろうか。と思いつながら歩いていると、畑が建物の影に隠れていた。掘って小屋みたいなのもあった。これが家かどうかわからないし、貧困と直接結びつくものかも分からない。でも予想外の風景に出くわしたのだ。もうちょっと時間を使って歩こう。ああ、こういう空間が裏に隠れているのかあ。

Kiritpur まで歩くというのは、結構なことらしい。家に帰っても、お昼のお話でも結構驚かれた。カトマンズ事務所の資料整理プロポーザルをつくったり、ちょっとしたお願い文をつくっていたりしたら、いつの間にやら十六時。朝も見て回っただけだったのだ、今日はスケッチ取れるだろうか。

帰り道はいつもほんの少し朝とは違うルートを帰っていたのだが、今日は朝の道をもう一回帰ってみようと思う。Patan の方から。これはオモシロイ。今週はずっとそうしよう。とても暗くて、そういう生活感が漂っている。ぶらぶら見て歩いていると、なんか人が集まっていた。ちょっと覗きにいってみたら、女性が水を汲みに来ていたようだ。そこにはおっきいタンクがあった。すぐ近くには寺院にくっついている水の場所が。そこにも人だかりが出来ていて、水汲んだり男性が体を洗ったりしていた。そういう時間帯なんだな。ストリートチルドレンばい子も壁の上に並んで座っていた。

ぐるぐると覚えてたの道を歩いてみてステイ先へ。洗濯物を取り込みに入ったら、星

がきれいだった。

晴れ、でも今日の朝はとても冷える

Honestay

TAXI 35Rs.

十一月三十日 Mangalbaar

この日はCAPCRONのおねいちゃん方とフィールドを歩くことになっていた。朝八時の集合だけれども、その前に待ち合わせ場所のJawalkehalのロータリーをスケッチすることにしよう。ここで働く子どもがいるんだというから。七時十分ぐらいから描き始めたのだが、まだ「Tempo」なんかも出ていない。屋台もビニールシートをかぶったまま。火を焚いて暖をとっている男たちが向こうへ見える。

描いていると人が集まってきた。でも、そりゃ出来た、となると大体の人が散らばっていく。僕の足の痺れが納まるまでずっと見ていてくれるのはいつも一人か二人。こういう人たちがいるのがとてもうれしい。「では」なんていってお別れをする。

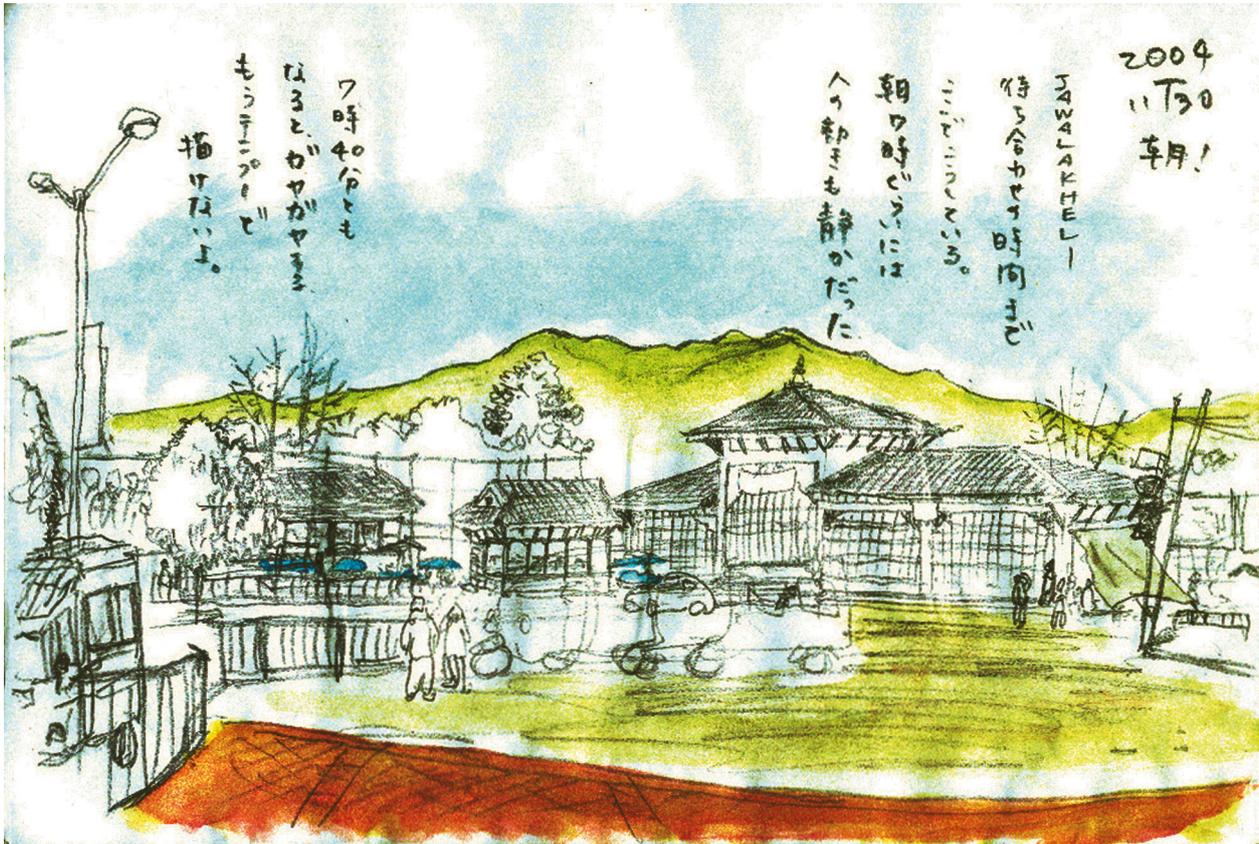
まだ少し時間があったので、小回りをして待ち合わせ場所が見える場所に。というのは、待ち合わせ場所がおおざっぱで、どこをさしているのかいつも分からないのだ。大きく見渡せるところにいたら、ステイ先のお母さんが通った。なぜこんなところに？向こうにしてもおんなじことを思っている。小松さんと待ち合わせをしているんだよ、とニュアンスで伝えた。すると見覚えのある顔立ちの女の人が二人で近づいてきた。

小松さんが少し遅れて到着したが、最初の目的地に向って出発。Langalkhalという市場がたつ大きなロータリーへTempoで移動した。ここにたくさんのお働く子どもがいるのだそうだ。この近くまでは一度歩いてきていたから、特にあせりはしなかった。

早速子どもたちにあった。もうCAPCRONの彼女らとは顔見知りのようで、べらべらべらと話し始めている。子どもたちはおしゃべりだった。色合いの組み合わせや着方が垢抜けた感じがしていて、かわいい感じだった。僕はなんだかそれがうれしかった。でも寒そうな格好だ。ふるふる震えているヤツもいる。僕も明日からもうちよつと薄着にしよう。

ちよいちよいすぐ近くを移動しているうちに、数人集まってきた。言葉が分からないことにつらくならないように気をつけて、よく彼らや周りの環境を観察しよう。彼女たちがいるいろいろ聞いている、小松さんが時々訳してくれる。

Mangal Bazarの王宮跡の方へ移動することに。その途中で彼らは何時ごろから働いているのか、CAPCRONのおねいちゃんの一人に聞いてみた。ブローケン・イングリッシュ・ネパリーで。朝七時半ぐらいから八時ぐらいだというので、この日朝描いた絵を



見せてみた。最初は人が少なかったんだけど、七時四十分くらいにはテンプーだらけの人がたくさん歩き始めていて、みたいなことを言った。そしたら少し彼女のガードが緩んだ気がした。スケッチひとつでこんなに変わるもんかあ。役に立った、案もんだ。歩いている途中で、ずっと一緒に来てくれていた男の子がすり集団もあるんだって話をしたらしい。お金をあげようか？　みたいなことを彼女らの一人にしたそうなのだ。彼女はそんなことするんじゃない、って言ったらしい。本当にそういうリアクションでよかったのだろうか。

調査やお出かけに行っていた田舎の方でも、児童館でも、仲良くなっているんな話を始めたとき、ちよつとしたハプニングじみたタイミングがあったとき、"実はこんな馬鹿なことやってさあ、"、"みたいなことを話してくれるときがある。彼らはそれを意図してやっているわけではないが、結果として僕らが試されてしまう瞬間がある。そういうときに間違うのと、間違わないのでは大分違う。そして間違った人は大体それに気づかない。僕が思ったように彼とCAP-CRONのおねいちゃんのやり取りが進んだのなら、そして僕の考えてきたことや感じてきたことが正しければ、彼女は間違った。少しシュンとなった。

Mangal Bazar ではちよつと小さい子どもたちが会った。彼らはここで Street Sale をしているらしい。外人向けにバッグなんかを売っている。100Rs. くらいの稼ぎになるのだそうだ。その稼ぎはお母さんに渡すんだって。彼らは Street of children ではないようだ。彼らは陽気で、ここで一緒にまち中でよく見かける蹴鞠のような遊びをたしなむ。これが難しい。こういう時間のすこし方は児童館でいろいろ試してみたが、役に立っているなあ、という気がした。国境を越えても通用するのが分かった。まあ、確信してはいたが。

この後お茶を飲み。付いてきてくれている男の子も一緒に行ったのだが、印象的だったのは、彼が腕をまくって見せてくれた、ここに彼女(ができたら?)と名前の刺青を彫りあうんだ、って言うっていたこと。小松さんに訳してもらったとき、日本語で「いいねえ」って言うってしまった。中学のころカッターで彫っている友達たちがいつぱいいいよ。あん時彼女がいたら、僕もやっていたろうよ。

彼とも小松さんとも別れて彼女らと西の方へ。"カバル"とみんなが呼んでいるごみ焼き場に行つて、その後事務所へ出勤。十一時を回っていた。

少しミーティングをやった後、JAFON' CAP-CRON' SOUP を交えて、"わくわく"のミーティングに。途中でなにやら盛り上がった。というよりもめているような感じさもある。どの職業の子から何人、JAFON' CAP-CRON' のどちらが呼ばうか、みたいな話だっただきたい。うーん、この日はよく考える日だなあ。

どの職業から何人やらなんやら。そういうものなのだろうか。このプログラムの本来の目的は、ネパール、バングラデシュ、日本の国境を越えて、文化や生活に対する知識

を持つとう、と言うことだったはずだ。すべての職業をカバーしよう、というのは、なんかNG的というか、言い訳がましい日本の官僚的というか、間違った平等意識だったり、子どもへのまなざしだと思う。

この写真たちは表現であり、プログラムはその表現に関わる意思の交流だ。子どもその人自身にやる気があったり、その人にしか取れないような写真を撮ってもらえるようモチベート出来るかどうかが我々であったり、Local NGOに求められているのだろうと思うのだ。そういつた観点から見返してみれば、子どもたちの職業なんてたまたまそうなのであつて、職業ごとに見ている風景が違うだろう、より多様な視点を得ることが出来るだろう、などということはないのだ。あるいはそれは消費者的な発想だ。だって学校に行っている子に野球部かサッカー部か、あるいは片親かどうかなんて問わないだろう。問うたとしたら、それは大間違いだと思う。

このミーティングの後、JAZZとのプロジェクトに関するミーティングが続いてすっかり遅くなった。少しやっておきたいことをやって、事務所を出た。

さすがに七時ともなると人が少ない。昨日角にいた野菜売りの女の人もいなかった。と思っていたら、もう一箇所のところはまだ二人いた。昨日はそこには四人いた。すごく寒そうにしている。でもいてくれて安心というか、うれしいという気持ちを感じた。なにやら街角に警察の人や軍服っぽい着物を召している人が多くいる。抗議行動があったりするから、警戒しているのだろうか。夜はそもそもいるもんだが、少し人数が多いような気がした。

夜の住宅地の雰囲気は面白い。暗くて星を見ているのが楽しくなる。でも暗い細道に入ると、本当にわずかな光という感じで、さすがに後ろに人が歩くとかドキッとす。

ステイ先の近くまで着くと、この間スケッチしていたときにいた男の子たちが焚き火をしていた。いつかあれに加わりたいなあ。いつもよりすっきり遅くなってしまった。お母さんにどうしたの？と聞かれた。

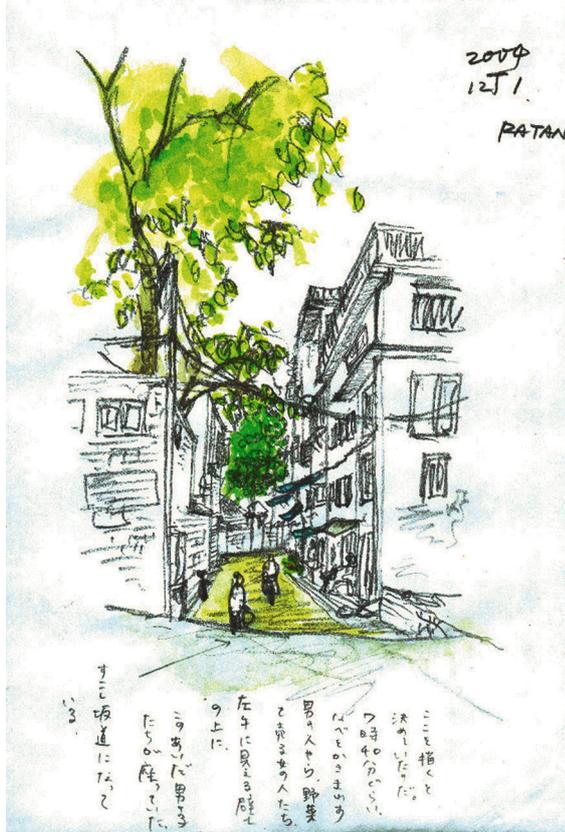
晴れ、今朝も寒い

Homestay

電池 35Rs、テンプー 5Rs

十二月二日 Buthabaar

朝洗濯物をして、そしてシャワーを浴びて、そのまま屋上へ干しに行った。帰ろうとしたところ、東に見える山並みの間から、ちょうど朝陽が上ってきたところだった。谷間から照らされたてっぺんと、陽のまだ当たらない山肌とが光のすじでまっぷたつに分かれた。隣の家のおばあちゃんが朝陽をじっと見つめていた。お供え物をして、その



後おてんとう様に手を合わせた。拜んだ。それら全部を大好きになつて、僕も朝陽を眺めていた。おばあちゃんにあいさつをして、朝陽のほうを指差してみた。おばあちゃんは一度うなずいて、振り返つてもう一度朝陽に手を合わせた。

この日も Rain の日。まだ行っていない道を行く。太い通りにいつしか出てしまつて、それではつまらないのでまた中庭の方へ入つていった。この間とはちがうとこ。でもやっぱり出口が分からなくなつて道に迷つた。

この日はスケッチするところを決めていたので、そこでちゃんと座つて描いていた。大人たちも寄つてきたが、女の子が一人、ずっと見ていてくれた。彼女は水を呑むるようなポリ容器のようなものを持っている。

描き終わつて歩き出すと、彼女は僕と同じ道を行く。話しかけてもあれだつたので、だまつていろいろ見ながら歩いていった。橋を渡つてスラムのところまで出ると、彼女はにっこり笑つてそつちの方へ降りていった。ここの子だつたのだ。僕はこの日からこのスラムのあたりを通つて事務所まで行こうと思つていたので、ちよつと戸惑つた。だつて付いていつているみたいじゃない。あやしいかなあと思ひながらも、居直つて歩いていった。牛や鶏や、女性や子どもたちの営みを眺めながらいると、一角で彼女は家の中へ入つていった。最後に手を振つてくれた。

事務所の近くにもオモシロイところがあるようだ。裏の川沿いの空間に続く、レンガのごちゃごちゃしたあたり。とても陽気な雰囲気のある、迷路のようなごっちゃごちゃ。しばらくは続けてこら辺の裏道を歩くとしよう。

この日はJAFONのスタッフ面接があった。見覚えのある人がたくさん来た。そのうちの一人のラズーという彼は、ちよつと僕に興味があるらしい。日本での連絡先を教えてほしいというので教えた。そして彼の顔を描いてほしいんだと。リアルに。(前の日に事務所でミーティングしている際に彼の似顔絵を描いている) もちろん引き受け、履歴書に貼り付けるような彼の小さな写真をお借りした。

晴れ

Homesday

Nothing

十二月二日 Bihibar

六時前に起きて、水を飲んでちよつと運動して。四時前から目が覚めていたのだが、ごろごろしてしまった。いけないなあなんて思っていたが、なんとなく布団から出られずにいた。

昨日会った女の子にもう一度会った。橋を渡っていたら、前を歩いていた。

事務所のすぐ裏には、ちよつと貧しい感じの人が住んでいる。ここは人間臭さがある、とても好き。聞こえはしないんだけど、がやがやした雰囲気がいい。朝はモノを出したり子どもが遊んでいたりと、騒がしい。

この日はスクマヤさんがお休み。翌日までお休みというから、お昼はどうすんでしょう。と思っていたら、案の定お昼は外に。小松さんが打ち合わせに出いたので、スリジヤナさんと二人で出かけることになった。彼女も食後は銀行に行く用事があるというので、バイクに乗っていくのだそうだ。レストランで会いましょう、って言うから待ち合わせの場所を決めようと思つて、地図を見せたら、これでは全然分らないという。地図に慣れていないのか、女性に良くある地図苦手っことなんなのか。おおよっぱな地図を描いてくれて、このレストラン、と教えてくれた。先に歩いていたら、レストランがひとつ、ふたつ、みつつ、っていくつあるのよ。結局大分戻つて、スリジヤナさんを待っていた。そのレストランはスクマヤさんがお休みのときに良く行くところなんだつて。

小松さんが戻ってきた後、ネパール事務所のプロジェクト関連のオリエンテーションをもらった。ネパールのNEO(NGO/LNGO、日本のNGO、その他)の捉えられ方、その中でシャプラの位置はどんなもんなのか、など、少し質問してみた。

ステイ先に帰ると、やすこさんのお友達がNepalgaitiから来ていた。ご飯の食べ方がきれいだ。青唐辛子をそのまま三本食べたらしい。お母さんがおどろいていた。ネパールのお母さんとも打ち解けて話しているように見える。ネパール語を聞く耳がほしい。あせらないあせらない。たつろうさんがそろそろこっちへ来るという。楽しみだ！

晴れ

Homestay

バターパニールカレーあんどライス(昼飯) 85RS、地形の載った地図 550RS

十二月三日 Sukrabaar

朝洗濯すると、ちよっと朝の時間がもつたない。眠くても出来ることだから、これからは夜やろう。

寒いが歩いているとすぐぼかぼかしてくる。健康だあ。なるべくポケットにも手を入れないで、右手で左手を温めながら歩く。やっぱりいつもと違う道に入りたくなくて、入ってみた。だんだんオリエンテーションがつかめるようになってきていたからいい気になって、小道に入ってみた。やはり裏の道の方がオモシロイ。くityと曲がつてみると、人が集まっいて、僕を「なんだっ？」ってな感じで見てくる。思いがけない風景のような気がするが、思い返してみると思ったとおりの場所に人は集まる。

しばらくすると知っている道になかなか出られないのであせつてきた。分かっているつもりが全然違う方向へ進んでいたらどうしよう。地図を取り出して広げてみたら、ぼつと出たところが Dubai 広場へつながる通りだった。この道からも行ったことがなかった。単純な家のつくりだが、塔の複雑な装飾やちよつとした空隙、でこぼこ道が面白くしていると思う。あと各家の前の階段状の台！ これがあるのとないのとじゃ、雰囲気が大違いでしょう。

ここ三日間、あの女の子といつも出会う。「今日はなに描いてんの？」みたいな雰囲気、この日も覗き込んできてくれた。彼女は橋の前のも、軍服を着た男の人にからかわれていた。そういう子なんだな。

事務所の裏のところでは、八時半ごろ出荷に出る人、ものを持ち込む人、いろいろな賑やかだ。この日家の駐車場のような店構えの出入り口から自転車に積まれて出てきたのは里芋のようなもの。それだけ入っている。面白いなあとおも。まち中では、肉だけ台に置いて、ずつと売っている人がいたり、卵だけ売っていたりする。他の国でもそうだろうけど、どこで何度見ても苦笑してしまう。この里芋も、たぶん狭い庭のような畑で作ったんだらう。次いで目の前に現れたのは自転車に逆さにぶら下げられた鶏たち。たまにくくと鳴く。閉じた目は、ふいあーつて感じ。

帰り道、暗くなりつつありながらもまち中を歩いていて、路上で販売する人たちを見ると、生活のスケールが好ましく思う。彼らにとつて、ネパールの経済が上向きだったり下向きだったり、そういうことは、大概にしてあまり関係ないのだらう。安定して「貧しい」のだ。それはそれで、やっぱりいいところもあると思つた。



晴れ

Homestay

野菜カレー・ライス・モモ（お昼） 130Rs.

十二月四日 Sanibaar

この日はお母さんがベッドシートを換えてくれるって。そのあと掃除機をかけてくれるという。ありがたい。

お昼過ぎから川沿いを歩く。あの Toku のところまで歩こう。 Patan と Thapathali を結ぶ橋の下の寺院のから、西へ向って歩き始めた。この寺院の感じは前々から好きで、ここでまず一枚スケッチを取った。人がわんさか集まってきた。オモシロイなあと思う。多分、風景を描くという習慣がないだろう。彼らが描がくのはおそろく精神的なものだ。周りに集まると、必ずといっていいほど人は僕のまん前にも立つ。そしてこれが風景だ！ということも分らないだろう。あるいはそんなもの見ていないのかもしれない。かばんと筆箱を置いて描いていたら、「こんなところにおいといたら、サルに持ってかれちゃうで」とおっちゃんが忠告してくれた。そういえば、さつきサルの大群の中



を歩いた。ニホンザルにも少し似ているのでびびった。

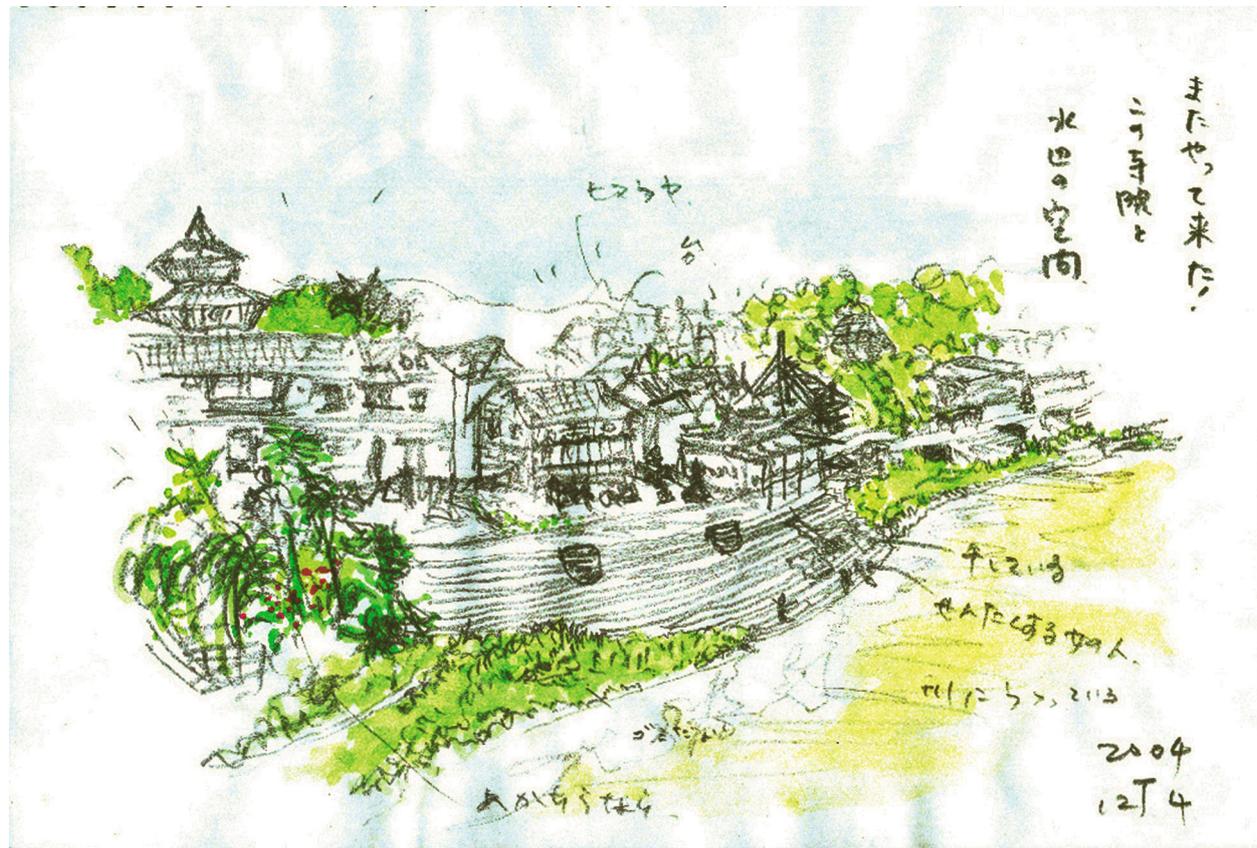
寺院の前の空間は大分長いこと続いている。先の方へ歩いていくと、対岸から眺めていた広場のようなところがあるので降りて行った。川岸まで行って、そのまま川に沿って歩いていこうとすると、犬が僕に向かって吠えていた。どうせたいしたことないだろう、と思つて近づいていったら、うゝとうなって近づいてきた。最初は一匹だったのに隣にいたもう一匹も近づいてきやがった。さすがに悪いなあという気とこのまま追われてもいやだなあという気になって、元の道に戻ることにした。そしたら銃を持った武装警官に「お前何者？」と訊ねられてしまった。最近ハカトマンズの中もちょっと緊張している。行ってただ帰ってきただけの僕の行動が不審だったのだろう。「ただ歩いているだけ」といったら、笑つて先へ行かせてくれた。

川治いの寺院には、階段状の段が川に向かって降りていて、大分長いことこういつた道並みが続いている。その途中途中には、一定間隔で丸い台がある。おそらく軍事的な設備だ。さつき話しかけてきたおにいちゃんと同じような服を着た人が、その上に要塞のようなものを築いている。東京でも、下町とかの方に行けば、小高いところに神社や寺がある。東京で言えば寺の方が多い。これらもきつと、江戸時代やその前には軍事的な機能意味を持っていただろうと思う。お墓なんかはいい盾だ。もちろんそれが目的というだけで建設されたとは言い切れないし、普段の庶民の生活の中でも重要な意味を持っていただろう。どこへ行つてもそういう機能は後付でもついてくるんだろう。あらためて自治の中で、「自衛」つて言うのが重要な位置を持っているんだなあなんて、思いながら歩を進める。

川治い、川治い、豊かだ。緑と地形と、たまに建物と、豊かな関係がある。その中にそつと人間が住みついている。陽気な雰囲気です。そして大概は貧しい人だろう。今度また描きに来たいなあと思う場所に出会えた。

その後 JAFON の写真展示会へ向かう。SOUP の活動地と教えてもらった辺りををぐるつと見ながら歩いていった。この辺りは前にも歩いている。前は女の子に通せんぼされて入れなかった道へ入つていってみたら、そこにはアパートのようなものがあった。やっぱり古い家、崩れかけたところもある、そのような家に「棲みついた」感がある。ここが行き止まり。うーん、そうか。都市でコミュニティのことをやるのはすごく難しい。「生きる」ことと「生活する」こととのリンクが遠いからだと僕は思っている。SOUP には頑張つてほしいなあと思う。こちら辺に棲む urban poor たちに対してももちろんそうだが、SOUP の活動がしっかりしてくることは、後々に大きなインパクトになるだろう。

Sundhara とくろくろくへ歩いていくと、途中でラズビー (JAFON のメンバー) に会った。ちよつとついて来いと言うので、ちよつとついて行ってそのあと一緒に会場へ行った。たくさんのストリートチルドレンたちがいる。JAFON のブックレット出版記念の



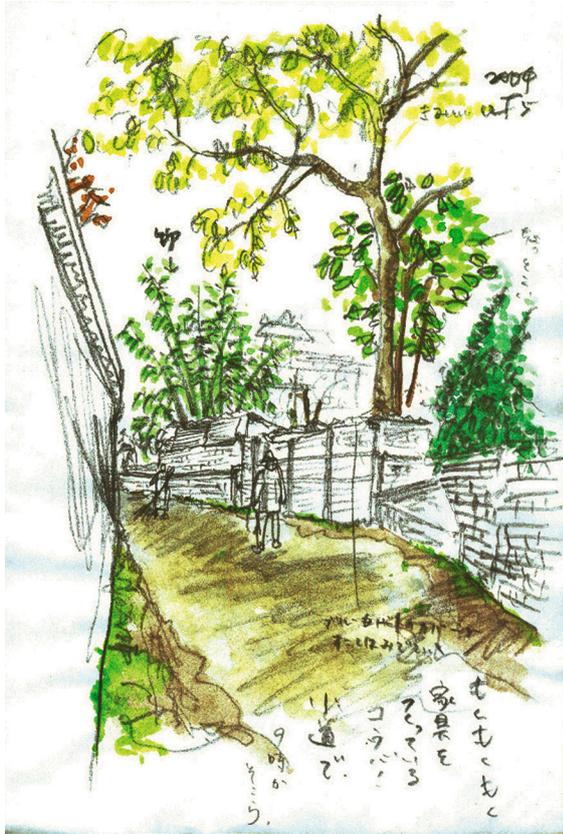
ときにも数人いたが、そのときよりも親しげに話しかけてくれる。定松さんにもすぐ会えた。いつもながらいい声の人だ。

写真の立てかけが始まった。いい写真はかりだ。ダンボールを切り抜いて、その中に写真を貼つてある。いろいろな色の毛糸でくくりつけて、中には写真にかぶさって毛糸が通過しているものもある。面白い。ネパールに来る前に東京事務所で見たとJAZZのパンフレットのような、彼らしい、手作りの展示。

展示は一樣に壁に貼り付け、立てかけたものだが、もっといろんなことが出来たらなあと思う。僕だったら床に展示したい。屋内なら。写真で空間を規定していつて、草むらに寝ころがったりゴミ捨て場のベッドへ誘導されていつてしまうような。そして寝転がると上にも何か見えるような。会場の中心部辺りには、定松さんや他の日本人やNGO関係の人や。一番目立つところでああいう風に英語で会話する人の群れがあまり好きではないので、隅っこの方に逃げて、誰にも挨拶しなかった。この日は何者でもないし。決して批判しているわけではなくて、僕があまり好きではないのだ。これは僕の問題だ。

ストリートの子どもらはいいいヤツらが多かった。もう目がやばくなっているヤツもいる。彼の名前は分からなかったが、すぐシンナー吸つてしまう。会場で出し物をしているときも、すぐそわそわして吸いに行つてしまう。彼のような人間らしさが全面に出ていような人が好きだ。僕が熱射病気味で階段の日陰で寝転がっていたら、扇いでくれた。





十二月五日 Aaitabaar

うわあ、こんな時間。朝ごはんのノックで起きるなんて、はじめてだ。

午前の散歩の行き先は決めていた。Dhobi Ghatという、この間 Krutpur へいった帰りに通ったところ。行く道の途中で木材を加工する工場に出会った。レンガの小道に緑がいっぱいあって、中から多分、いぶしているかなんかの煙が出ている。ちょっとスケツ

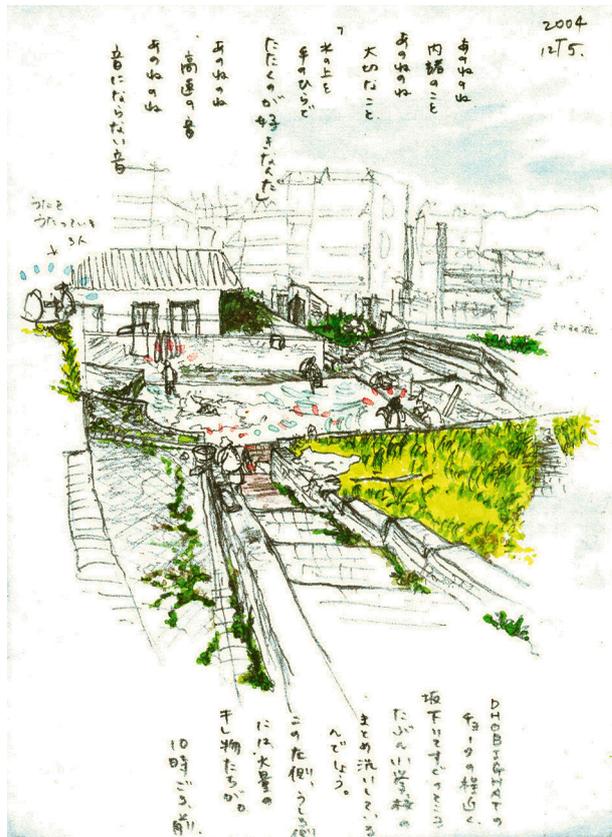
四時から Nava さんと会うことにしていたが、彼は現れない。のども渴いていてバテている。そしてちんぼの兄ちゃんは何人も声をかけてきて、イライラし始めていた。こうイライラするのはここ二、三ヶ月でも珍しい。結局会えなくて、その後連絡を取って、日曜日に会うことにした。夜ご飯を一緒に食べることに。不思議だなあ。他所んところへ行くと、ご飯食べるだけでも必死になって連絡を取ろうとする。もっとここでしか出来ないことに集中した方がいいのかしらん、なーんて。

晴れ、昼間熱射病気味になるくらいの日差し

Homeslay

カレー・ご飯・スープ（お昼、チップ） 125+5Rs、ネットカフェ 15Rs、カレー・

ご飯・スープ（夜） 145Rs.



チしなくなつた。覗き込む人はいるが、大体の人は通り過ぎていく。楽な気持ちで描いていられるので心地よい。最後のころ、子ども三人が後ろで見ている。彼らだけは最後まで立ち止まっていた。

描き終えて「バイバイ」というと、彼らの一人が、食事をつかさどる神聖な右手を差し出して「ルビーおくれ」といった。僕は「ないよ」といつて振り返って歩き出そうとした。彼らはきよとんとした顔をしていた。

そう、僕はうそをつきまっただけだ！

今度から散歩のときはほんの少しのお金だけを持ってゆこう。水を買うかもしれないから、それぐらいで十分なのだ。

彼らにとってみたら、すごく当り前の行動なのだろう。ステイ先のお母さんが、朝お茶を入れてくれる、あのお母さんのそういう心持ちに近いものなのだろう。これにイラつくも代わりに何かあげるも、貨幣価値のお化けの発想、ちよつとおどろいてしまつたり悲しい気持ちになつたことに喝を入れて歩き出す。

帰ってきて、お昼まで少し時間があるからステイ先の辺りを歩いてみた。道と道とがへんなつながり方をしている。それでよい、とてもよい、ここちよい。

お昼を食べて、またすぐ出発。この日のテーマは「川沿いに行く」。そう、つまりスラム巡り。だんだんスラムがどのようになっているのか分かってきたから、おそらくある



だるう所を見てみて、比べてみようと思ったのだ。そしてあまり地図を広げないこと。川のとっち側かを通って、そして反対側をまた折り返して歩いて帰ってくる。そんなイメージを持っていた。ゴールはBalganga ChatというPanから北へ6kmほどの距離にある、川沿いの寺院。ここまで行くのだ！ まずは外側（東側、リングロード内の都市部から見ると外側、ということ）を歩こうと決めたのだけれども、Teikuの辺りでは川が三方向に交差していて、そして橋がないのでこればかりはしょうがない。内側を通ることにする。こちらの川沿いは何度か歩いているので、一本内側の道を歩いた。そしたら、白ヤギさんたらお供え物の花食べた。だんだん自分自身に落ち着きが備わりつつある。まち中や道を歩いていても、一人でもなんか大笑いできるようになって来た。そしてこのスラムでは、まち中では男の人が興じるゲームを、一緒にたむろして女の人がしゃがんでやっていた。ふふふ、なんて思いながら歩を進めた。

Balganga Chatの前にも橋があつて、その間にはTeikuの大きな橋から四つの橋がある。スラム（というか、おそらくスクンバシの住居群、といった方が正しい）にもそれぞれ表情があつて、オモシロイ。掘つ立て小屋のようなところ、レンガのところ。そしてその前にしつらえられる小物たち。印象的だったのは、Hyunatという、Tekuの橋から一つ目の橋の間にあるスラム。すごい賑わう商店街のようなところに近くて、川岸にも広いスペースを持っている。レンガの家並みも、川側に向かって入り口がある。そして、川つぶちの方にも掘つ立て小屋のような手作りの店なんかがある。そう、ちよつとした「通り」が出来上がっていた。オモシロイ習性だなあなんて思った。ここでは家畜系の



ものがよく売られていて、ダンボールでつくった手作りひよこのお庭なんかがあって、特に川つぶちは手作り感がみなぎっていた。

Balganga Chatの先にも少しスラムが連なっていた。でも今日はここで帰る。帰り道(反対の通り)、どこかの市場で買われたのだろう、二羽の鶏。バイクに吊り下げられていて、前見た自転車につるされていたのはハンドルにだったが、これはもうちょっと下部に足をくくられている。地面すれすれに顔があつて、僕が見ているときにも一羽はくちばしを地面にかつんといわせていた。彼らはまだ生きていた。また大笑いしてしまつた。

晴れ

Honestay

ニラ玉定食・ビール(夜) 270RS、TAXI 157RS.

十二月六日 Sombbar

左ももの筋肉が少し張っている。

この日からお母さんが五日間いない。ルンビニへ出かけていった。朝ごはんは娘のディパさんがつくってくれた。

今週は西側の方を回って事務所へ出ることにしよう。この出勤ルートは初めてのところ。時間を計ってみたら、SUP.のもうひとつの活動地にまで行けそうだ。ただ、やっぱり歩きたいのは、そして面白かったのはこっち側のいつものスラムのところ。

途中、先日犬に追われたあたりで、武装警察の人がわんざかいた。多分ホームなのだろう。この間質問された理由が分かった。十数人の人が、足並みをそろえる練習をしていた。すごく楽しそうで、笑みもこぼれていたし、もちろん笑い声も聞こえた。僕が歩いているところにはキッチン、というか洗い場のようなところがあつて、そっちでも野次のようなものを飛ばしているように見える。そしてそこでも楽しそうに話している。ニュースで聞く残虐な雰囲気と、ああいう楽しそうな雰囲気と、きつと同居するものだ。

少し時間に余裕のある日だった。いろんなことを考えたりノートを見返してみたり、事務所の本を読んだり。

小嶋さんがこの日から来ている。夜、Thamelのあたりをちょっと案内しながら、桃太郎“という恥ずかしい名前のレストランへいった。大変な額だった。

晴れ

Honestay

TAXI 80RS. TAXI 100RS. TAXI 35RS.

十二月七日 Mangalbaar

明け方外から聞こえてくる音っていうのはどこにいても一緒のようなものだ。子どもの泣く声や鶏の声、子らを呼ぶ大人たちの声、そういつたものがごちゃごちゃになっている。ここを日本だと仮定してみても全然平気。

仕事に行かなければならないので忙しいだろうに、お父さんがぶきつちよにお茶を入れてくれた。茶漉しを見つけるのに大変苦労をしていた。前の日はやすこさんが、湯たんぼのお湯を取り替えてくれた。事務所が僕がコップを洗ってなんかいると、スリジャナさんがびっくりする。スクマヤさんが休みだったから、やっていただけのことなのだが。男はこういうことしないんだなあなんてそのときは思っていた。だからやすこさんがお湯を取り替えるのも、彼女がこつちの暮らしにきちんといえるからなのだろうと。そしてこの日の朝お父さんがこうしてくれるでしょう。なんてことは無い、僕がまだそのくらいなのだ、ということのようだ。

この日の朝は、今週の通り道にしているスラムの入り口でスケッチを取った。ちよつと緊張した。僕がちよこんと座って絵を描く風景は、彼らにどのように写るのだろうか。





不安だったが、あつという間に人が集まってきて、最後には「あの人も描け、この子も描け」と。ほっとした。

この日からネパール事務所には新しいスタッフが来る。僕が使わせてもらっていた作業機は彼のものに。僕は食事をするテーブルやらなんやらを、転々と。ミーティングなんかがあると移動する。これはこれで楽しい。

帰り道もスラムを通つていこうとしたが、途中でとおせんぼ。というのは、武装警察の人たちが訓練している場所に差し掛かったから。夜はさすがに人が入れないようにバリケードを張っている。仕方がないので遠回りして、その場所だけ避けてまたスラムの方へ入つていった。Patanaの方とは違って、こちらは暗い。洗濯物をやっている女性がいたが、もちろん見えてはいないでしょう。

TekuからSenepaへ渡る橋の下のごみだめでは、ごみが燃えていた。誰かが燃やしていたんだろう。ここにはいつも、ちいこい犬が一匹でごみをあさっている。Senepaの方までやってくると、飛行機の飛ぶ音が聞こえた。うるさいなあと思った。

晴れ

Homeslay

Nothing

十一月八日 Budhabar

この日はPokharaへ行く。小嶋さんとスリジャナさんの出張にくっついていくために。朝起きて準備をし始める。準備っていつも面倒だ。

朝八時に事務所へ集合ということになっていた。それでも朝歩くのを続けようと思っていたから、一時間早くステイ先を出ると伝えていた。早いから迷惑をかけるだろうと思って、朝ごはんはいらないよ、といってあったのだが、焼いたパンとコーヒーを用意してくれた。

まだ夜が明けきらない。ぼんやりと薄暗い。ステイ先の家のすぐ近くでは、火をたいて集まる人たちがいた。前の日の夜に通った道を行ってみよう。暗いのと明るいのとじゃ違うだろうから。

Senepaを通って橋を渡って、寺院の前までやって来ると、川の近くはものすごい霧が立ち込めていた。ちょうどここでは川は東西に流れていて、事務所へ行くには東へ向かう。周りの畑や寺院の先の方に立ち込める水の煙で、なんだか輝いていて、もうこの霧に流されていってしまうような、そんな気分だ。

前の日描いたところまでやってきた。一人の男の子が僕を覚えていたようで、にっこり笑っておった。この日はそのちょっと先のところでスケッチを。もう一步スラムに踏み込んだかたちで描いてみた。前の日のおかげで気持ちが悪く落ちていたもので、緊張はせずに描き始められたけれども、難しかった。この日のスケッチはだめだ！ もうちょっと精度を上げないと。

飛行機の中からの風景は楽しかった。棚田や雲の上に住む家々、そんなものを見ているうちに、あつという間にPokharaへ着いた。まずホテルへ。荷物を置いて、WSDPの作業所へ。久しぶりにカメラを持ったから、写真心に火がつく。たくさんシャッターを押したが、いい写真はあるかしら。

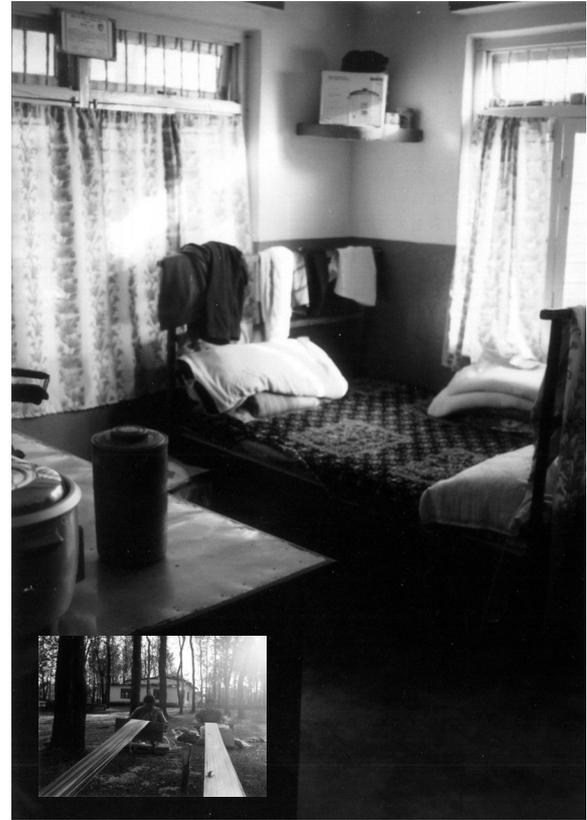
WSDPはPokharaのバザールのすぐ近くにある。随分まち中にあるもんなんだなあ



【写真上】 結構まち中にあるWSDPの事務所。

【写真中】 機織り作業の様子。

【写真下】 染物セクターの作業風景。



【写真】MSDの女性メンバーの一人の家、大家から一角の部屋(3×3ほど)を借りて暮らしている。1ルムなら快適に見えるこの部屋だが、ここに家族三人で暮らしている。【写真左下】村の作業場での機織り。

と思った。一通りの工程を見学して、写真を撮ったり、作業をしている女の人たちの手の動きや姿勢なんかを観察していた。そこからは少し離れた生産者グループの作業場や、生産者の人たちの家にも連れて行ってくれるという。地図で見ただけでも、場所はよく分からなかった。

村の作業場へ着くと、メンバーがずらりとそろっていて、まず花を渡してくれる。みんながちよつとづつ、あつという間に片手では持ちきれんばかりの花でいっぱいになる。そして花の首飾り。僕はこういうのをいつまでどう扱ったらいいものか分からない。首飾りも気にしないでずつとつけていたが、この後で生産者の家へ歩いていくとき、それを笑われているのに気づく。生産者へのインタビュのビデオ撮影なんかをしていたのだが、すぐ飽きてしまうのでぶらぶらと見て回ったり写真を撮ったり、協力隊でMSDPにいるユーカさん、という女性にくっついて話を聞いたりしていた。

生産者のお宅訪問は、もう興奮のしっぱなしだった。すごく短い時間で見回っているのそれは残念だったが、そしてネパール語の能力が僕にあつたら、とてもよいだろうなあなんて思っていた。四軒目に行った、お店と手工芸品作業を一緒にやっているおばちゃんが、「茶飲んでけ」といっていた様がとても印象的。これまでに僕が出会った田舎のおばあちゃんたちを思い出す。

Kahmandu や Patan のようなフィールドを見て回っていると違って、こちらはや

はり手工芸品ならではのフィールドなんだなあという気がした。それだけに面白かった。そして、やはり僕は「モノ」が好きなんだなあと思う。作り手とモノとが結びついてくると、無性にテンションがある。どんどんアイデアも沸いてくる。夜は随分長く待たされるレストランで食事を取った。

晴れ、大体いつも遅れる飛行機が時間通りに飛ぶくらい、朝から天気がよかった

Sacret Valley Hotel

空港税 165Rs、モモ・インドの野菜の何とか・ビール(夜) 410Rs、フィルム二

個 220Rs.

十二月九日 Bihibar

朝目が覚めていたが、布団の中でごろごろ。明るくなって外を見たら変なかたちの雪山が赤焼けている。きれいだったので、屋上へ上っていった。

“地球の歩き方”を片手に、散歩に出かけた。行きたいところがあったのだが、道がやはりよく分からなくなって、つけなかった。歩いた時間から逆算するとあるいは着いていたのかもしれない。想像していた風景と違っていただけなのかも。帰り道、声をかけてくる子どもや、ただオモシロイ動きをしている子どもを見たり、道に迷っている気



がしたので人に聞いてみたりしているうちに、テンションが高くなっていったのだろう。いろんなことが頭をよぎって思い出し笑い気味な感じで歩いていたら、ホテルにも近くなった住宅街で声をかけられた。「何で笑っているの？」って。日本語を話す人だった。品川・大森あたりで五年ほど前まで四年間働いていたのだそうだ。「散歩が楽しかったの」ただけ言っておいた。去り際に「楽しんでたくさん学んでください」と言われた。スリジャナさんと小嶋さんは僕がシャワーを浴びているうちに出かけて、湖の上の寺まで舟で行ったらしい。

この日は飛行機が遅れた。一時間半空港のロビーで待った。すべての飛行機は、Kahmanduから出発する。Kahmanduで遅れば当然他が遅れる。大体山の霧のせいで遅れるのだ。僕らが乗る飛行機はとも「安い」飛行機で、その前の時間に出発する「高い」飛行機があるのだそうだ。こいつが山の方へ行くやつらしく、優先順位はこちらが高いので「安い」飛行機はどんどん遅れていく。

事務所へ戻ってきたのがちょうどお昼過ぎ。すぐにお昼飯を食べて、その後はメールやらをチェックしたり、Pokharaへ行く前からの作業を続けた。五時から「わくわく」のオリエンテーションを行う会場でミーティング。シャブラでファシリテータとしてお願したHariさんはSC-Norwayで働く人。珍しく長髪な男性で、静かな物腰の人。一、二度JAFON関連でお会いしているのだが、あまり英語を話さない。僕も話さない。でも写真でいろんなお話が出来るような感じで、楽しめた。「僕 Nikon 持っているんだよ」と言ったら、「それはプロフェッショナルなカメラでしょう?」「みたいなことを聞かれた。ちょっと「うう」となってしまう。いかんいかん、それを恐れてはいかんだ。それは僕がこの訪問の課題でもあるのだ。

この日は小松さんのおうちで晩の宴を。通ったことのある道沿いであって、ちょっとびっくりした。久しぶりに接する味がたくさんあった。モモちゃん大暴れ。

晴れ

Homestay

空港税 165Rs、ホテル代 325Rs

十二月十日 Sukrabaar

この日の朝は朝もやがもはーっとする日で、Patunの辺りも川沿いも霧だらけだった。そんな中 Sengpa の一角でスケッチ。今日のは簡単だった。スラムの辺りでは僕を覚えていてくれる人もいたみたい。ちらりとこちらへ表情を向けてくれる人があったりする。たいしたことではないのだとも思うが、うれしかった。それまでは見つけられなかったのだが、スラムの奥の方（川岸の方）へ行く道を見つけた。対岸から眺めていて畑なん



かも見つけていたし、あとこれだけの集団生活の中で、共用の道がないはずはないと思っ
ていたのだが、やっと二つ見つけた。

この日は行ったことのある道を行ってしまった。もったいない。ふらりと入っていく、
そんなのを続けたい。早い時間に出ている意味がない。

翌日は、わくわくのオリエンテーションを子どもたちに行う日だったので、午
後 Gopal さんと足りない分のマットを買いに出かけた。TAXI をつかまえて、Mangal
Bazaar へ。ほしいサイズを伝えたが、お店のお兄ちゃん（前の日に買った店員さんの
息子が勤めたのはなんか前の日に見たのより小さく見えた。値段も安くになっているし。
でもこれだ、と強く言うので、でもアレなんだから、一応小松さんに電話して聞いて
みた。それでいいというので買った。

TAXI に乗せたのだが、さすがに四つも乗ると後部座席には人が座れない。二台に分
かれて会場へ向かった。僕だけが会場の場所を知っていたので、僕が前になって。すぐ
近くののですぐ着いた。お金を払って振り返った。後ろには何もついて来ていなかった。
そもそも四つを一人で運ぶのが難儀だったから二人で来たのだ。しばらく待っていた
が、会場も細道を入れていく分かりづらいところなので、普通なら帰るよなあ、と何も
かも後ろ向きに考えてしまうような気分になって、試しに四つ抱えてみた。おや？ ゆ
けそうだ。左肩に二つ、右肩に二つ。歩き出してみたが、すぐダウンした。目の前の小
学校に通う女の子にもぶつけてしまったし、見ている人たちに笑われた。でももう一回
挑戦してみた。あまりの酷さに見ていた女の子の人が、抱えるのにてこずっていた最後の一
つを右肩ののせてくれた。

距離は 40m そこそこ。すぐだ。と思っていたが、だんだん右肩の二つが落ちてくる。
いかん、と思っていたら、歩いてきた子どもたちが持ってくれた。はっはーん、と思っ
たら、やっぱりお金目当ての男の子たちだった。「ないよ」といつて断った。だって本
当に「XXXX」で使い切っていて、小松さんから預かったもの以外にないんだもの。この間
のようにうそをつかずに済んだ。でもとてもつらい思いをした。お金があったら、彼ら
に手伝ってもらった方がよかったかもしれない。

また歩き出したが、ギブアップ。もう 10m ほどしかないし、誰かに持っていかれる
こともないだろう。二つずつに分けて運んだ。

しかしながら、またトラブルが発生する。この建物はやがて我々のプロジェクトにお
ける CAPCRON の活動拠点になるところで、いろいろ工事をしている。その足場のた
めに、部屋のドアが封鎖されてしまっていた。もう一つのドアは中から鍵がかかっている
らしい。どうしたもんか。ここんちの女の人も、あっはっは、なんていっている。笑
い声は世界共通だ。大家の息子が一生懸命いろいろやってくれて、僕も一緒に子ども一
人分がやっを入れる隙間をやっつくった。中からそのもう一つのドアを開けてくれた。
ありがと。

中へ詰め込むとやっぱりちょっと小さかった。縦横20cmくらいずつ。まあ、そんなに大きな問題ではなさそうなので、これで去ろうと思った。部屋を出たら、Gopalさんがいた。さすがに大笑いしてしまった。僕の「TAXIをあつと」いう間に見失って、事務所に電話したらしい。近くまで来たら、なにやら大変なことをしている男がいたことを聞きつけ、小道を入ってきたという。「missed you」ってこっちの台詞だ！

二人でその後もうひとつふたつの買い物を買って、僕にとってははじめてのマイクロバスに乗って帰った。

翌日オリエンテーションのあと、ネパール語の先生に会うことにした。いろいろな帰り道に慣れては来たが、犬に吠えられるのはまだまだビビる。

晴れ

Honesty

Nothing

十二月十一日 Sanibar

朝早く目が覚めるが、前の日に Hera Kaj さん (House-owner) に聞いた話や日記に書き足したりしているうちに、六時を回ってしまった。休憩がてら横になつたらいろいろ考え始めて勉強どころではなくなった。

この日も霧がすこかった。オリエンテーションが始まる前にどこかを描いていようと思っていたが、Pulchok というステイ先のすぐ近くのストウパ周辺に決めた(ちなみにステイ先の住所も Pulchok)。霧はすこいけれども、もちろんこの日も露店商がずらりとしていた。大通りに面したところでもあるし、しかもこの日は休んでいるガソリンスタンドの前にひよっこり座っていたから、立ち止まって覗き込む人は少なかった。あの売り場の中に、おそらくステイをはじめた日にスケッチしていたら集まってきた子ども一人がいる。それかその親族か。

その後、オリエンテーションの会場の方へ。会場への小道へ入る手前には大きな大きな木があつて、その下に野菜を売っている人がいたり、卓球をしている子らがいる。ちょっと雑な絵だが、完成してぶらつと歩き出した。二十分も前なのに、CAP-CRONのおじさんがいた。ので、ちょっと苦手意識をもたれているだろうが、話しかけてみた。彼は十五年子ども関連の問題に取り組んでいるらしい。このキャリアはやっぱり「買いだろうな」と思った。「インターン後、どんな職業に就くのか」なんて逆に質問されて、「NGOに一番興味があるが、そのためにはどんなところで修行するのがいいと思うか」と、逆にやっぱり質問し返してみた。「子どものことをやるのがいい。世界の子どものことを」と答えてくれた。さすがに苦笑してしまう心持を抑えなければならなかったが、

彼は本気で言っているのだろう。大事にしようと思う。

HariさんのWS.はとても良かった。このWS.から多くを学んだ気がする。彼のキャリアと技術とが、とても幸せなものになっていると思う。話し方がとても素敵で、僕が言うとしたらちょっと気になってしまうようなことも、彼ならではのものなのだろう。年の取り方の良い例として、彼のことをきちんと覚えていたい。一番印象に残っているのは、カメラのFrameの説明。写真っていうのは視界を切り取るもんなんだぜ、っていうことを、大げさに、そして滑稽に表現した。それがとてもうれしかった。

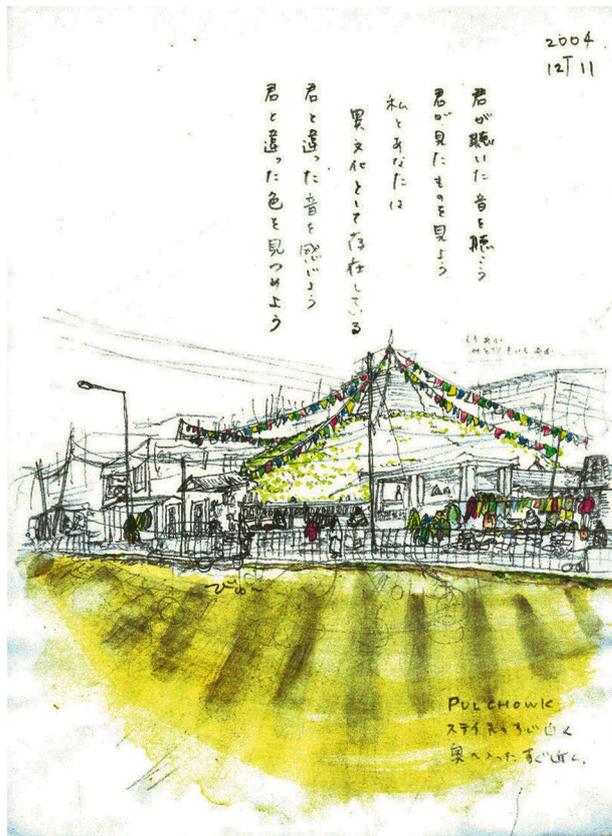
僕は子どもの（子ども年代の人が多く持っている）瞬間的な変化、というか、バラ感をとめるのが嫌いなので、僕のカメラやノートをぶっさらばうに触らせていた。WS.の運営には迷惑をかけたかもしれない。途中でCAPCONが連れてきた一人が帰ってしまうハプニングが起こったのは、「僕のせいかも」と思った。

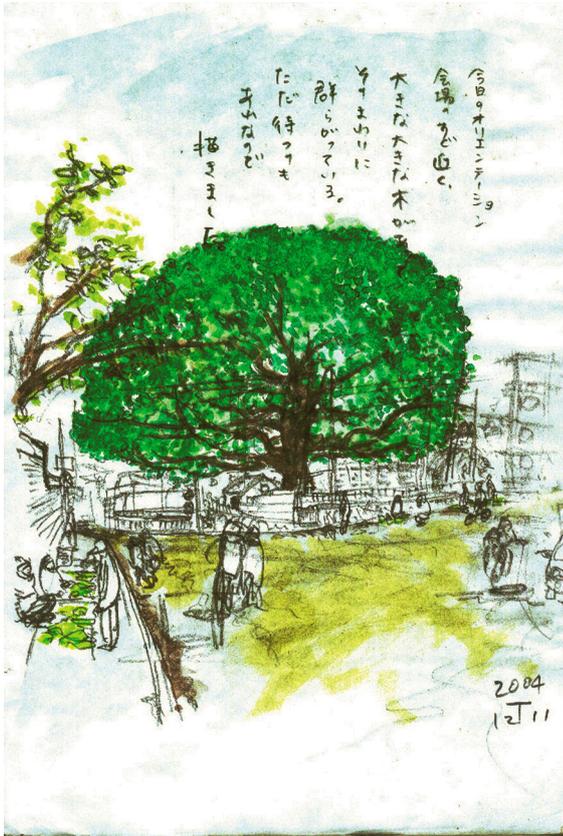
途中でデジカメを使って練習撮影。プリントアウトしてHariさんがコメントするのだが、なかなかいい写真を撮る子がいた。三十六枚あればいい写真が集まるだろう。使い捨てカメラは簡単だし。

Parbat（大家のところにいる男の子）



【写真】カメラのフレームについて、Hariさんは大げさに、そして滑稽に表現した。





【写真】 JAFON が連れてきたクリシュナ（手前）とアミット（奥）。彼らは後々に朝の路上で頻繁に会うようになる。

は仕事柄 Patat を特別扱いはしない。一緒にの車に荷物と一緒にやってきたのに。とてもいい子だと思う。

大体四時ごろに終了して、その後時間を計りつつネパール語の先生のうちまで歩いていった。いい先生だった。多分長いこと教えているんだろう。落ち着きがあつて、授業スケジュールや僕がどのような意図を持って受けたのかとかの説明を、じっくり聞いてくれた。話し合いはスムーズに進んだ。

すつかり遅くなつたが、別の道の時間を計りながらまた歩いて帰った。日曜日とトリブバン大学へ行くときに通ったスラムのところでパーティをやっていた。すごい小さい。パーティには、ネパール事務所出勤初日に行ったもののイメージがあつたから、勢力図のようなものかと勝手に思っていたが、多分この国の、少なくともあの民族の人は、きちんとパーティをする人々なのだ、と思い直した。

事務所からも、先生のうちへはすごい時間がかかる。さすがに Tempo を使う必要が

はとても頑張つたと思う。一般的な目から見れば、一番勝手なことをやっていただけども。きつと彼だけ、一人か、という状況だった。他の子はストリート仲間であつたり学校メイトだつたりがいる。彼を知るのは僕らシャプラ人間だけで、で、僕ら

あるかもしれない。

連絡もなく遅くなったのに、デイバさんが飯をこしらえてくれた。ありがたい。おいしかったし。

ネパール語を習いたい旨をそれよりも遅く帰ってきたお母さんに知らせたら、大丈夫と日本語で答えてくれた。勉強しなければならぬ。

晴れ

Homestay

TAXI 32Rs.

十二月十二日 Aatibaar

布団の中で、しばらくごろごろ。少し疲れている。明らかに歩きすぎ。歩いていることに満足してしまっているのかもしれない。今日こそはゆっくり目に出て行くのだ。そろそろ一ヶ月になる。この一ヶ月を振り返ったりしているうちに、時間はびゅっつゃびゅ、と過ぎていった。Learnからstudyの時期へ、うねりださねばならない。はじめて昼過ぎまで部屋にいた。今日のお昼は久しぶりのダルバートだった。

一週間ぶりくらいにPalaを歩く。やっぱりスタートから行ったことのない道で曲がった。といっても、仕事の帰り道には通ったことがあって、あの時は暗かったから、明るいうちに確かめてみようというもの。すぐに何度か通った道へ出てきてしまう。仕方がないからまた中庭の方へ入ってしまった。

一度来たことがあるんだろうなあ、という入り口でも、必ず違うところへ出て行ってしまう。他の地区でも歩いてみたが、このくらいのスケールの中庭で、とても入りやすい雰囲気なのはこの地区特有のものようだ。Thanaal辺りでは少しスケールが大きい。Sundhara 辺りではちょっと閉じられた感がある。出てみると、これまた見慣れないところへ出てきた。今度ここを描きたい。

ちょっと思いつきで、川沿いを歩いてみた。前来たときと変わらない、獣道のような草道を掻き分けて寺院がひょっこり出てくるあの道を。やっぱり砂を取っている人がたくさんいた。川沿いに住んでいる人たち、彼らはやはりカーズトで言えば低い身分の人たちなのだそう。家畜を飼ったり、そして砂を取るのもそういう人たちの仕事らしい。

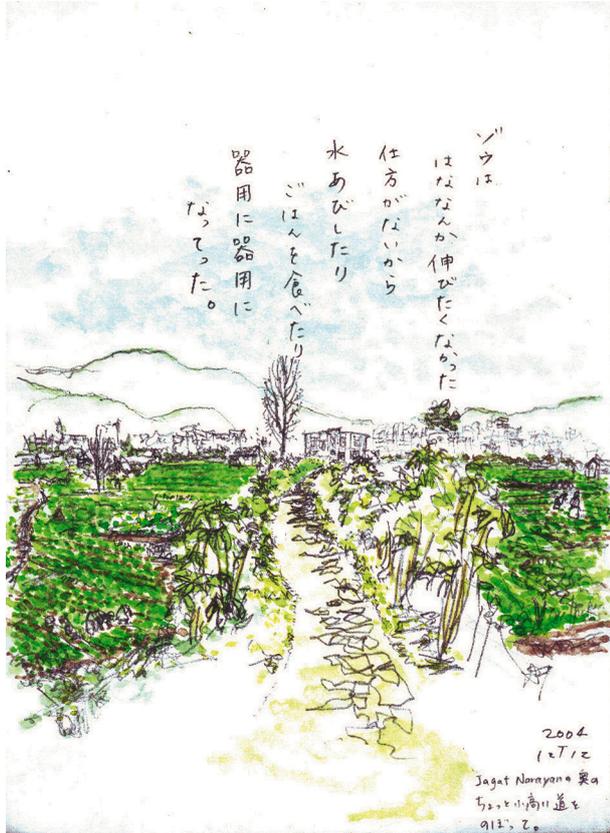
前の週に毎日通っていたスラムの方を対岸からあらためて眺めてみた。家の後部(川岸側)には広い畑のスペースを持っている。それがとても美しい。広いところでは30mほどの幅があるだろう。ちょうど今旬のものがあるのだろう。畑の前を通ると良く見かける作物が並んで植わっているのは、ああ、いいなあって思った。あの野菜たちはどこかで売られていくのだろう。

思わずそちらの方へ渡ってしまいそうになったが、そういえばこの日はもつと東まで行って、そっちにある別の橋を渡っていくことにしていたのだ。寺院の前を奥に行くのもはじめてだ。

地図を見ると、この寺院は死人の灰を流すところのようだ。向こうの「B」の方のやつもそう。どちらもとても好きだ。川へ向かって降りていく長い長い階段があって、そして水に近づく空間を備えている。こちらに寺院の方が「B」のより空間としてはきれいだ。いい質感を持っている。ここにも寺院に棲みついている人がいるが、そこでも駄菓子やらタバコやら売っている店があった。オモシロイなあと思う。だんだん川岸にも畑のようなものが現れてきて、飼牛もいる。こっちは子どもも男性も一緒にいて、そういう関係から出来るきれいな空間なのだろう。民族的にも「B」に棲みつく人と違うようだ。

寺院の奥までたどり着いて、そのまま川沿いを歩いていこうとしたら、右手のちょっと小高いところから下りてくる二人の女性がいた。歩いてきたような道とは明らかに文脈が違っていて、こっちにも道があるのかあ、とふらりとそちらに上ってみた。高々30ほどの高低差でしょう。地面からひよいと頭を出した。辺り一面みどり色に輝いていた。

Kahmandu のリングロードの内側にも、こんなきれいなところがある。畑にいるのは大体女性で、赤とかの服を着ている。日本も昔は、田植えの時にはこんな風に早乙女





たちが出ていたのだろう、なんて感慨ふけていたら、目の前に続く道と、両側に広がる畑とがきれいだった。描き終わるころには畑の女たちも僕に気づいていて、僕を眺めていた。すごく暑かったので、帽子を取ってぬぐったら笑われた。

振り返って、行こうと思っていた道を行く。そうすると、また砂を取る人たちがたくさんいて、水汲み場のようなところでは男たちが体を洗っていたりする。川の中で、そのまま洗っている人もある。女は傍らで洗濯をしていて、ついでに足を洗っていたりする。中には砂とりを手伝っている人もいる。誰でしょう、女性の権利とか言う人は。

歩いていく。前にその反対側から眺めた実験農場のようなところまでやってきていた。反対側から見るとこんななんだ、なんて思って、渡りたかった橋までやってきた。そしたら、くるつとなっていた。片側のワイヤーが外れていて、だらんと垂れ下がって、くるつとひっくり返っていた。大笑いしてしまった。遠くからはそういうデザインなんだろうと思っていたのだろう。何にも気づかなかった。

仕方がないのでリングロードまで行って、その別の橋を渡って反対側を戻るようなかたちで歩いた。この辺りは畑があって、地形は低く、芝生の空間もある。ところどころでは日向ぼっこや水浴びをする人、クリケットに興じる少年や、造り途中の家の上で髪をとかず女、大泣きして歩く女の子。もうおかしくなってしょうがない。橋を渡ってCityの内側に。やはりちよつとつまらなくなったが、地形の変わり目はいつだってオモシロイ。でもここらもすぐ住宅地になってしまうだろう。十年も経たないうちに。今、ここらは住宅建設ラッシュ。

「ここらまでやってくると、もうのどがからからで、つらくなった。お金をあまり持たないようにしていたが、この日は500Rs. 札しかなくて、仕方なくこれを持って出てきた。でも水(15Rs.)を買うのに500Rs. 出すのも、とは思いつつも、我慢しきれなくなつてつらさが募つて出してみた。最初のお店ではお釣りがないので買えなかった。二軒目ではお釣りのために、いろんな店を回ってくれた。ごめんさい。そしてありがとう。生き返るようなおいしきで、一気に半分も飲み干してしまった。」

このあと北の方へ歩いていって、New Banewor という繁華な通りを抜けて、ただの住宅街を歩いていた。地図をあまり広げないようにしていたが、なんとなく東だろうと思う方へ歩いていった。そしたら思いがけずスラムに出くわした。

そのスラムの入り口の広場にはおびたらしいほどの鴨がいて、ぐわくわいつている。本当にたくさんいて、『百万匹の猫』を思い起こすようだった。多分面積の半分くらいを占めているのではないか。思わずまた大笑いをして、ここでスケッチをとっていた。スラムを描くのも慣れつこになって、楽に描いていた。するといつの間にか後ろに男の人が立っていて、子どもも集まつてきた。描き終わつて彼に会釈程度の挨拶をして、立ち去ろうとすると、「こんなの良くないよ」その男の人が、スラムを指差しながら言った。辛くなつたわけではないが、僕ももちろんなにも言うことがないので、またしゃがみ直して一緒に眺めていた。彼が「お茶飲んでいきなよ、Nepali Chyaa!」とくれた。一緒に眺めていた時間がなんとも言えない雰囲気だ、今にも「お茶飲んでいきなよ」と誘われるような気がしていた。それで僕は彼を信用して、「いいの?」と聞いて付いて行った。初スラムだ! 彼の家はトタンで出来ていて、竹で軸組みがされている。4m x 4m くらいの大きさの部屋に、奥さんと娘と息子と四人で四年前から暮らしているらしい。多分集落のつくりからいって、風が通ることもないと思うが、隙間はいくつももある。早速お茶を入れてくれて、さつと出て行って、ビスケットを買つてきてくれた。

彼は肺を悪くしていて、でもお金がないから、一度はなんか政府かなんかのプログラムで診察を受けはしたんだけど、二回目からは行っていらないらしい。彼の息子も左目が白内障かなんかかなんかと思う。多分見えていない。「こんなの良くない、ネパールは良くない」つてお茶一緒にお茶飲みながら、僕に言っていた。

スラムの中にもお店がきちんとある。僕が見たのは水汲み場の前にあるやつで、彼の家のすぐ近く。この水汲み場の周りには女の人たちが集まつていた。ガスの火のつけ方に感心したり、そはで遊んでいる子らに苦笑しながら、一緒にお茶をたしなんだ。お茶を飲みながら、「こんなの良くない、ネパールは良くない」と僕に何度か言っていた。彼が「日本にスクンバシ」はいるのか、つて聞いてきた。背景が異なるので最初は「いない」といつてしまったのだが、ホームレスの人たちを思い出して、そういつた人たちの話をちよつとした。しばらくいて、「また来ていい?」と聞いたら「いいよ、この周りも見ていきなよ」といつてくれて、家の前で別れた。僕に気を遣つて、ゆつくり、ゆつ



くりしたネパール語で。

このスラムは事務所近くに流れる Bagmati 川が、リングロード内の東部で北の方へ折れ曲がった方に引っ付いて出来ている。どう行くか道も分からないので、そしてあんまりその前までに見て歩いてきた住宅街を歩いてもつまらないので、スラムに沿って歩いてきた。そしたらなんとまあ、このスラムの大きいこと。ずっと連なっていて、一列というより、ある「広さ」を持っている。そして、多分どんどん広がっているのだろう。先ほどの彼もかなり新しい人だろうと思う。奥の方へ行くと、だんだんレンガ造りになっていって、暮らしぶり、棲みつき方に少し安定感があるように感じる。その場所に少し長く住んでいた勘がある。小道に沿って歩いていくと、両脇には、僕を珍しがって眺める人、そんなこともお構いなく遊んでいる子どもたち、などなど、たくさんの方がいる。僕が歩く前には、二人の少年が先導するように歩いてきた。歩いていっているうちにズボンが落ちていって、もうほとんどケツが丸出しになった。「おいおいケツでちゃったよ」と思ったら、やっとズボンを吊り上げた。

また大回りをしてだんだん暗くなっていく道をステイ先まで歩いて帰ってきた。すごい疲れた。あつたかいお茶とダルバートがおいしかった。面白いことがたくさんあった日だった。

晴れ

Honesty

水 15Rs.

十二月十三日 Sonbaar

前の日は日記を書いているうちに眠くなって寝てしまった。あのような限界を感じたのは、久しぶりのことだ。朝のおかゆを食べていたら、Hera Kajiさんが彼の日本語教室を見に行きますか?と誘ってくれた。もちろんOKして付いていった。やすこさんはこの日 Nepatganji へ行ってしまっ。

やっぱりこの辺りの近道をまだ知っていなかった。「こっち行っただ？」と聞かれてうれしくなった。何でもない、本当の近道だった。教室はステイ先から本当に近くで、週六日間開いているらしい。「結露」の話をしりして、コーヒーをご馳走になって、八時を回ったのであとにした。

せっかくなのでまた違う道を行ってみたくなった。本当、文化というか、そういうものが、僕にとってなんとまあ豊かさを感じさせてくれるのだろう。この辺りにはもうそういうものがない。いや、あるにはあるのだろうが、ほんの少し。生活ぶりにまで反映されるものではないようだ。そりゃあそうか。価値はどんどん普遍化の様相を呈して

きて、そうすれば形は自ずと一緒になっていくものだろう。建物だって硬くなる。建物だけでなく、目に見えるもの、いろんなものが硬くなっていく。それはきつと、近代的な価値観の中の、所有権なんかとも関係するものではないか。リングロードの中で言えば、今はもう Patan の辺り、Thanaei の住宅地、そして周縁部の地形の変わり目辺りくらいにしか気分を良くする風景はないのかもしれない。かくいう僕だって、そういう暮らしぶりをしているわけではないし。

ぶらぶらと歩みを進めて大通りへ。Thapathai の橋の程近く、道路の反対側に象が歩いていて。でっかい、でっかいやつだった。たまたまこの日の朝、象のことを考えていたから、びっくりした。まちの人も珍しがっている。アレはいつたいなんだったのか。そうこうしているうちにおなか痛くなってきて、苦しくなってきた（体調を崩しているわけではない。ただ便意をもよおしただけのこと）。でも事務所が開くまでは時間がある。小嶋さんが来てから鍵を渡していたので、中に入れなくてどうしたらいいかわからなくなった。パニックだ！ ずっとじっとしているのは辛いだろうと思ったので、近くを歩くことにした。事務所の裏の辺りの好きなところを歩いていたら、「サイヨナラー」という少年がいて、おかしかった。辛いつて言っているのに。一回りして事務所へ来たが、まだ誰もいない。辛くて辛くて大家んちに行こうと思ったら、スクマヤさんがやってきた。助かった。後ろで「サイヨナラー」という声が聞こえた。あの辺りは本当に近くのような。三階の窓からやつが叫んでいた。

九時半から週の朝のミーティング。用事の確認や、土曜日に WS のことについて意見を言ったりする。こういう時間、ネパールの人、特にここにいる二人の気質を知るのが、とても重要だ。

この日は TAXI 関連のなんたら協会の人かなんかが抗議運動をやっていて、Thapathai の交差点を封鎖していた。すごい込んでいて、銀行へ両替をしに行くとき、びっくりした。そこを越えるとなんでもなかった。

ネパール語の先生のところへ行くのに、教えてもらったとおりに Tempo をつかまえようと待っていた。だけれどもつかまらなかった。なので、時間もないので走った。おそらくネパールの中で、あの時間に走っていた人は、そういないだろう。一ヶ月近く、結構歩いたけれども、一度だって見た例がない。帰る頃には足が筋肉痛になっていた。

晴れ

Homestay

Nothing

久しぶりに時間を使って歩くPatamも面白い。はじめて入る道を行ったら、面白いものを見つけた。水牛かなんかだと思うのだが、その足こころがごろろ落っこっている。地面は赤く染まり、カラスがびよんびよん跳ねている。僕も道があると思つて歩を進めたら、行き止まり。そのeye stopには山のように積まれたでっかい骨がぶつきらばうに現れた。そのあんちゃんに「道ない？」と聞いて、反対側を指差されてまたさよならを言つて歩き始めた。

ふんふんふん、ここらはずいいえば、肉をどんと置いて売っている人を良く見かける。こういう場所が、あるのだ。

歩き出したらだんだん便宜が。この日は朝ごはんからそんな風になるような気がしていた。だつてあんなにお茶飲ますのなもの。やすこさんが戻つていつてしまつて、サージャスは僕にだけしてくれる。でも我慢しつつ、そして思いつきの道をゆきつつ。最後には畑の中に入つていて、ネパール人も顔を出さないような法面からのそつと這い上がった。目の前には、橋のすぐ近くに警備のための武装警察や軍の人がトーチカのようなものをつくっている。今撃ち殺されたら、うんこもらして未代までの恥になるなあと思つた。結婚してなくて良かった。

そんなこんなでスラムを通り過ぎた頃には、便宜はすごいことに。たまらずお茶屋さんの人にトイレを借りた。すごいやな顔をされた。そこで三つドーナツを買つて事務所へ。このあとの通勤散歩がどれほど幸せだったことか。

この日の夕方にさしかかる頃、事務所内で議論が起こつた。参加した十九人の子どものうち、五人がカメラを壊してしまつたか無くしてしまつたかしたことが判明したのだ。その後の対応について、対応案やその効果などを話し合つた。僕が主張したのは、

・ ShaktiAarが子どもらの言うことを信じるか信じないかが重要であり、そしてそれが真実かどうかは分からないが、SNは信じるべき

・ 再度カメラを与えて同じことが起こることが、子どもたちとの関係においてもとても危険、もうカメラを与えるのは、この後は誰に対しても避けるべき

・ 子どもたちとの関係づくり、プログラム参加へのモチベートとしては、写真以外での表現を許容していくことで取り組むべき

ということ。つたない英語だけれども。結局この日～時間ほど議論をしたが結論は出なかつた。

僕がネパール語を解さないものだから、全員が母国語としていない英語で議論をした。それだけに言葉を選んで話すことが出来た。二時間ぐらいかつただろうか。英語だったから、というのもこの時間の理由のひとつだろう。基本的に問題が難しくなっているのは彼らがワーキングチルドレン、ストリートチルドレンであつた、ということだと思ふ。だから、学校へ通う子どもたちの誰かが壊しちゃつたり失くしちゃつたりしてくれたら、柔な対応になるのになあ、なんて思つてしまつた。

晴れ

Homeslay

ドーナツ三つ 15Rs、飛行機代 (Pokhara → Kathmandu) 100 \$ (7150Rs)
+ 42 \$

十二月十五日 Budhabaar

ちよど一ヶ月たったんだなあ。今日から達朗さんが来るらしい。楽しみだ。この日はトイレに行ってから出かけた。

ちよつと大回りしてみようと思い、朝はステイ先から出た道をずっと西の方へ歩いていて、リングロードまで出た。だんだん田舎臭くなっていて気持ちがいいのだが、やっぱつくり途中の家々が見えてくる。リングロードまで出るともう、空気が悪い。すぐその内側に入るので、リングロードに沿って歩いてみると、鉄かなんかを担いで運んでいる少年がいた。重たかったのだろう、地面に置いたとき、あてがっていた紙がひらひらと落ちた。拾ってやったが半分とって、半分はいらなかつたらしい。ぶいと歩いていってしまった。僕もそこらに捨ててきた。

だんだん慣れた町並みになってくる。そう、また田舎臭いところがやってきた。こういうところに残る。中心部は普通化して行って、周辺部も変わっていつてしまう。そのアイダの部分に残る。アイダってのはいつだって魅力的なのだ。

事務所へ行ってまだまだ誰もいないだろうなって時間があまっていたので、「Thapathali」を越えてみようと思った。ロータリーを渡って、坂を見つけたので上っていったら、四人の人がしゃがんで座っていた。多分近くの家の雇われ家族だ。こっちは人は、こうやって家のすぐ近くにお手伝いさんを家族ごと住まわせる。ステイ先の家もそうしている。僕がちよつと遅めに帰ると息子がドアを開けてくれて、「Namaste」と言ってくれる。ここんとこの四人は、僕が歩いてくるのを見てきよんとしていた。「この反応は」と思ったが、やっぱり道がなかった。「道ないねえ」みたいな雰囲気を出すと、ちよつと緊張がお互いに解ける。

事務所に行ったがまだ誰もいなかった。ちよつとしたらゴパールさんがやってきた。この日はCSDとSOUPへお遣いに出た。そのときTAXIに乗ったのだが、Thapathaliの交差点に続く道で、進めなくなった。路上駐車車があつて、それを避けようとした僕らのすぐ前の車と、あつちから向かつてきたバスとが、火事場で非常出口にこつた返す逃げ惑う人々のように、つうまつたあ。前の車の助手席から男の人が出てきて、路駐の車になんかものを言い始めた。身振り手振りが大きい。詰まっているのに後ろから二輪車がどんどん前に来て、反対車線(そんな線は無いが)にも乗り出している。やつ

と交わすことが出来たバスが、今度はバイクの群れで進めなくなった。

こっちは人は結構勝手。朝の彼もそうだけれども、ごめんも無ければありがたい。でも喧嘩している人を見たことが無い。お釣がどうとかいつているのを一回見ただけだ。こういうのを「国の気質」というのかも知れない。イライラする運転手をよそに、僕は大笑いをしていた。路駐の車を通り過ぎるときに見てみたら、その車には誰も乗っていないかった。さっきの彼は何にも言っていなかったらう。

CSDからの帰り、僕は歩いてはいけないうところを歩いていたらしい。「ネパールの霞ヶ関」と小松さんが言う通り。でも怒られたりしない。謝って済む。そして僕ももう繰り返さない。それだけのこと。気質、気質。と思っていたら、笑いが止まらなくなった。ところで本当に「MAX」なんかに乗るとよく言われるけれども、僕はネパール人の顔らしい。

ネパール語の帰り、もう暗くなっているのだが、傍らの暗闇の中でなんかおつきなものが動いた。銃を持った軍の人だった。ステイ先の辺りには、国際機関なんかもあるからだろう、こういう人がたくさんいる。「うわつ、びっくりしたあ」と日本語で言ってしまったら、彼も笑ってなんか話しかけてくれた。何を言っているか分からなかったし、歩きながらだったからそのまま歩いていった。「それではさよなら」みたいな身振りをして。気質、気質。はっはっは。

晴れ

Homestay

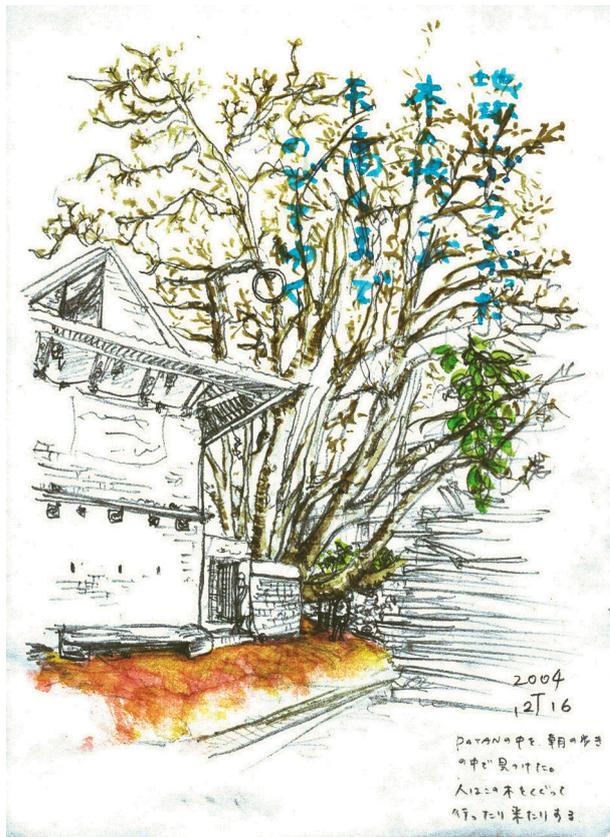
マウンテンデュー 25RS、お昼代 300RS、ネパール語月謝（四週間分） 4500RS。

十一月十六日 Bihihar

寝坊した。慌てて洗濯をしようと思ったが誰かが使っていて、ちょっとぼうっと立っていたようかと思っ立っていた。やがて空いたので、急いで洗濯をしてシャワーを浴びた。

この日はPatunの方から。やっぱり描きたいところは偶然に出会うものようだ。一度ばかりか通ったことのある裏道を通っていたら、ふと左手に道を見つけてそっちに入って行くとした。そしたら立ちふさがる木の幹。しばらく意味が分からないのだが、大本の幹から枝分かれた幹が、かなり低いところに伸びていて、それにあわせて塀も建てられている。人々はこの木をくぐってこの道を行き来する。ここを描くことに決めた。

この風景の気に入りようは自分でも気持ちがいらいで、いつも角のところとか、座れる石があるところへ移動するのだが、この日は一番よく見えるところでした。



描き始めた。ちよつとするとすぐ足が痛くなって、しょうがないから後ろで見ている人に首をすくめた後で、ちよこんとそこへ胡坐をかいた。しばらくたっていたのだろう、夢中で描いていたら「excuse me」と赤いプラスチックの椅子を持ってきてくれた。時間が無くなつていつている気がしたので、後ろの人の群がりに愛想もつかないで描き続けていた。描き終わって、「ありがとぅ、さようなら」といつて走っていった。

スラムの辺りを歩いていても、だんだん平気になってきた。いいなあ。バトミントンを大人の人があんなになつて。この日もすぐ近くの広場を抜けて、事務所へ行つた。

スクマヤさんのお昼作りを手伝わせてもらった。やっぱり包丁の使い方がぶっきらぼう。なぜなんだか知らないが、それでも怪我をするということが無い。そしてこの包丁の使いにくいつたらない。僕の体の大きさに合わないし、まず切れ味が悪い。野菜を切ったりフライパンをかき回したりを手伝わせてもらつて、お互いに片言の英語と僕のbrokenなネパール語、簡単な日本語とたぐさんのbody languageを使って、いろいろ話した。多分流暢な会話と同じくらいの情報やり取りしたのではないだろうか。料理勉強ともども楽しかった。いろんな日本人の名前が出たが、知っていたのは小嶋さんと岡山さんだけだった。

午後、小松さんが帰ってきて、バン格拉訪問、ネパール語勉強のことについてちよつと話した。そしてその後少し、この間の議論の経過報告みたいのがあった。とても愉快で滑稽な結末となった。おおざっぱに言えば、「壊れた」と言つたこのカメラは、本当

に子どもらが自ら壊してしまつたらしい。その理由は「撮つた写真を見たかつた」ということらしいのだ。いろいろうれい結果となつた。

新年挨拶カードのための写真を撮つた。ネパール事務所全員で。カメラマンを Pabat (大家にゐる子) にお願ひして。不思議とこういう写真を撮るのが楽に出来るようになってきた。カードのための加工や電話番号帳をつくつてゐるうちに時間は過ぎた。小松さんは泊まるらしい。ゴバルさんと途中まで歩いて帰つた。「デジカメはいくらだね」と聞かれた。彼はこの前「このコンピュータはいくらだね」と聞いてきた。こういうのにまだうまく答えられない。僕にとつてしてみれば、それはお互いの関係がまだまだだということ。まだもうちょっと時間をかけて、観察したい。

帰ると藤倉達朗さんが、髪を切つていて、なんか変なのになつていた。といつても僕も伸ばしつきりで人のこと言えないが。晩の飯と一緒に食べながら、いろいろお話できて楽しかつた。二週間ぐらゐいるというので、また気づいたことを聞いてみたい。ここちの Pokhara はなかなかのものなのだそう。村へ行くと、薄いのだという。トウモロコシ、稗、麦なんかでも作るらしい。今度村へ連れて行つてくれないかな。こつちでは、稗と米とは一緒に植わつてゐるのだそう。すぐくうれしくなつた。

晴れ

Homestay

Nothing

十二月十七日 Sukrabar

この日は Sanepa の方から。ちよつくら山をのぼつて、生活道を歩いていく。やはりエリアで随分感じが違う。ダメ高級地のなりそこないみたい。少し大きな道へ出て、てくてくと歩いていく。あの国際機関なんかが集まつてゐる通りを歩いていたら、警備の軍の人だろう、眠そうにしていた。ぐつたり下を向いちゃつていた。

この日は描こうと思つてゐた場所があつて、そこで描いていた。しばらくすると青年群が現れて、取り囲まれた。彼らはじつと眺めていてくれたのだが、僕の絵の終盤に一人が話しかけてくれた。英語で。僕もつたないアレだったが、「この道の感じがよくて、この建物と木が利いてゐるんだ」みたいなことを言つてみた。彼は「ああ」といふ言葉で僕への理解を表現してくれた。

この日の朝は興奮してゐた。いつもどおり、散歩しながら歩いてゐたのだが、 Tripeswar のスラムから、また始めての道に入つてみた。そしたらすぐ大通りに出ちゃつて、つまらないから、また細い道入つて川沿いの道へ戻ろうと思つた。そしてまたまた皆さんにきよんとして見られていたから、「あ、こりや道ないな」とは思つた



ものの、でも行って見なきゃ分からない、として奥の方まで行ってみた。すると、黒犬が僕を見つけて吠えながら走ってきた。それにつられて三匹ほどがうわああって。あつという間に四匹に囲まれて、これはやばいなって走って、逃げた！ そしたらあいつら全員追っかけてきて、道途中のさっきまで何でも無かった犬まで追っかけてきて、結局六匹。道行く人が犬を止めに入るんだけど、それも何もかも振り切つて、大通りまで走って出てきた。もうおっかしくって、走りながら笑いが止まらなかった。その興奮を引きずって歩いていったら。顔が笑っていたようだ。川沿いの道で、おばちゃんに「Namaste」と言われた。「Namaste」と僕も言っ歩いていった。事務所へついても笑いが止まらなかった。

お昼の後、バングラのことについて考えていたらCAPACRONのおねいちゃん方がやってきた。子ども関連のlocal NGOが中心になって集まって、ネットワークをつくりましよう、という動きがあって、そのミーティングに僕も参加を表明していた。彼女らに連れられてもらうことにしていた。レワットさんも参加した。その後彼とちょっと話していた。彼は面白くなかったという。僕も言葉が分からないから、ミーティングに関しては雰囲気しか見つけていなかったのだが、ちょっと微妙な危険性を感じていた。シャブラのことも考えてみた。彼とうまくいかないながらもいろいろ話していて、JAFONのプロポーザルがどのようなものだったのか、整理がついてきた。

彼らの関心は「子ども (just children)」とあって、「子ども問題 (child issues)」ではなく

のではないかと、思う。そしてもうひとつのパートナー、CAP-CRONの活動の要旨は「子ども問題 (Child Issues)」だろう。そこへ多くの NGO (INGOも含めてだけれども) の関心は「子ども問題 (Child Issues)」。

この違い、思いのほか大きいと思う。この二つの団体は、きっと大きく異なる反応をこの先見せるんでないだろうか。そして、僕はどちらが正しい、ということはないと思う。そもそもこの関心、要旨が異なるのだから。

マイクロバスを降りて事務所近くまで歩きながらお話をした。この翌日の午後には彼と出かけることにした。

帰ると夕方、その後ちよつと予習をしてネパール語の先生ん所へ行った。知っているのと理解するのとは全然違うわ、やつぱり。よく復習しよう。

...

晴れ

Homestay

TAXI 150RS、下宿賃 5000RS.

十二月十八日 Sanibar

この日は事務所までやることがあり、またレワットさんと約束をしていたので、はじめてあまり歩かない週末を過ごした。といつても全然歩かないのもつまらないから、Lagankhel (子どもたちが仕事のために朝から集まっている。CAP-CRONのおねいちゃんたちと一緒に歩いたところ) の方を回っていつてみようと思ひ、思いつきで事務所と反対の方へ歩き出した。大通りはすくく空気が汚いので、すぐ小道に入ってしまった。こっちの方はずっと壁ばかりが続くようなところで、あまり面白くない。どうしようかな、と思つているうちに、また大通りへ出てしまった。Lagankhel へ着いた。

もう十時近くになっているので、この間朝見かけたような子どもたちはいなかった。多分働きに出ているのだろう。ここからは前に一度歩いていて、雰囲気は大体つかめていたので、まだ歩いたことのないところを歩いてみようかと、やつと北の方へ向かつて行った。東へ大きく回つていつて、少し緑が見たくなった。先週見た畑の辺りを反対側から眺めようと思つて、そっちの方へ歩いていつた。ゆつたりと今度は西の方へ流れていつて、Kwako (Paran の北東部) の辺りの小道へ入つていつたら、泉があられた。ちよつとこれまで見たような雰囲気と違つていつて、本当、ぼつかり空いた感じが気に入り、しばらく時間を使つて描いた。

さらに北へ。今度はまた東の方へ流れていく。やつとこき畑が見えた。この間は予想していつなかつたのと、あと丘をのぼつて見えないところから急に現れたあのいい加減さというか、そういう感動が今回はなかつたけれども、畑と畑の間の一段高くなつた小道

を歩くのは、本当に気持ちよかった。畑に関係ない人もいろいろ歩くのだろう。僕が歩いていても気に留める人はいなかった。みんなせつせとのんびり畑仕事に向かっていた。

川治いを歩いていたら、また多くの男性が体を洗っていた。茅場かなんかが基点となつて、道が二手に分かれていて、川治いを行きたいので右の方をとった。そしたら今度は女性が体を洗っていた。もちろん素っ裸ではないのだけれども、明らかに女性だけのところ。どうしたらいいのかわからなかったのだけれども、振り返ってしまったら外国人ぽくないなあなんて独りよがりをして、そのままの道を行つた。通り過ぎたら、また荷物を持った二人の女性とすれ違った。

寺院前の川治いの道へやとつくと、スケッチをとっている男性がちよこんと座っていた。反対の立場で見えみようとと思って、突っ立ってみていた。彼は僕がいるのを知りながらも、目をそらしたくないのだろう、じっくり描いていた。一度間違つて消しゴムを出そうとしたところで、僕に愛想を見せた。僕もスケッチよく取るんだよ、といってスケッチブックを見せると途端に仲良くしてくれた。こういうもんなんだあなんて思つて、面白かった。彼はどうやら絵を習っているらしい。よく見渡すと他にもたくさんの学生らしき人がスケッチを取っていた。僕と彼が話すのを見て先生が近づいてきた。

Sanka-mulのいつものスラムを通つて事務所へ。この日はレワットさんとの約束があるので大慌てで作業に取り掛かったが、そんな思うように行かない。あつという間に約



束の時間となって、移動した。彼と演劇を観に行くことになっていった。

彼はお茶代と「MXI代とチケット代、そして演劇を見た後のモモをおごってくれた。演劇は子ども向けのものだけれども、劇場と見ている人たちの雰囲気とを見るだけでも興味深かった。モモはおいしかった。ちよっと地元のお店っぽいところで食べたのだが、これがまたおいしい。こちらの方で食べるちよっと上品なモモなら、日本で食べた方がうまいなあなんて思っていたから、とてもよかった。お茶を飲みながら、そして帰りながら、彼の資金稼ぎの話にちよっと触れた。ネパールの事業の雰囲気についてまったくの無知だから分からないけれども、大丈夫かなあなんて正直思ってしまった。まあ、それだけをやるうという話ではもちろんないだろうし、これに関してはすぐストップのかる話だろう。事務所で荷物を取って、帰った。

晴れ

Homestay

Nothing

十二月十九日 Aaitabaar

朝から藤倉さんと出かけた。土地問題に関する三日間のコンファレンスがあつて、それに参加するためだ。最近夜ご飯を食べながら藤倉さんとお話するのが楽しい。彼もこつちへの訪問目的の大きな部分は、このコンファレンスへの参加だといっていた。しかしながらこの翌日よりバンダだ。会場まではどうやって移動するのか。

外に出ると、彼はすぐにマスクをした。マスクと言ってもバンダナのようなものをくくりつけただけ。へんな姿だった。でも息切れがするのだろう、すぐ取ってしまった。Jawalakhalへ向かいながら、僕が全然ネパール料理を飽きないことを言うと、お母さんも助かると言っていてくれていたそうだ。よかった。で、その理由には、僕があまり肉が好きではないから、それが大きいのだろう、みたいなことを言ったら、「バリ」の人たちの話をしてくれた。

「バリ」はカーストのひとつで、達朗さんの奥さんのやすこさんが研究対象としている人たち。地元のNGOと一緒にフィールドワークをしていて、達朗さんもそれになんかしら関わっている。「バリ」はもともとエンターテイメントをになっているカーストで、王様や大地主に招かれて宴を彩っていた。だけれども、そういった大地主なんかがいなくなつてから、売春をするようになって、いつしか近代国家の歴史の中で、「売春をするカースト」と位置づけられるようになった。やすこさんなんかが活動するNepalgaanjiでは「バリ」の人たちがたくさん集まって住んでいて、まち中ではlocal NGOをつくつたり、行政へ働きかけたり、いろいろな活発な活動を繰り広げているらしい。そして彼ら

は肉と酒をすごく愛するのだという。

達朗さんやすこさんの付き合ひのある「バリ」の人たちはもう売春をやめているのだそう。だけれども、売春をしていたその頃はお金があったが、今はなくなってしまうて、Kathmanduに来たりするときには、大変むじい思いをするらしい。一応倫理上、あまりお酒を飲むことがよろしくないということになってるので、服の中に隠し持って入ってくるらしい。こっちで購入してもそうして宿まで持って帰ってくるらしい。お金がないのに、肉と酒だけは必ず食すのだという。それだけは、やめられないのだという。「せ、切ないー」といって二人で笑いながら会場へ向かった。やはりどのようなところにもそのようなものがあるのかは、彼の方が長けていて、いろんなことを教えてくれた。会場は前にJAFONのブックレット出版の際にセレモニーを行ったところだった。門を通り抜ければ、すごく静かで空気が落ち着いている。

会議では実際にHaruya Charuwa、Hait Kanaiya、Mohi Sukumbasiの立場にいる人、そういった問題に取り組む活動家、政治家、などなどが集まり、大変な盛り上がりようだ。それぞれの立場にいる人は、自分たちに関する発言があると、コールをする。一気に盛り上がったたり、歌が混ざったりする。後で達朗さんが、「これが最近はやっているのかなあ」みたいに言っていた。もともとそういう気質なのではなくて、単なる最近の傾向のようだ。お昼に休憩が挟まったのだが、この日の午前は、各代表者格の人たちが順番に宣言というか、発言をした。そして、ところどころで盛り上がる。これがこの三日のうちに、どのように意見としてまとめられていくのか、とてもわくわくするとともに、大丈夫かななんて思っていた。

お昼を取って、その後会場へ戻ると、さすがに達朗さんはいろんな方を知っている。そして達朗さんに関心を持つ人もいる。「おおっ」なんて思っていたが、そのおかげで、午後の会議（ここでは活動家なんかが中心になって、どんな状況にあるか、どのような対策が必要なのか、などを具体的に議論する）の会場へも入ることが出来た。外では当事者が日向ぼっこをしているというのに。

だけれども、僕もこの後予定があつて、三時には出なくてはならなかった。残念。でも言葉はほとんど分からないので、後で達朗さんに聞こうと思いつながらTempoに乗るんだ。

事務所ですべて取って、待ち合わせ場所に。待ち合わせしているのは吉原若菜の知人で、僕の訪問を迎えてくれるという。彼女から手紙を預かっていたのでそれを渡した。大変喜んでくれた。だけれども、会う前に修士号の最終試験があったらしく、かなり疲れているようだったので、この日はお茶だけだしなんで、来週の日曜日にまた会うことにした。

帰ってきて、食事のときに達朗さんに話を聞いてみた。最初はどのような運びになるのか分からなかったが、最終的には議論のまとめを政府に提出するのだそうだ。先ほど

の会場では五時半ぐらいまでみっちり話したのだが、彼もやはりこの三日間でなんかしらいい結論が出るのかどうか、疑わしいという感情を持っていったようだ。食事のあと少し作業をやって、そしてごろんと寝転がった。本当にあまり歩かない週末を過ごした。

晴れ、昼間も少し肌寒く

Homestay

Fried Rice + Hot Dragon Soup (4食) 100Rs、Tempo 5Rs.

十二月二十日 Sombear

この日は早めに事務所へ出勤した。今日明日と、マオイストよりバンダが宣言されている。そして二十二日、二十五日より、blockade も宣言されている。そんなでも Patan 周辺は落ち着いていて、気を引き締めなきゃならん、などと思ってみても、車がほとんどなく排気ガスが減ったまちは、単純に気持ちがいい。

朝のミーティングではまずこのバンダ、blockade 中の行動について確認し、今週予定していた行動についてどう対応するかをシェアしたあと、金曜日のミーティングについて話した。僕の意見をちよっと聞いてもらった。

Gopal さんがこの事務所に参加するようになってから、メインの作業部屋をミーティングルーム(事務所の作業スペースには大きく二つあって、デスクが置かれているワーキングルームとミーティングルームとに分かれている。ミーティングルームはそのほか食事にも使う。)としていたのだが、スタッフ間の何気ない会話やプロジェクト関係の簡単なお話はワーキングルームで各々の席に座りながら始まることが多い。これを聞き逃さないために、前かがみの変な姿勢であろうとも、ワーキングルームのお客さん用のテーブルで作業をしていた。かつ、夕食は大量に接種するのだが、いまだに時差を引きずって暮らしているの、消化しきれないままに寝てしまう。こんなのを繰り返すうちに胃がやられたのだろう。初めて体調の不具合を覚えた。ついでに腰も痛くなって、胴回りは大変なことになっていた。午後、JAFON の action-plan についてのミーティングをレワットさんも交えて行ったのだが、途中で退室するという大変見苦しい行動をとってしまった。

この日は帰った後、夕食もとらずにすぐに寢床に入り、ごろごろ、たまに眠りにつく、というのを繰り返した。二時間ごとに家族の方には大変ご迷惑をおかけした。夜中まで大変恥ずかしい。

晴れ、やはり肌寒い

Homestay

Nothing

十二月二十一日 Mangalbaar

二時間ごとくらいに目が覚めるのを繰り返していた。「今日は大丈夫だろうか」とぼやりとする中、お腹はぐるぐるおっしやってはる。この日お母さんはお祈りで朝早くから出かけていた。おかゆとミルクティだけいただいて、玉子は残してしまった。大変ご迷惑をおかけしている。

体調がこんななので、といっても元気がないとかそういうことではない。いつ緊急事態になるか分からない、というだけだけれども、回り道をしないですぐ、一番近いルートを通って事務所へ来た。早く治して散歩を続けたい。この日もパンダなので車は少なく、歩くのにはいい。牛が道のど真ん中で一步も動かない。たまに通る車がぐいんと避けるのだが、いつものようにクラクションも鳴りません。アスファルトの冷たい感じが少しするけれども、こんな日もいいもんだ。

早く帰ってきて、ごはんの時間までちよっと休憩のつもりで横になったら、そのまま寝てしまっていた。

—

晴れ

Honestay

Nothing

十二月二十二日 Budhabaar

寝坊した。すごく早く寝たのに。

朝ごはんはスープだった。おいしかった。これは病気のときにいただくものらしい。僕に合わせて皆さんがこの食事を取る。迷惑かけているなあ。でもおいしいし、まあ、いいんじゃないか。

もうパンダが解かれたので、Tempoが走っていた。前の日も試しに乗っていいこうかな、と思っていたので、お腹の調子は少しいいようだったけど、乗り込んでみた。朝もやがすごく、干してきた洗濯物は乾くのだろうか、なんて思いながら、だんだん見えなくなっていく来た道を、Tempoの乗り込み口から眺めていた。Tempo通勤もいいもんだ。橋の手前で降りると、橋の先が見えなかった。少し渡るのをためらってしまいうくらの霧だった。

しかしながら、僕にとつて散歩がいかにもいろいろなものを与えてくれるか、この数日間でもよく感じた。早く治して、また早く始めたい。基本的に食べなければ大丈夫なんだし。

五時半ごろネパール語のために出かけた。事務所の上の部屋を間借りしているカオリさんという女性がいて、彼女に自転車を借りた。この自転車がなんとも。漕ぐのがすごく大変で、確かに少し時間は短縮されるけれども断然歩いていくのをとる。もう、歩いていくに決めた！

帰り道、天皇誕生日をお祝いする垂れ幕の貼り付け作業を見かけた。なんとなく、なんとなくだけでも、こんなことでうれしい気持ちになってしまった。

晴れ、朝霧が立ち込める、だんだん寒い時期に向かっているのだということを実感する。

Homestay

Tempo 5Rs、TAXI 45Rs.

十二月二十三日 Bhitbar

バンダのおかげで月曜日のネパール語の授業がなくなつたので、この日に振り替えがあつた。朝少しの復習とちよつとの予習とをして。やはり連日になると授業にきつさを感じる。バングラへ行くことを伝えると、もう帰ってこないと感じたのかもしれない。最後の週は六日になってしまった！

なんか、ミルクティを飲むとお腹の調子が悪くなるのが統計的に分かつてきた。朝それを伝えて、せっかくなつくつてくれたミルクティを断ると、「ブラックティ、ダイジョウブ」（日本語で）という。そして「お酒ダイジョウブ、玉子ダメ、肉ダメ」、そして「薬」なるものを飲ませてもらった。これがまたおいしかった。

この日はカメラを壊したかなくした子にチャンスをもう一度あげる日。事務所と反対の方向へ向かって歩いていった。Jawalakheiのロータリーまで出し、Lagankheiへ大通りを歩いていく。その途中、焚き火に向かう少年たちがいた。その中にクリシュナがいた。彼は写真プログラムに参加している子で、そのときと同じ緑の服に上着を着ていた。そっちの方へふらつと近づいて肩をたたいて、手を振って先へ向かった。あいつかわい。すごく気の弱いやつ。

その後やっぱり一番にPatana Hospitalという病院の前で待ち合わせだけでも、時間になっても現れない。また場所を間違えたかと思つて、ロータリーまで行つてみたが、分かるわけがない。仕方がないから戻つてみたらスリジャナさん



【写真】 Patana Hospitalのすぐ前。タバコを一本単位で売っている。まち中でよく見る風景だが、いいサービスだと思う。



【写真】彼のようなタイプの人間には、まだ出会ったことがない。人に警戒心がなく、“何か”をあまり意に介さないやつだった。

がいた。土地勘もケイタイもないんだから、ちゃんと来てほしいなあ。でもそう、時間通りになるわけがないんだなあ、とあらためて感心した。ちゃんと場所を確認して気長に待つのが、いい日本人なんだろう。

CAP-CRONのおねいちゃんたちについてきた子らは全員が参加者ではなく、ただついて来たというやつらがいた。気のいいやつもいたが、ちょっと気になるやつもいた。僕がまだ出会ったことのないタイプの人間で、少しびびった。

三時までを予定していたが、午前中に全部回収できた。帰りはマイクロバスに乗ってTappathaiまでやってきた。初めて一人でマイクロバスに乗った。やっとういう乗り物なのか分かったけれども、これを使いこなすには、到底残りの時間では無理のような気がする。隣に座っていた人はとてもいい人だった。僕がMOOのインタンでこっちにいることを伝えると、彼もなんか農村開発に関心がある人のようで、いろいろお話をしながら帰ってきた。

三時からの勉強会に出かけた。AVCが主催するタリット関連のもの。ツアーのオリエンテーションという位置づけのようだけれども、公開で行っている。だけれども、講演者が突然変わっていた。マオイストの交通封鎖などで来らんなくなったそう。そりゃあそうか。彼はいろいろ批評をオープンにしているので、いろんな意味で危険な人だろうし。

講演の内容はいまいちだったが、質疑応答は面白かった。この国にいる日本人を感じるのにはとてもよい機会だった。ここには藤倉さんも参加していて、その他田中雅子さん、通訳としている小倉清子さん、その他どういう人なのか分からないけどネパールキャラの長そうな人たち、学生っぽい人たち。シニアボランティアのような人もいたかな。カマルさんにその後の食事に誘われたが、ネパール語があるので断った。TAXIに乗っていったが、とても遠かった。混んでいたし。この日は国王のインド訪問が見送られたかがあって、その関係で抗議運動かなんかがあったようだ。

こっちに来てから目がしばしばすることが多くなった。最初は疲れと思っていたが、そう簡単でもなさそう。空気が悪いせいかもしれない。目薬がほしい。

この日乗ったTAXIの運ちゃんはどうもいい人たちばかりだった。なんか気持ちがいいもんだ。

晴れ

Homestay

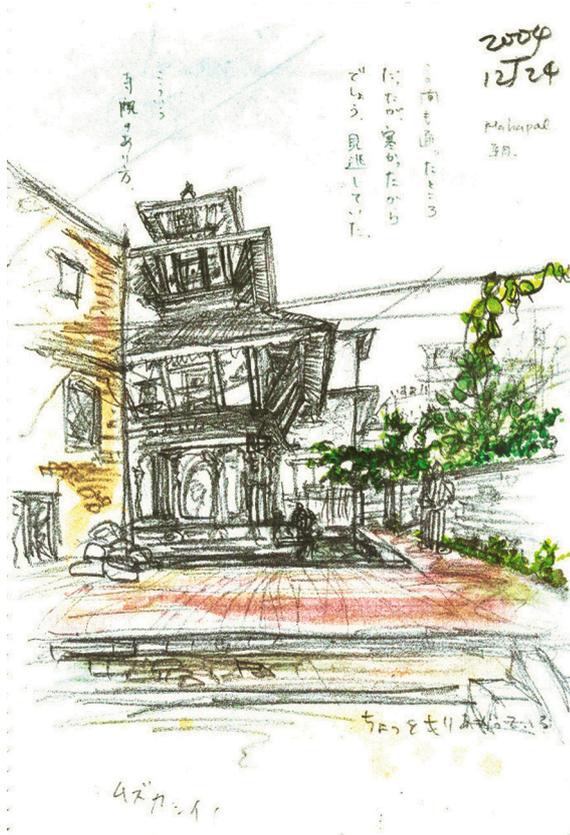
マイクロボス 7RS、TAXI 70RS、勉強会参加費 200RS、TAXI 165RS、TAXI 80RS.

十二月二十四日 Sukrabaar

お腹はいい感じだ。お母さんに言われたとおり、お酒もたしなんだし、玉子を食べていなかった。久しぶりに長い朝の散歩をすることにした。

朝から気分がいい日で、Patanの方へ流れていって、この間見た木の方へ行こうと思った。ステイ先から大通りを横切って、小道に入っていくと、今までも幾度となく通って見ていた住宅の風景がとても気に入った。今度はここを描こう。そのまま流れていって、もうすぐあの木の場所、というところで塔が見えた。この間は道の片側ばかりを気にして見逃していた。なんかいい感じ。うまく描けなくて、はじめて途中で全部消して描き直す、というのをした。それでも難しかった。

あの木をもう一度見て、またいつもどおりの道へ出て、それもつまらないからまた小道に入ってしまった。入ったことのない小道。ここは多分住宅用の道だろうが、突き当りまで来たらぱっと目の前が開けた。地形でいうとこの辺りまでが少し小高くなったところで、見下ろすことが出来る。そういうところなのでまだ住宅が密に建っているわけではなくて、草木もぼうぼう。先には畑までが見通すことが出来る。敷地的には人んちだろうが、そんなことはお構いもなく奥まで入って、しばらく眺めていた。



またいつもどおりの橋を渡り、スラムを通り、川沿いの方を意識しながら事務所へ着くと、ゴパルさんがいた。そういえば彼の鍵を借りて、持ちっぱなしだった。いや、恥ずかしい。この日の朝はいつものようにミルクティではなく、ブラックコーヒーにしておらって、メールなんか見ていたら、小松さんからいくつか注文があった。それをやっている、小松さんとスリジャナさんは Bakapur に行くのだそうだ。CAP・CRONのおじさんと一緒に、彼らがときによって legal support をしているところを視察しに。それにはついていくことにして、大慌てで注文を仕上げた。

視察したのは UCEP という職業訓練学校。拾えることばを探っていたが、集中して聴いていればなんとなくイメージは沸くようになって来た。人が使うことばなんて、そんなにたくさんないのか、あるいは僕らの分野の人たちはみんなおんなじような言葉を使うのか。なんか後者っぽい。レワットさんや子どもら、人権系の人たちの話すのは何かなんたか分からないもの。

UCEP の取り組みは非常にきめが細かい印象を受けた。力も大きいのだろう。そういうものをイメージさせる。一番感心したのは、就職斡旋についてだ。全生徒の 70% とか言っていたかな。そのくらいの実績を持っているそうだ。勉強になったなあ、と思いつつも、あれをシャブラと CAP・CRON とのパートナーの中でどう位置づけていくのかは、まだ分からない。規模と社会との関係において、じっくり考えるべきなのだろう。バンダラ研修でも、そこら辺をきちんと見てこよう。



【写真】UCEP、建築設計の教室にて。模型でもこんなに車がつまっているんじゃ、そりゃああんなに込み合うわけだ。

帰ってきて、レワットさんと約束があったのだが、まだ彼から電話はないようだ。あれ、僕がするんだったかな。そういえば、帰り道はえらく早くついたように感じた。帰りつついのはどこでもそう感じるが、なぜだろう。

飯を食ってもまだ電話がないのでこちらからかけてみた。なんか電話の向こうでは、忘れてたあー、みたいな雰囲気だった。一度切れてしまったが、何とか待ち合わせの約束までたどり着けた。電話を切るとスリジャナさんが「やるじゃない」みたいな顔つきだった。小松さんにも「レワットと電話で話せるなんて大したもんだ」と言ってくれた。実際にはよく分からなくて、適当に解釈して確認したら、それでよかったようだったけどだったので、ちょっと恥ずかしかった。

ちょっと待っていたのだが、なかなか来ない。やっぱり間違えたかな？ と思って不安になっていたら、やっと来た。TAXI に乗って。それで僕も乗り込んで再出発。このプロジェクトのための JAFON の事務所（要改築）を見せてもらうことにしていたのだ。TAXI が入っていた道は、僕がもう何度か通ったことのある道だった。後でここも

歩いたことがあるんだぜ、と言おうと思っていたら、この日の朝も通った寺院の前の広場でTAXIを停めた。ここはPatanから来るときにはいつも通るところ。いよいよ気分を良くしていたら、たどりついたところを見て驚いた。この日の朝、見晴らしがよくていいなあ、と眺めた、あの場所の麓、目と鼻の先だった。すんごううれしくなって、屋上が上がって「どうだ？」と聞かれて、「Ranui（最高だぜ）」といった。

ここは貧しい人たちが集まって住むところだろう。豚なんかの囲いがあって、ごみがあり、子どもたちや女たちがごみの手入れだか仕分けだかをしている。地形のまさに変わり目で、また寺院の真裏ということもあるだろう。木々だけでなく畑も残る、いい場所だ。この辺りにあって、平屋でこれだけ日当たりがよいのは早々見つからないだろう。知らぬ間に現れたオナーの女性も、「ここはいい！」と言っている。僕も素直にそう思う。レワットさんも「すんげえ、いい」とかいつている。だけど、いつまでこの環境が残っているかは分からない。もしかしたら十年もすると、この国の事情も変わっていて、寺院裏の土地も、どう扱われるか分からない。

気持ちいい陽にあたりながら、三人で屋上でのんびりし座っていた。お茶をご馳走になって、「またスケッチしに来ます」といつて帰った。

帰りは二人で歩いて帰った。レワットさんはすごく疲れていて眠そうだったが、僕に付き合っ歩いてくれた。いや、そもそもあんまりTAXIにも乗りたくはないような感じではある。それにしても四時から仕事をしているそう。帰りながらの会話もまた楽しかった。思い出すだけで、ちょっと笑いが止まらない。川沿いを歩いているとき、一度借りようと思っていた土地で、でも貸してくれなかったというところを覚えてもらった。川に面していてアクセスもよいが、プロジェクトを考えると、地形を考えると、断然あっちの方がいい。この先の開発具合によっては分からないが。

べらべらしゃべりながら事務所へ戻り、スリジャナさんによかったってことを伝えると、変な顔をされちゃった。こつちの人からすればそういうもんだよな、と思った。とても充実した一日だった。

晴れ

Honestay

TAXI 75Rs.

十二月二十五日 Sanbaan

この日はわくわくプログラムの写真セレクトの日。全員本来に来るかしたらん、なんて思いながら目覚めた。シャワーを浴びたり洗濯したりしているうちになんだかんだで時間食って、九時四十五分になっていた。

セレクトシヨンはJawakhalという、ステイ先からとても近くのところ。ぶらっと歩いていった。着いてみると、いたのはCAP-CRONのおじさんだけだった。つまりこのシヤプラで on time だったのは僕だけだったということ。シヤプラのオリジナルプログラマなはずなのだが、シヤプラは遅刻、ということになるのかな？ 少し、なんか情けない気持ちになった。一緒に日向に座っていると、おじさんが「昨日の研修はどうだったね？」と英語で話しかけてきた。僕も素直に感心していたコネクシヨンのことを話したら、「あれは重要だ」といつてくれて、少しそれについて話していた。

しばらくするや、SOUPのAnilさんもやってきた。二人子どもをつれて。そしてやっとこさシヤプラもやってきた。

Kishorさんが写真を持ってきて、それを見ながらわいわい言いながら、みんなでケースに入れていった。いい写真もあり、心躍る作業だったが、やっぱり「これだ！」というのなかなかないものだ。自分だってそんな簡単に撮れないもの。

WSはうまく進んだのではないかと思う。Parbatは全然いうこと聞かないが、まあ、それは彼の視点に立つてみればしょうがないだろう。そしてこのときはじめて捉えることが出来たのは、彼らは結構な年だ、ということだ。Parbatに話して、このWS.中僕が結構仲良くしていたSonam（彼は一度カメラを壊していて、再度撮り直している）だって、十三歳。数えかも知れないが、それに話して、中学一年生の学年だ。しっかりしているわけだ。だからって別になんとも思わないけど。

僕なんかはまた、カメラなんていう取っておきのアイテムを持っているから、たまに会うお兄さんとしては大分有利な立場にある。だからよく彼らを観察できる。本当、あいつらただの“小さい人”って感じだなあ。馬鹿なストリートの男たち。それに比べて、SOUPの女の子らのおとなしいつらない。みんないい奴らだ。

CAP-CRON が連れてきた子どもの中には、このプログラムに参加していないやつらもいて、この二人はセレクトを行っている間は暇そうにしていた。僕のカメラは彼らにとっては、この時間には宝物だろう。たまにある休み時間に庭でみんなで遊んでいた。そのときに僕のカメラで集合写真を撮ろうということになり、僕は工事もまだ済んでいない、埃だらけの庭先に腰を下ろした。子どもらもCAP-CRONのおねいちゃんもびっくりしていた。彼らは途上国の都会人、僕は先進国の田舎人、そんな違いかしら。案の定、僕のズボンのケツ辺りは真っ白になっていた。

WS.の後、高津さんの日本語聖書集会？ のクリスマス会に参加してみた。もちろんクリスマスチャンでも何でも無いが、ちょっとどういものか感心もあつたし。聖書に読まれたり円になって自分のことを話したり、映画で見たことのあることを実際にやってみて、ああ、こういうことだったかあ、って思うことがたくさんあつた。“community”のこととか、“人權”ということだったりとか。参加してよかったと思う。そして、これはこれで幸せなことだなあと思った。でも僕はやっぱり仏教徒なのだと思い返した。

その後、高津さんちのクリスマスパーティーにも参加してきた。いろんな人がいたけれども、多くは運動会にも参加していた人の方だ。僕の見た目が変わったのか、そもそもそんなに印象に残らない奴だったのか、僕を覚えている人はいなかった。あるいは一ヶ月半というのは忘れるに十分な時間なのかもしれない。こういうのに参加するのは初めてのことだったけれども、そして印象に残ることもあったし、うん、ネパールでの過ごし方としてはまずまずのクリスマスだったように思う。

晴れ

Homeslay

クリスマス会参加費 200Rs.

十二月二十六日 Aitabaar

朝ごはんのサンドイッチとお茶を飲んで、久しぶりのゆで玉子を食べた。あつたかくて、あれを両手でしばらく持っているのが好きなのだ。

前の日に取り込み忘れていた洗濯物を見に行ったら（洗濯物を夜干しっぱなしにするのは良くないらしい。お母さんに見つからないように見に行つた）、まだ乾いていなかった。この日もう一日かけて乾かすことに決めて、お昼までの時間、一時間くらい散歩に出かけることにした。

お昼を取って、その後またあの木の方へくると回って、JAFONの事務所の方へ行こうと思っていた。でも行き先がもう決まっているのは、何か気に食わなくて、やっぱり違う道を行ってみた。やっぱりこの Patan のあたりは面白いなあ。広場のような空間が、すぐには見つけられないのだけれども、やっぱりいくつかあって、まだ来たことのないそういう場所にくつか出くわした。中庭空間も、朝良く通るところとスケールも雰囲気も似ている。

JAFONの事務所の前までやってくると、ラズーが僕に気づいた。五人と見たことのないおじさんたちが集まっていた。改装工事が始まっていたのだ。といっても何かトラブル、というか進行・実務上の問題にぶち当たったらしく、それについて対策を練っているようだった。僕は邪魔かなあと思っただけけれども、この日はここをスケッチすると決めていたので、わきで集中力のない人っぽくぶらぶらしていた。水タンクの話に入って移動し始めたところで、ラズーに言って屋上へ上らせてもらった。そう、この景観だ！ みんなが仕事する中、僕だけのんびりスケッチをしていた。

といってもここはムズカシイ。僕が対象を浮かび上がらせることが出来るほどの観察力を持っていない、浮かび上がらせたいもののがはっきりしないことが原因だけれども、ムズカシイ。ラズーたちに笑われてしまった。



基本的に“在り方”が複雑なのだ。そしてそこに、なんともいえない自由な雰囲気を感じるのだ。いつの間にか全員屋上へあがってきていて、スナックをたしなんている。最後には僕たちになってしまった。彼らにもらったピーナッツをぼっけに入れて、また歩き出した。

New Baneswor のところからマイクロバスに乗って北の方へ行こうと思っていたが、なんと地図を忘れていた！地名も分からずにバスに乗るほどの度胸の持ち主ではないので、仕方がないから歩けるところまで歩いてみようと思った。CWISIで前にミーティングをやったので、あそこら辺りまでは行ってみよう。

小道にも入りたかったが、地図のないときには、後で振り返るために骨格をつかんでおかないと、と思い、少なくとも行きは大通りを行くことにした。ものすごく空気が悪くて、後で鼻掃除をするのが楽しみだ。真っ黒と思う。

大きな交差点なんかもいくつか経てきて、大分上へ上がったときなあと思ったところで、大分飽き飽きしていた。大通りはつまらない。ちょっとわき見ばかりし始めたところで、とても気に入ったところを見つけた。塔を起点にして、みつつの坂道が分かれている。その道の落ち込み具合がたまらない。でもまだ目標地点にも着いていないので、先まで行って、後でここを見ようと決め、歩を進めた。だけれども、一度気に入ったものを、後回しにすると痛い目に遭う、そう思って引き返した。随分時間をかけて描いたが、坂道を降りていこうとしたとき、絵の中にいる塔の前で野菜を売る女の子が恥ずか



しげに挨拶をしてくれた。そりゃそうだ。あんなけじつと見られているんだもの。僕も恥ずかしげに首を傾けて通り過ぎた。

そしたら、ここの辺りのすごく気持ちのいいこと。すごく複雑な成り立ちようで、僕が最初に歩いた真ん中の道は、基点の塔からも下るのだが、左右の地形も盛り上がりがついて、ちょうど小さな谷筋を形成している。そんなところにある。もう一登で気に入って、このあたりをずっと歩こうと決めた。New Banesworでバスに乗らなくて良かった。後で地図を見直して気づいたが、ここはPashupati Nath広場へと続く参道のような場所だった。広場前には店が並ぶ、だけれどもThamelのようなけばけばしさが少ない、生活感のある観光地だった。

広場の辺りからまたさらに北の方へ流れていった。そして大通りに出たところで夕方に傾き始めたので、この道をまた帰るのもつまらないし、そもそも遠いので、マイクロバスに乗って行こうと思った。おばちゃんなんかと並んで待っているが、彼らの掛け声を聞き取れる耳を持っていない。地図も持っていないから、僕の行きたいところがその途中にあるのか、そもそもそれを言っているのか、分からない。何度か確かめたが、違うバスだったらしい。

仕方がないのでTAXIに乗ろうと思ったときに、Lagankhel、という言葉が聞こえた。僕の住んでいるところをはるかに越えたところだが、それも面白いかなあと思って、声の出元であるマイクロバスより大きな普通のバスに乗り込んだ。バスはリングロードへ出てぐるっと東回りで南へ降りてゆく。Lagankhelのロータリーへ向かっていく。空港も市場もゴルフ場も通り過ぎて、だんだん陽は落ちてゆく。ちょっとした小旅行をしている気分になって、寒くなってゆく空気も心地よく感じていた。

このロータリーに、自分がバスで乗り付けるとは思っていなかったが、また空気の悪い別の道を、てくてくてくと歩いて帰った。

：

晴れ

Honestay

ネット 20Rs、一本 1Rs、バス 15Rs、ネット 10Rs。

十二月二十七日 Sombaer

もっと早く起きていたんだが、もう寒くて起き上がれなかった。ギリギリになってやっと動き出した。それでも起きていっても朝ごはんの用意はまだだった。だんだん日の出も遅くなってきている。僕の勝手に早く出て行くのは、とても迷惑をかけていることだと思う。

思い立って、Lagankhelの方へ歩いていった。子どもがいる方をのぞいて、それで

Tempoに乗って事務所まで行こうという算段を立てた。前に再撮影日のときに、クリシュナに会ったから、また彼に会えるかもしれない。もう少してバンガラへ行行ってしまふ予定だけれども、その前にもうちょっとできることをやっておこう。CAPRONのおねいちゃんたちは八時から歩いている。僕はその前の七時台から歩こう。クリシュナたちがやっていたように、火にあたるその生活も感じよう。

この日はクリシュナはいなかったのだが、彼と一緒にいた子どもらは今日も火を焚いていた。どうやって火をつけるんだが分からないが、そのうち教えてもらおう。この辺を朝歩いてみると、やっぱりあまりこちら辺のことを知らないんだなあと思う。しばらくはこうして通おう。ゆつくりでいいから手に入れよう。

Lagankhalについて。ロータリーの方へ行つてちよつと見てみたが、よく分からない。子どもも若者もいるが、それが何を意味するのか分からない。しばらくはCAPRONのおねいちゃんたちに着いていこうかな。少なくともバンガラから帰ってきた後は、そうできるといいな。

時間がどのくらいかかるか予想がつかないから、ちよつと早めにTempoを探した。子どもが立ちんぼをしているやつに乗ろうと思つたが、そんな奴はこの時間にいなかった。仕方がないから適当なのに乗つたのだが、なかなか出発しない。そんなに急いでいるわけでもないのんびり待っていたが、そしてこのTempoが周りのよりかなりきれいなものであることに気づいた。でも他の人はなかなか乗り込んでこない。今にも動き出しそう、そしてちよつと動き出しちゃつたようなやつに乗る。きれいな方がいい、そういう価値観がないのかもしれないし、そもそも僕が感じているほどの差でもないのかもしれない。

Thapathaliに着いてもまだ三十分ぐらゐあまつていた。裏のあたりを歩くことにした。川沿いのところは草が伐採されてしまつていて、スケッチをしたときのような素敵さが薄れてはいるが、それでもまだ大通りなんかより全然いい。歩いていると「ユーキー」という声が聞こえてふと顔を向けたら、Rajがバイクに三人乗りかかんかしてこつちを見ていた。彼は前にこのあたりをスケッチしていたときにずっと見ていてくれた人。ここらを通るときにはいるかどうか気にしながら歩いてきたのだが、なかなか出会えなかった。それにしたつて、あんな土道をヘルメットもせずに三人乗りとは。

この日はKisorさんも交えて最終的な写真セレクトを行った。写真の選び方は人それぞれで面白かつた。僕は完成度よりも、写真家の気持ちや被写体とのコミュニケーションを指標に入れる。そういう目で見るとなんと愛らしい写真ばかりだった。写真家には撮れない写真の多いこと。僕が心底気に入つた写真もあった。

ネパール語の帰りもすごく寒かつた。乗り込んだLAXIに暖房が効いていて、とても幸せに思つた。

晴れ、はじめて〇℃を切ったか切らなかったかだったらしい、寒かった

Honestay

Tempo 5Rs TAXI 80Rs.

十二月二十八日 Mangalbaar

寒い。少し問題に感じられるほどに、朝の寒さが身にしみるようになった。

クリシュナたちはまたいた。彼の、彼らの仕事の邪魔にならないうちは、こういう風に通って来てみたい。

五人で一緒に火にあたる。なんでもなくあたる。僕の付き合い方はこうやって始まる。自分で言うのもなんだが結構落ち着いているし、頑張らないので、これに耐え切れない人は結構いる。でもそれでいいのだ。鏡になる。大体「子ども」と呼ばれる人たちには通用する。時間はかかるかもしれないが、いいキヨリをつかめる。

当たり前だが火は温かった。あいつらのうち一人がベットボトルで遊んでいて、プビシュウつとなるのを楽しんでいる。僕もそれが楽しくて、大笑いしてしまった。火に手をつけてしまったり、サンダルを脱いでそのまま火の中に足を突っ込み、靴下を乾かしているのだろうか。オモシロい。

ほんのちよっただけいて、Lagankhalのロータリーの方へ向かった。彼らみんなに別れを告げて、立ち去った。みんな手を振ってくれた。「明日また来る」とクリシュナに言ってきたのだが、邪魔にはならないだろうか。歩いていると、今度はアミットがいた。もつとちっこい子と一緒にくず拾いをしているようだった。「よー!」みたいなことを言っていた彼の肩をぼつとつかんでやったのだが、いきなり「Rgおくれ」と言われた。「ないんだよ」と言ってしまったが、さてどうしたものか。この日はバングラ行きのチケット手配の関係で、大金を持っていた。また嘘ついてまった。対策を練らねばならない。

ロータリーへ着くと、Ashokがいた。なんか、いろんな人と一緒にいたので、今近づいていくのは今の僕にとっては危険だと思って、気づかないふりをして奥の方へ歩いていった。やはりLagankhalのあたりも歩いてみるとなかなか面白い。入り込んで歩いてみると、すごく小さなスケールになっていく場所もあり、家の前がオープンな通路になっっていて、潜り抜けるようなところもあった。なかなかいい空間があるもんだ。またMangal Bazaarとの中間地点あたりのネパールっぽい辺りまで行ってみると、やはりリングと軒の空間がまたいい感じを作っていた。暗い、明るくない空間性。気分が良かった。わくわく。に来ていた女の子がいるかと思って広場まで行って見たが、少々時間が足りなくなつてあまり見られなかった。さらにトイレにも行きたくなつて、マットを買ったお店のお兄ちゃんに頼んだ。すると向かいのお茶屋さんの二階に登っていった。「あれま」と思うような関係だなあ。

結局ステイ先のすぐ近くに戻ってきて、Tempo に乗って事務所へ向かった。

いよいよ、わくわくの仕事が大詰めになってきていて、今週は忙しそうだ。懸念材料もいろいろあった。帰り際、小松さんから話を持ちかけられて、CAP-CRONの話をした。これが頭から離れなくなって、ネパール語の授業中も少し集中力がなかった。

晴れ

Honestay

TAXI 70Rs、Tempo 5Rs.

十二月二十九日 Budhabaar

六時ごろ、シャワーを浴び洗濯物を干しに屋上へあがった。この日の水はなかなか温かくならなかった。最近毎日ネパール語の授業があるのでシャワーや洗濯物が億劫で朝まわしにしている。きつと朝の方が温かくなりにくいんだろう。指の感覚が、二度なかつた。

Jawalakhei をぐるっと回っていくと、まだ全然人が少なかった。ロータリーにはなつて「こども」Lagankhel のようにターミナルにはなっていないので、人の集まりも遅いのだろう。ビニールシートの下で暖をとっている人たちがあふれる。つまらないのでいたした時間を使わないで、彼らのいる大通りのごみ集積所に向かった。この日は人数が多く、その中にアミットもいた。アミットが走っているので犬がびつくりして逃げ出した。犬とじゃれているのかと思つたら、目当ては僕だった。こいつは相変わらず人懐っこいやつだ。少し持ち上げてやつたりした。

最初は大人もいた。『キラン』さんといつていた。『気をつけて』と僕のバッグを気遣つてくれたが、あいにくスケッチブックとネパール語の教科書しか入っていない。ある意味盗まれると大変困るもののだが、盗まれる覚悟ぐらいいはついていて、高校生を上回つたくらいの年齢のあんちゃんなんかもいて、しばらくうだうだ火にあたつていた。「お茶飲もう！」とアミットがしきりに言うのだが、お金もないし、出来ない。「お金あんまりないんだよ」と断つた。

しばらくすると大きいやつらとアミットと、あと一人が仕事に出た。クリシュナはまだ残っている。今度はクリシュナが「お茶飲もう」と言い出した。アミットと彼は僕と少し面識があるから、他の子と比べるとこんなことを言い出しやすいのだろう。他の子はまだ言わない。「できん」と言つた。

彼らが集めているのは、ちよつと柄のついたビニール、例えば「TOP」の袋のようなものが多かった。これを各々の袋がいっぱいになるまでここで焚き火なんかをしているのだろう。僕にはどれが「お金」になるビニールなのか見分けがつかない。「アレもそ

うなんでないのか？」と思うものも、ほつたらかしになっている。たまに燃やす。

1kgで15Rs.の収入になるそうだ。大体60cm×80cm位の大ききの袋に5kgくらい入るのだそうだ。

ペットボトルをあつためると破裂する。そんなのをしながらだらだらと時間をつぶした。そうしていると大人が一人やってきて、ちょっと大きいやつも戻ってきた。大人の彼が引き連れて、クリシュナもプロバーフ（前にCAP-CRONのAnbikaさんとYashodaさんと歩いてきたときに、このあたりより少し南の方で会っている）も出かけた。「じゃーねー」と言つて。この日はついていけなかったが、いつかはそうさせてもらおう。

残りは僕と子ども二人との三人だけになった。今度はアミットやクリシュナの態度を見て安心し始めたのだろう、一人が「お茶飲もう」と言つた。よく状況を見ているもんだなあ。僕がお金ないとは言つても、三人なら何とかなるだろう、と思つたんだろつ。だんだん僕もお茶が飲みたくなつて、最初は断つていたが、最後には僕から誘つて三人でお茶を飲んだ。あつたかつたあ。

僕だけ少し早く飲み終わった。左ポケットから取り出して見ると、もうTempoに乘らないといけない時間になつていて、二人を置いて前を通りかかったTempoを止めて乗り込んだ。「ゆつくり飲みなさいよ」と言つて二人に手を振つて別れた。体は煙の匂いでいっぱいだった。隣のおねいさんたちはどう思つているだろう。

事務所へ行くと、ゴパールさんが、「小松さんはスリランカへ行く」と言つ。なんか急な展開だ。

この日は「わくわく」のこともやつて、バングラデシユへ行くための連絡や、ネパール滞在延長の手続きもする予定でいた。なんか慌しい気分になつていたので、延長手続きの事務員ののんびりさや手際を得ない行動にイラついてしまった。さらに銀行で出来ると朝確認した「C」からUSDへの換金も出来ず、なんかこの国で手続きをしたり、そういうえば待ち合わせもこれまで一度もうまくいかないでいるのを思い出した。慣れるのが大事、ということなのかもしれないが、そもそも慣れる時間があるわけではない、貴重な時間の中を過ごしているのを思い出して、少し気を落としてしまった。こっちにも都合があつて、感じたり確かめたいことがいくつもあるのだ。しかしながらこの日のうちに手続きは完了したし、来る途中に見た公園で、あれだけ多くの人が日向ぼっこをしている圧巻とも言つべき風景を思い出して、何とか気を取り戻すことに成功した。

TAXIに乗つて事務所へ戻り、その途中でえんぴつを買つた。だんだん、自分のスケジュールとタイミングを取り戻して来た。

晴れ

Homestay

茶 3Rs、Tempo 5Rs、TAXI 27Rs、滞在延長手続き 2123Rs、一本 1Rs、

お茶 5Rs、TAXI 42Rs、えんぴつ二本 20Rs、TAXI 110Rs。
△換金>T/C \$150 →10362Rs。

十二月三十日 Bihbaar

朝起きるとちよつとどが痛くなっていた。風邪かしら。

朝ごはんを食べていると、お母さんが「頭イタイ」としきりに言う。最近よく言うのだが、寒いときには頭がすこく痛くなるのだそうだ。僕が勝手を言っ、お父さんがいないときにも早くごはんを出してもらっている。寒くなってきたら、僕のなどどでもいいから、ゆつくりしてもらいたいなあ。

早めに出てきた。車も少ないし、寒さが堪えるけれども気分がいい。Jawalakhetまでの道ほとんどの店が閉まっている。バス待合所みたいなところで、タバコを売っておさんが一人いるくらいのものだ。そんなことすらも前の日は気づかなくて。この時間にJawalakhetに行っても誰もいない。日本のホームレスにそっくりな人が、少し窪んだところにうづくまっていた。それだけしか思うことがなかったので、すぐにごみ集積所に向かった。

前日に一緒にお茶を飲んだ二人しかいなかった。はあ、これは、と思ったら、やっぱり「お茶飲もうぜ」と誘われた。この日は僕のこの場所デビューを記念しようと思っ、前の日より多めに持ってきた。「後でみんな来てから一緒に行こう」と言っ待たせた。「今日は(お金)ある」ということも伝えた。

七時半ごろ、すごいビニール袋の大荷物を持った女性がやってきた。二人が見張りを任せて走っていた。面白いなあと思いつつながら見張りの焚き火をしていた。その女性と三人で協力しながらここまで持ってきて、まずどばあつとぶちまける。その中から使えるものと使えないもの、そして燃やしちやえるものを分ける。燃やしちやうていものはほとんどん僕の見張る火の中へ投げ込まれる。火はほとんどん大きくなる。七時四十五分、棒にかごをふたつづら下げて女性がやってきた。多分いつも来る人だろう。立て続けにそういう人がもう一人来た。それにも飛びついた。

ちよつとすると、少し大きめの男の子と、一緒にいたのと同じ年くらいの子が現れた。もう八時を回っていたので、そしてさつきはまだ来ていなかったお茶の屋台がやってきていたので、一緒にお茶を飲みに行くことにした。僕も入れて五人全員で行ったのだが、集積所にお客が来て三人は走っていった。後から来た男の子は残っていて、二人と一緒に笑って見ていた。この子がいろいろ説明してくれた。お茶が出来る頃呼びつけ、一緒に五人で飲んでいたので、最初から一緒に火にあたって二人はまた走って戻っていった。すばらしい！ 彼らは言い訳のきかない世界で生きているのだ。

もうちよつと火にあたりたくて戻ると、クリシユナともう一人の子がやってきた。彼

にも「お茶飲んで来い」と言つて、必要なだけの金額を託した。その後考えて、少しお金にも余裕があつたので、もう一回全員で行ったら、たけし軍団みたいでオモシロかったなあと後悔した。次からはそうしよう。そんなことを考えていたら、なんか、ケンカが始まつた。ちょうどクリシユナたち二人が戻つてきたときだつた。よく分からないから無視して火にあたつていた。

八時半ごろになると、ごみ収集の人たちがやつてきた。大きなトラックだつた。JAFONの仕事はこういうことかあ、と思つて見ていた。そうか、ここで彼らのここへの滞在は終わりなんだ。そういえば朝はごみが少なかつた。こういう収集の人たちが毎日来ているのだ。この日はいろいろ観察が出来てオモシロかつた。

八時四十分ごろ、時間にあつふあつふしてきて、彼らに別れを告げて「Tempoに乗った。最後の頃にはアミットがやつて来ていたのだが、一緒にお茶を飲む時間はなかつた。少しかわいそうな気がしたが、まあいいや。きっとそのうち僕とお茶を飲むのが楽しくなるでしょう。

“わくわく”の仕事を続けた。この日は山本先生（平楽中学）が訪ねてきた。休暇でKahmanduへやつて来ていて、明るる日に帰るといふ。ストリートチルドレンのことなどを聞きたいと言つたので、最初は小松さん目当てだつたようだが、僕とおしゃべりをしてた。この国の開発のこと、彼女の知つているネパールの知識、ネワールのことなどについて話した。彼女の教育者的発想が面白く、興味深くもあつたが、その考え方からは、僕としては少しキヨリを取らなければならぬなあと思つた。そしてこういう人たちに伝えるための翻訳作業こそ、国内活動の本質だろうなあ、と思ひ返した。山本先生から誘われて、ネワールの人たちの食事会に合流することにした。

帰りに際に停電が起こつた。というよりフェューズが飛んだような感じだつた。たまたまみんなの作業が終わつたのか、定刻過ぎに停電が起こつたから分からないが、スタッフは一斉に帰つた。僕は電話だけはつながるのでメールなどをギリギリまでチェックしていた。

ネパール語の後、やっぱり山本先生とは合流できなかった。あきらめも早かつた。もう、出来るだけ約束はしないようにしようと決めた。

晴れ

Homeslay

お茶 31 + 16Rs. Tempo 5Rs. TAXI 77Rs. TAXI 108Rs. TAXI 80Rs. ヴー
ル・野菜カレー・ライヌ（夜） 190+5Rs. TAXI 95Rs.

十二月三十一日 Sukrabaar

この日の朝はちよつとあつたかかった。集積所が見えると、ちよつどいいものがたくさん来たところのようで、もう暴れまわっているかのようにはすこい動いていた。ときどきにごみの袋が舞い上がる。あの中に、昨日は僕だけ座っていたのだ。我ながらいいポジションを取っているなあと思う。こんなときに後から入っていくのは邪魔になりそうなので、気が引けてしばらくそばへ立っていた。するとおばあちゃんの見え方の女性が杉の枝葉を捨てに来た。なかなか籠から出せないでいるので、それを思わず手伝った。おばあちゃんはあるがたそうにしてくれて、僕にしてみてもなんとなくそこにいることのもどかしさがなくなった。きつとそれが伝わったのだろう、別の女性が「金くれ」みたいなポーズを取った。「ないんです」と言った。だつてないんだもの。

それでもこの日はまだ座らずに立っていた。いつもの男の子が「お茶飲みにゆこう」と言ってきた。今日は「今日はないんだよ」と断った。前の日に後から来た大きな男の子が焚き火のそばへ誘ってくれた。だんだんいい感じになつてきているなあと思う。ちよつとすると、アマットが目隠しをしてきた。かわいいやつだ。彼らと一緒に座っていると、人が僕を少し不思議がつて眺めるようになっていた。いい気味だ。クリシユナたちがやってきた。どうやらかわりばんこで外回りをやっているようだ。もつともつと彼らの生活を知りたい。

やがてクリシユナたちは「Junk Center」へ行つてしまつたし、僕も時間がなくなつてきて、それだから行くかと思つたら、アマットが「SR、おくれ」と言った。お茶を飲むのだそう。そうか、彼はまだ僕とお茶を飲んでいない。彼らの関係がどういふものかまだ知らないけど、きつと他のやつらから僕と一緒に「お茶を飲んだことくらい聞いていよう。でも本当にあまりないから、「明日また来るよ」と言つて、さよならをした。ちよつとふてくされていた。そりゃあそうだ。

Tempoに乗りながら、彼らもいつまでも「お茶飲もうぜ」とは言ってくれないだろう、と思つた。そこで、「土曜日は日本人のお兄ちゃんとお茶を飲むデー」というのを思いついた。

事務所へ着いて、すぐ「わくわく」のミーティング。この日に発送してしまふことにしていた。しかしながらトラブった。まずはDマガどこにあるのか分からなかつた。小松さんしかこういう作業をしないのだろう。慌てて走つて買いに行つて、戻つてきた。お店でも、Dマガを伝えるのに苦労した。戻つてきて最後の箱詰め。やつと終つたと思つていたら、郵便局へ届けに行つたスクマヤさんから電話がかかつてきた。お金が足りないんだと言う。スリジャナさんも別用で出かけていて、小松さんもないから金庫が開かない。ゴバルさんと僕の持ち金あわせても足らなかつた。スリジャナさんには、電話をしてもつながらないんだと言う。「no way」と言つて、ゴバルさんと大笑いしながらあきらめることにした。電話を切つて、ほんのちよつとしたらスリジャナさんが帰つてきた。なんとというタイミングでしょう、これは。あと二分でも早ければ。事情を伝える

と、彼女ははじめこそ大笑いしたものの、「チッ」って言っている。まあ、どうしようもないので僕は穏やかでいたら、何を思いついたのか、スクマヤさんから電話がかかってきた。彼女はモバイルを持っていないし、話はさっきの電話で済ませてしまっていたから、あきらめていた事務所がお祭り騒ぎになった。スリジャナさんがバイクに乗っていくことになった。出かけようとしたとき、財布を見て足りないことに気づいた。また大笑いして、少しゴバルさんと折半することが足りるようだった。

ネパール語から帰ってきて、ちょっと日記をつけていたら、九時半を回っていた。いつの間やら日本では新年を迎えている時間を過ぎていた。少し、日本の人たちのことを思い出した。

—

晴れ

Honestay

Tempo 5Rs. TAXI 80Rs.

一月一日 Sanibaar

前の晩は起年会を部屋で催し、前の年に来ていたメールを、一年分見返してみた。とても懐かしいどころか、これがこの年のことだったとは信じられないことばかりだった。環境というものは、大変影響力のあるものだ。結局、こっち時間の年越し間際までかかってしまった。

この日の朝は初日の出を見るために起きた。と言っても毎日勝手にすごい早い時間に目が覚めるので、六時を回っているのを確認して起き上がった。上着をまどって帽子とマフラーをして屋上へ上がる。写真セレクション以来のカメラも持った。空もあたりはまだ薄暗く、犬や鳩の声ばかりが聞こえる。こういうものかあ、と見渡していた。冷たい空気がおかしい。のどにお化けがいるみたいで、なんか白い息が白装束の女の人かなんかになったら面白いのに。向かいの家の最上階、おそらくダイドコだろうか、明かりがついて、女性が火を起こすしぐさが見えた。

やがて隣のおばあちゃんがお祈りをしに来た。山のところで赤らんでくる風景とともきれいだっただ。やがてお母さんがお供えを上げに上がってきたり、タンクの水が限界地を越えてあふれ出たりして、騒がしくなってくる。いい新年を迎えているなあ。曇りだったから結局初日の出はなかった。ただ、向こうの方で、あの雲の向こうに赤いまん丸があるんだろうことだけは確認できた。それで十分だった。何枚か写真も撮った。

八時ごろ出発をした。着いてすぐ「お茶飲もうぜ」と言われた。前の日に思いついた「土曜日はお茶飲みの日を大々的に宣言した！ すると「Sanibaar chiyaa khani din（土曜日はお茶の日）」と言って、何人かトリズミカルに繰り返して言っては笑い合っていた。

だけれども、この日はここ何回か行っていた屋台が来なかった。土曜日と新年とが重なり合っているためらしかった。大きな目のおにちゃんが言っていた。すると教えてくれた子よりも小さい子から一斉に不満がもれた。「明日にしよう」と提案されたが、日曜日は来られるかどうか分からない。カマルさんと約束をしていたから。どうしたもんかと思っただが、しょうがないし、「月曜日にしよう」と言った。でもなかなか納得のいかない子がいた。「飲みに行くから四人分の 20Rs くれ」と言う。そりゃそうだよな、一緒に「Sanibar chiyaa khani din」と言っていたし。だけれども、お金をあげるのはつまらないので、「それは嫌だ」と言った。一人はまだ「明日」と言っている。「どっちもダメだ!」。

うち二人はかなり不満そうだったが、彼らが行こうとした時「付いていいいか?」と聞いてみた。すると彼らは大喜した。

どうやらこの大喜は、お茶の大喜ではないようだ。「僕らの家に行くんでしょ?」僕らの家に行こう!」としきりに何度も言われる。なんか、JAFONのプロボーザルにある言葉がどういふことなのか、少し感じる事が出来たように思った。

ごみの袋の中のひとつは彼らにとっては大変重い荷物で、頑張っで運んでいた。頭に引っ掛けて。感傷的になるのは好きではないが、「えらいなあ」と思ってしまった。この重い荷物を運んでいるのは、木曜日に一緒にお茶を飲みながら、何度も行ったり来たりしている二人を一緒に笑っていた子。やはり遅れ気味になるので、僕はこっちに合わせて歩いてた。彼は一度落ちてしまったときに担ぎなおすとき以外は、手伝ってくれとは言わなかった。僕がいなかったら、先に行っている他の子が駆けつけるか、あるいは意地でも一人で持ち上げるだろう。先では僕らを他の三人が待っていた。「ここでお茶飲もうぜ」と一人が言う。ひと仕事の後には、ここでお茶を飲むことにした。

やはり彼らは、「おごつてもらう」のが好きなんではなくて、「お茶を飲む」ことが大得意になるほど好きなのだ、という感じがしてきた。一人が「ドーナツは?」と言うので、まあドーナツくらいはいいだろう、と思っで店のおばさんに聞いてみた。出てきたのはパンだったが、それは一個 5Rs と言う。相場では 3Rs なのだろう。彼らは「要らない」と言った。清算すると、五人で 30Rs。つまり一つ 6Rs。彼らは「たけえよ」と言う。もう来ないって。基本的に無駄遣いが好きではないのだ。

付いていく道は楽しかった。いろいろ説明してくれた。「このドーナツは 3Rs なんだよ」とか。やつぱり「家に行こう」も繰り返す。

最初に行ったのはごみ分別所とでも言おうかな。彼らが「カバルと呼ぶところへ行っただ。たくさんごみが積まれていた。ここの風景をアミットが撮っていてくれたので、少し理解がしやすかった。ここでは完全に浮いていたが、浮いていることになんかビビらないし、子どもがしきりに僕とコミュニケーションをとっているので気もまぎれずにいた。

その後、彼らが「僕らの家」と呼ぶところへ行つた。が、すぐトイレに行きたくなつて、草むらの中へ。すると出発すると言うので、そのまま大きな子にぐつついて、先の方へ歩いていった。

そういえば、この大きな子は「カバル」の中にも入つてこなかった。そして、彼が押している自転車にくくりつけた「生ごみ」（これが結構重くて、僕はこれまで三回くらいかな、自転車へ乗つけるのを手伝つてゐる）もおろしてゐない。持つていくところが違うんだらう、そしてこの日の最後の仕事があるんだらう、と思つてゐた。

リングロードを越えて、もう周りは柵田の風景になつてゐた。道も舗装されてゐない。そんな坂道を彼はやはり言い訳もしないでしっかりと押してゐた。着いた先は豚を飼つてゐる場所だつた。聞くと彼の家だという。そう、彼はそういうカーストの子なのだ。そして、彼がおろさなかつた荷物は、この豚の餌になる。

つまり、彼らは一緒にはゐるのだが、一緒の目的でごみの集積所に集まつてゐるわけではない、という訳だ。彼の名はクマル・マガル（「マガル」というのは、チベット系のあるカーストの人たちに付く姓で、身分は低い地位に置かれてゐる）（この名は後で一緒に歩いてゐるとき彼が教えてくれた）。クマルはこの豚たちの餌のために、そして他の子ら（この日はクリシユナはゐなかつたのだが、彼も合わせてよくごみ集積所で出会う四人は一緒に住んでゐる。そのうち二人は兄弟。この兄弟にはさらに一人弟がいて、みんなはこの一番下の子を「カイレ」と呼ぶ。この子は茶色い髪の毛をしていて、ネパール語で茶色を「khalo」と言う。そこから来ている。実は、この「カイレ」には一度会つてゐる。CAPRONの二人と朝歩いたときに、プロバールなんかと一緒にいた。この三人兄弟には両親がいて、その家にクリシユナともう一人が居候してゐる形なのだらう。）はプラスチックや鉄くず、ビニールなどを集めてゐる。だけれども、一緒に作業をしてゐる。クマルも一緒にビニールやプラスチックを拾うし、他の子らも生ごみを拾う。そういうグループなのだ。

クマルのところでお茶をいただいた。茶菓子のビスケットもいただいた。とてもおいしかった。ここにはいくつかの家族が一緒になつて暮らす、大家族だと思ふ。お茶を飲んで外を見に出ると、すごい霧が立ち込め、空は曇つてゐた。少し肌寒かつた。見て回るとクマルが餌の煮出しのようなことをやつてゐた。僕も寒いのでそつちへ行くと、大體終わったのだらう、彼から「行こう」と言い出した。僕は彼のお母さんたちに挨拶しに行つて、他の子らの共同の家の方に向かつた。

他の子ら（ここでは「カイレたち」と呼んでおく。）は飯を食つてゐた。クリシユナをさつき見かけたが、もうゐなかつた。家の中に入れてもらひ、彼らが食べるのを見てゐた。中にはさつきはゐなかつたお父さんとお母さんも一緒にゐる。僕はお父さんの隣のベッドの上に座らせてもらった。カイレたちが「次の仕事」へ向かうとき、カイレたちのお母さんとお父さんに自己紹介した。二人の大人のことは、クリシユナが写真を撮つ

ていたので顔だけは知っていた。僕が訪れたことを喜んでくれた。

彼らの「次の仕事」は「仕分け」だ。さきほどの「カバル」まで移動する。それまでの道は楽しかった。耕運機に飛び乗ったり、そして叱られたり、犬に吠えられて吠え返したり。カイルとそのひとつ上の子ども大分なついていた。そりゃそうだ。これだけ力持ちなお兄さんはそういない。

「カバル」にはクリシユナがもういた。なんかもう一人の居候に対して怒っていた。多分仕事のことだろう。ここでの仕分けは、僕には分からないので、犬と遊んだり、まだ仕事するには見分け聞き分けのないカイルがたまに話しかけてくるのをあやしたり、そしてちよつと大きくてクリシユナ一人では持ちきれない袋なんかをひっくり返すのを手伝ったりしていた。

ずつというのも邪魔になるなあという気がしてきたところで、「何時まで仕事するの？」と聞いた。「一時まで、そうすりゃ終わる」と居候が言った。この居候は大変気がきく。ここに来るまでゆつくりしたネパール語でいろいろ説明してくれたり、たまに簡単な英語を使ってしきりに話しかけてくれる。僕が聞き取れないことにもきちんと教えてくれる。他の子が、僕んちに行きたい、と言っても、「それじゃあネパール人の家族がこの兄ちゃんを怒る」と言って、なだめてくれたりする。「じゃあ、一時ごろ戻ってくるよ。その後お茶しよう」と言ってお昼ごはんに戻った。

午前中だけで、随分いろんなことを感じたなあと思いながら、ステイ先へ。さすがに午前中のことは一切話さなかった。食べてすぐ出かけてきた。

戻るとクリシユナと三兄弟の一番上の子がいなかった。少し奥まったところへ行行って残った小さめの三人で話していると、二人が戻ってきた。だけれども、二人はまた出かけた。「まだ仕事あるんだなあ」と感心してみた。だけれどもなんてことはない、彼は仕事はしていないかった。朝お茶を飲んだ店のほど近くのゲームセンター（と言ってもただテレビが三台並んでいて、それぞれ別々のゲームが流れているだけのこと。ここに全部で十五人くらいかの子どもが集まっていた。）でゲームをやっていたようだった。待ちきれなくなった僕らはその間にお茶屋さんへ行行ってしまっていた。

と言うより、彼らは勘違いしていたのだろう。僕が「その後お茶飲みに行こう」と言ったときも、ぴんと来ていない感じだった。そう、二回もおごってくれる気前のいいお兄ちゃんだとは思っていないかったのだ。一緒にお茶屋へ行った居候も、二回目のお茶飲みに最初は気が乗っていないかった。そして、「あまりお金ないんだ」と支払いを気にしていた。だんだん面白くなってきた。

クリシユナとも仕事上がりのお茶をたしなみたかったが、ネパール語の授業へ行かなければならなかった。他のメンバーは一度はお茶を飲んでる。そしておそらくこの日一番頑張つて仕事をしていたのはクリシユナだろう。僕が行こうと別れの手を振つたとき、少し何がなんだか分からない、といった表情をしていた。

ネパール語は最後の授業だったが、これといって特別なことは何もなかった。授業中に、会話のために彼らの話を少しした。基本的にこの先生も、偏見持ちの普通の人の人だ。僕が言葉足らずなのも原因だが、勝手にどんどん解釈していく。どこに行ってもこういう人はいるもんだなあ。頭のいい人に多く、正義漢気取りの人にも多い。「自分は頭良くないから」と言う人の多くは「ムズカシイ」と言って聞きもしない、けど他の人にもいもしない。大体物事っていうのは、そういう風にいるいろんな勘違いによって成り立っているんだろうなあ。人それぞれの解釈があつていいと思うけど、一度会って見て確かめてみれば、何てことないことなんてすぐ分かる。

早めの夕飯を久しぶりに取った。

――

曇り、これは、こちらに来てはじめての天気だ

Homestay

お茶 30Rs、お茶 20Rs、ネット 10Rs、TAXI 75Rs、TAXI 80Rs、ネット 5Rs。

一月二日 Aatbahar

勝手に目が覚めた。土曜日はこれまで、朝ごはんが少し遅くなるので、久しぶりに本なんか読んでいた。藤倉さんが貸してくれたのだが、著者の経験に基づいた視点からネパールを、物語として描く、という試みだったようだ。序盤は面白かったが、だんだんつまらなくなつていった。というより、彼女のよさがだんだんなくなつていく、そんな本だった。

子どもらに会うようになって、彼らの生活に見合った手足の動きをするために、洗い易いズボンと上着を買いに行った。靴下も二足ほどぼろぼろになつてしまつていて、そういうのも買いに。満足して帰つてくると、旅行会社からわざわざステイ先にまで電話があつたという。二回も。ちよつと一息ついているうちにもう一度電話がかかつてきた。すると、三日の航空チケットは結局取れなくて、四日のほかの航空会社のチケットだけが取れるという。僕が「取れた」と勘違いしていた三日のチケットは、「三日のチケットをブッシュしてその返答を待っている」という状態だったのだそうだ。待っているって、何日前だと思っているの。

お昼ごはんをとって早速旅行会社へ。パスポートが必要なのだという。本当はチケット代も払つておきたかったのだが、貴重品のいくつかを事務所へ置いているので、そういったこともままならない。旅行会社のカウンターでいろいろ手続きをしていると、ビザが必要だという。うかつだった。そういえばチケットが決まらないのか、そのほかのやり取りに気をとられていてビザのことをすっかり忘れていた。しかもバン格拉ビザ

取得には、日本大使館に一度行かなければならないという。しかも日本大使館は三日までお正月休み。一日しかないのに大丈夫なのだろうか。旅行会社の人は「大丈夫だ、問題ない」という。こういう気質は面白く、楽しんでもあるが、これまで何度か悩まされてもいる。

なーんか、バンガラ行きのことが始まってから、いろんなことがうまく行っていない。始まりから思い返していたらだんだんイラついてきてしまった。散歩してもこれでは風景が良く見えないので、ふいっと帰ることにした。この日はなんか無意味な一日を過ごしてしまった。カマルさんにも約束すっぱかされてしまうし。もう一度訪れようと思っていたスラムにも、行く時間がなくなってしまった。

ちよつと無理をしているのかもしれない。

――

晴れ

Homestay

ｽﾎﾝ 640Rs、おかし 174Rs、土着 250Rs、ネット 80Rs、TAXI 120Rs、

TAXI 80Rs.

一月三日 Sombear

この日の朝も子どもらに会いに行った。パブルーという子だけだった。この場所でも一度、そしてCAP-CRONのおねいちゃんたちと歩いたときにも一度会っていたので、「よっ」と言っただけで近づいていった。一緒に火にあたっていた。彼のペットボトルの遊び方は高度で、他の子どもよりも面白い。うまい具合にぶくうつと膨らませたり、一気に爆発させたり。間がいい。やがてクマルやサンデー、ラザといった面々がきた。土曜日にいたのはクマルだけだった。

その後また違うやつがやってきた。そいつはもうちよつと大きくて、お兄ちゃんといった感じ。土曜日にはごみ分別所にもいた。彼とはまだ話せていない。

「土曜日はお茶の日、だけれども、次は僕がいないので、この日に振り替えてやってもらいたいかななんて思った。ただ月曜日にずっといるのは初めてで、タイミングが難しかった。収集車も行ってしまっただけで、一通り済んだかなあと思ったところで「お茶飲み行くか」と誘った。オツケーということ、いつもの屋台に行った。

みんなで移動したはずだったが、屋台に来ていたのはラザとサンデーだけだった。他の二人はどうやら回収に出かけたらしい。「まだ終わっていないかったのか」と思いながら、五つ頼んだお茶が出来上がりつつあった。なかなか二人は戻らない。一度戻ってきたがまた別のところへ出かけた。「こりやタイミングを逃したなあ」と反省していたが、三人で先にたしなんで、五人分のお金を払った。「あとで二人来るから、飲ましてやっ

てください」と店主に言い残して、僕も出発せねばならん時間になっていた。

勘定を済ませていたので、僕が最後にごみ集積所に戻った。やっと戻ってきた二人にお別れの挨拶と、お茶のことを伝えようと思つて。近づいていくとなんだか様子がそわそわしている。聞くと、なんとあとから持つてきた袋（彼らのごみ分別所へ持つていくのに使うもの）二つが無くなったのだと言う。血の気が引いた。一緒に飲んでいた二人が見当たらない。どうやら探しに走り回っているらしい。目と鼻の先だから、きちんと見ているつもりでいた。

今行くわけにはいかない気になって、走り回る二人が向つた「JawaKatu」の方を見ながら、どうしたら良いか考えていた。やがて二人が帰ってきて、「どうやら二つの袋は他の人が来て、カバル（ごみ分別所）へ持つて行つたらしい」という情報をつかんできた。パブルーとラザとサンデーはその後すぐごみ分別所へ向つた。クマルは落ち着いていた。彼はお茶を飲んでから行くという。一緒に飲もうと誘われたが、「行かなきゃならないから」と言つて、さよならを言つてTempoに乗り込んだ。

えらいことになった。彼らの言い訳のない生活に見合つた接し方をしたかった。自分で決めた、そして約束した原則を簡単に破つた。それが一番悪かつたと思つた。土曜日いろいろなことを知れたから、いい気になっていたのかもしれない。反省の多い日だった。

事務所へは少し遅れてしまつた。いつも一番に來ているのはじめて遅刻してしまつた。情けない。それでもいい知らせもあつた。JAFONの事務所へは、初めての運営の日に三人が宿泊したという。

その後スリジャナさんが彼らの事務所へ行くというので付いていかせてもらった。するとびつくらこいた。毎朝行つているごみ集積所に最近良くあられるおばちゃんがあった。この日の朝もいた。前には「お金くれ」と言つていた人だった。ここから來ていたのかあ。JAFONの事務所はちょうど井戸を掘つているところで、その作業をのぞいたり、部屋の使い方を確認したり、大家さんに挨拶したり。この大家さん、僕はとても好きだ。歸りにTAXIに乗れるところまで歩いていこうとすると、あのおばちゃんに付きまといわれた。僕はネパール語がそれほど話せないのです、スリジャナさんが標的になつた。悪いなあと思ひながらも、聞き耳を立てながら歩いてきた。「小さな部屋に住んでいて、小さな子が四人いる。どうしたら良いのよ」みたいな内容だった。こういう人のこと、ちゃんと考えなくてはならない。今は何でもないが、例えばSOBの活動の対象に彼女が含まれていたならば、ちゃんと誠意を持つて対応しなければならぬのだ。

戻つてきて「わくわく」の仕事に取り掛かつた。スリジャナさんとの役割分担があつて、結構でこずつた。この日はカマルさんとの約束の振替日。でも翌日にバングラ行きを控えているので、どうしても終わらせていかなければならない。約束の時間を過ぎてしまつて、やっと行ける！、というところで電話をした。彼はまたその後別の用事を

控えているという。結局会えないことになった。夜電話で話しましょう、ということになったが、電話はつながらなかつた。なんだかなあ。聞きたいこと、聞いてほしいこと、それぞれ整理しておいたのに。

なんか、やっぱりおかしい。自分のスケールをきちんと持とう。今気落ちしているわけにはいかない。

晴れ

Homestay

Tempo 5Rs、茶 25Rs、TAXI 120Rs、TAXI 110Rs.

一月四日 Magalbaar

僕がバングラに行っている間に藤倉さんはNepalgunjiに帰ってしまおうという。彼と一緒にいるのもこの日が最後だ。朝早くから、借りていた本を読み始める。返さねばならないから。まだ起き上がってこないで、クリスマスのお借りにお借りしていた200Rs.とちょっとお手紙を添えて、お母さんに託した。

朝はごみ集積所へ向った。ちょっと緊張していた。バブルーがいたら、僕はどういう態度を示すべきなのか、昨日一日悩んだ。もう来ないことにするのか、それとも取り戻すプロセスをきちんと踏むのか。夜と朝では結論は出ずに、Jawataknelでタバコを一本買った。

堂々とした態度でいることには決心し、集積所へ向った。土曜日に一緒にいたやつらしかいなかった。

彼らは土曜日のテンションを引きずって、僕の存在に気づくとすぐに「ツァール! (Siri)」といった大騒ぎし始めた。ディリプ (三兄弟の真ん中の子) は飛びついてきて、いつもどおり力持ち振りを発揮してやった。この国にそういう文化はないのだろうか。高いところへ持ち上げて、急降下なんてやってやると、本当に始めての経験のように「おっおお」という。

バブルーはいなくて、今日は来ないらしい。外回りかなんかなんだそうだ。昨日の荷物の件をクリシュナたちに聞いてみたが、彼らは来なかつたから知らないという。クマールは知っていると思って聞いてみたが、ごみ分別所にもなかつたという。彼は分別所には行かないはずなので、バングラから帰ってきたらきちんとバブルーに会って確かめようと思う。そしてきちんと謝りたい。でも何を? 誰に謝るのだろうか? 分からない。バングラへいるうちにきちんと考えたい。謝るのもしかしたら筋違いかもしれない。

この日いた彼らとは盛り上がった。焚き火にかけたペットボトルが破裂して、その前に燃やしていたポリエステルが吹っ飛んできた。皮膚が露出した部分へは僕の右手にだ

け飛びついてきて、斑点模様のやけどを負った。彼らは全くの無事だった。彼らの名前も全部聞いた。後からラジット(まだ話していなかったおにちゃん)も加わって。いろいろネパール語も習った。クリシユナは生意気にも嘘を教えやがった。嘘のつき方がセンス良かった。

八時二十分ごろ、ステイ先に置かせてもらっていた大荷物を取って、TAXIで日本大使館へ向う。その中で考えた。僕の“お茶”に対する態度はふらふらしている。きちんとしなければならぬ。そして、土曜日、というのは何かと都合がいい気がしてきた。僕が望む彼らとの関係において、“お茶”は仕事を一通り見終えた後に一緒にたしなむんでなくてはならない。そのことをきちんと伝えよう。帰ってきて次の日は土曜日だ。

大使館へ着いた。ちよつと早かった。結構並んだが、僕は日本人なので並ぶ必要もなかったらしい。そんなの嫌だなあなんて思いながら、バングラデシユへの滞在ビザを取得するための手紙を書いてくれ、と頼んだ。すると用紙を持ってきて、記入してくれという。これを提出すると、「明日来てくれ」という。「今日バングラ出発なんだ。昨日まで休みだったでしょう? 今日でも大丈夫だと昨日確認したから今日やってくれ」と念を押すと、早速取りかかってくれた。その後ずつとカウンターのすぐ前辺りでじつと見つめながら立って待っていた。「座ってくれ」と言われた。

何とかバングラ大使館へ行く時間を残して手紙を受け取った。でもなかなかつかまらないTAXI。大使館というのはそういう場所にあるもんだ。近くだつたような気がして、地図を取り出そうと思つたが見当たらない。バングラへ行くから部屋へ置いてきたんだっけ。もうしたもんかと思つたら、ぼけつとこじているTAXIが反対車線に停まっていた。必要な書類に記入を済ませ、提出した。今度はバングラ大使館の人が「三時半に来てください」という。「飛行機は四時出発だからそれでは困る。何とかしてくれ。昨日まで日本大使館が休みだったんだ。でも今日で大丈夫だと聞いたからこうして来ている」と言つたら、「なんてこつた。どうしたらいい?」なんて聞かれてしまった。「お願いです」と念を押して、早速取りかかってもらつた。

その後事務所へ。最後の挨拶と、コンピュータを取りに。ここへ向うまでのTAXIでは、いろいろお話できた。ネパール語に慣れてきている。来たときとは全然違う感覚で過ごしている。今バングラへ行つていいんだろうか。メールチェックなど最終確認を済ませて、お昼をとつて。その後スクマヤさんとアチャールを買に行った。

時間に余裕を持って、律儀に二時間前に空港に着いた。午前中から大使館へ行き、そわそわした時間を過ごしたというのに。でも結局飛行機は一時間も遅れた。なんということだ。

空港について、CHECK INのカウンターに行つても、全然受付が始まらない。お前らが二時間前に来いって行つたんじゃないのか、と言つても何にもならないし、イラつくのは後々損するばかり。一番前にいたのに、後ろからどんどん人が前に入り込んでくる

し、「まあ最後でもいいや」と思って、列を離れて、ベンチで本を読みはじめた。

カウンターをちらちら見ながらも、やはりなかなか始まらない模様。すると隣に座った人が、「飛行機がすぐく遅れている、今日は飛ばないかもしれない」とか言う。慌ててチェックモニターを見てみると、軒並み前の飛行機が二時間ばかり遅れていた。「あーあ」なんて思っていた。彼は違う航空会社の飛行機で、インドへ行くらしかった。ほとんど最後の順番でやっと受付を終わらせて、出発ロビーで本を読みながら待っていた。モニターはなかなか「搭乗」に変わらない。「セキュリティ・チェックを受けといてください」つてのから変わらない。結局四十分過ぎて何も変わらないので、こりゃ長期戦だなあと思い直して、のんびり椅子に腰掛けていた。

そしたら「ダツカー」という声がおやり、と思って、「ダツカが何だつて？」と聞いたら、なんと、飛行機へは時間通り搭乗が始まり、実は僕待ちだと言う。

そう、一時間遅らせたのは何を隠そうこの僕。その理由は、「読書」。

モニター見たらやはり何も変わっていなかった。セキュリティ・チェックのカウンターの表記にも、他の航空会社の名前が書いてあった。おいおい、と思いつながらも、すべてのお客さんが、僕ただ一人を飛行機の中で待っていてくれることにやはり少し心が痛む。そういえば、呼びに来たおじさんは、さつきも何か言いにロビーへ来ていたっけ。他の係員と話しながら、「日本人でもうチェックを済ませていて、こいつに間違いない」つて言うようなニュアンスで話していた。彼はすんこい怒っていた。大げさなリアクションで、会うなりすんこい怒られた。

他に誰も乗っていない移動バスに乗って、みんなが見守る中、帽子の無精ひげのチベットの顔の男の子が、ひよっこり飛行機に乗り込んだ。セキュリティの最終チェックは受けていない。でも僕のかばんの中にはカッターナイフが。スケッチ用のえんぴつ削り用。飛行機は乗り込んですぐ出発。このスピードには苦笑いした。席を探す時間もないので、僕は一番前の広いスペースのある特等席、しかも窓側でロビーまで行くことに。「遅れてみるのもいいんだなあ」なんて気まぐれ任せに思ってみたが、僕が遅らせたせいであつという間に暗くなって、何も見えなかった。

遅れて乗り込んだせいで、なんか、入国カードみたいのも受け取っていなかった。結局そのカードもイミグレーションで並んで受け取って、結局また一番最後に。一時間遅らせただけでなく、迎えに来たダツカ事務所スタッフを、もう一時間待たせることになつてしまった。情けない。

バン格拉へ到着したその日から、のんびりすること、形式的なこと・ものを信用しないことを、深く学んだ。そうなのだ。僕のリズムがちよっとおかしかったのは、そういうところが多分にあつた。

晴れ

シヤプラニールダツカ事務所

一本 1RS、タバコ 50RS、アチャール 53RS、CHARGE 770RS、TAXI
120RS、TAXI 28RS、TAXI 170RS、TAXI 110RS.

一月五日 Buthabaar

七時まで二度寝してしまった。本を読み始める。サイフルさんが朝早めに出勤して、僕に会いに来てくれた。彼が僕と会うのを楽しみにしてくれていること、それはちょっと予想していたが、うれしいもんだ。一緒に朝ごはんを食べた。

本を読んでいると白幡さんが朝のミーティングを知らせてくれた。ネパールであわせたきた時間と十五分ずれている。十五分の時差があるらしい、そんな馬鹿な。ミーティングがあることは知っていたが、遅れそうになってしまった。聞いてみるとなかなかネパール語に近い音が聞こえてきた。自己紹介をして、分かる意味の音や、しぐさでこんな意味だろうというものをノートに取っていた。どうせ人の名前なんて覚えられないし。次のサービスタップのミーティングにも参加して、しばらくしてからPARIへ出発。

DhakaはKathmanduと比べて大変大きい。とても広い。こういうところでのストリートチルドレンたちは、やはり本質的に違うだろう。オポロジエヨが楽しんだ。そしてPARIへの移動中に見た農村風景には心が躍った。本当、集落のようなものは見えなかった。本当に、平らな地形の風景だ。多分、一家が大きな意味を持つんだろう。PARIに着いて、中森さんがこの日インタビュする子に会った。かわいい子だった。おしゃれに気を使いそうな印象で、彼女は学校の成績のことを話してくれた。高校生に入っただそうだが、この間試験が終わったばかりなのだそうだ。男子は参加率が低かったと言う。女子は三十二人と言ったっけかな？ トップ10は女子だった。そして彼女は、その中で二番だった。大体どこへ行っただ、女子の方が一生懸命勉強するもんだ」と僕は言った。自分でこう言ってみたものの、われながら結構鋭いことを言ったなあと夜になって後から思い直した。

中森さんが彼女にインタビュしている間、カサンさんとバザールへ買い物に行った。とても楽しかった。途中の薬局でお茶をおごってもらい、タバコをもらった。「タバコ吸う？」と聞かれる。後から思い返してみると、これ、よく聞かれた。そして、この人たちは、断るとかなり悲しそうな顔をする。タバコが吸えてよかったと思う。子どもらの僕への眼差しが面白い。思わず付いてきてしまう気心に内心爆笑する。

お昼を取って、中森さんに別れを言って、村へ行かせてもらった。舟が印象的だった。結構大型のやつで、長い距離をいけるだろう。漁も出来るだろう。海まで行っちゃえばいいのに。それじゃあ漁業権の問題で殺されちゃうか。一緒に行ってくれた彼は、農村生活を良くは知らないようだった。もしかしたら当たり前のこと過ぎて知らないのかも

しれない。

帰ってきて、お茶を飲んだ。ネパール語とバングラ語の共通点が話題になって、少しいとお茶の時間を過ごせた。ちよっと休みがてら本を読み、七時の夕食まで昼寝をしていた。

夜はSIDシヨミティへ。昼間に行ったのと同じ、バザールから抜けていくところだった。SIDシヨミティは二十人の男たちで構成されている。ネパールの人たちとはやはり大分違って、関係ない人までわんさか集まってきた。さっきの子どももそうだけど、意味なんてないんだろう。続々と集まってくる。いろんな質問をされ、歌を歌わされた。『記念樹』を歌った。『めだかの兄弟』も歌いたかったのだが、リクエストされたのは『幸せなら手をたたこう』だった。僕はあの歌詞は、実はとても好きなのだが、リクエストされる歌としては嫌いだ。連れて行ってくれた彼が、これ見よがしにどういう歌なのか説明していた。きつとここでは『日本の唄』ということ以外に意味を持たないと思うんだが。

帰りには、バイクの後ろから肩越しに空を見上げていた。星が出ている。でも僕はこの夜空よりもすごい星空を知っている。あときの夜空の星空は、ほんとにすごいんだなあと感じた。

帰ってきて早速床に就いた。やはりかなり疲れているようで、露骨に頭が痛かった。日記をつけつつも途中でダウン。電気を消して目をつぶるとカエルの歌が心地よかった。長野を思い出す。『かえるのうた』の替え歌をつくってみた。長野は今の僕にとっても大切な場所だ。ネパールでは思い出さなかったような気がするが、ここで思い出すとは、カエルの合唱にあたりりの静けさを意識しつつも、度々通る車の音が気に喰わなかった。PAPRIももっと奥まったところにつくればいいのに。そんなことしたら村人から土地を奪うことになっちゃうのか。

晴れ

PAPRI

石鹼 13TK

一月六日 Bhiibhar

暗い時間ながらも気持ちよく目覚めた。トイレに行こうと足元を良くみながら戸を開けると、外では蚊帳に包まれて寝ている人がいた。ああ、こうやって寝ていてくれるんだあ。空には昨日よりも少ない星の空がまだ残っていた。

七時になってもなかなかご飯にならない。毎朝ごはんは七時にしよう、と夕方確認したのに。どうしたんだろう。八時。出発の時間だけれども、出発もない。朝ごはんはあ



【写真】 AFEPで識字訓練に取り組む女性たち。右側に写っている子どもの絵を描いていると、あつという間にみんな集中力をなくしていった。

【スケッチ】日本人の右が描いた子どもの絵(左)。僕が描いたのを見て、ここへ連れてきてくれた PAPRI スタッフが試しに描いた(右)。へたくそだ。

NVS 高校のロケーションはとても良くて、うれしかった。三時から ASEP へ。これは女性の学級。行っても言葉が分からないのが痛い。大分僕のこともしゃべっているような気がする。まあ、気にしてもしょうがないので日本人の石になってみた。最初は大分怪しまれているようだったが、絵を描いたりするとほ

NVS 高校のロケーションはとても良くて、うれしかった。六〜十年のクラスを見た。とても楽しかった。六年生が圧倒的に多く、この学年は女子が多い。学年があがるごとにだんだん生徒数は少なく、女子と男子の比率も同じくらいになっていく。僕が挨拶に教室に入ると、みんな一斉に立ち上がる。何の号令もなく、立ち上がる。一緒に回ってくれた校長が、「まあまあ座りたまえ」みたいな感じでみんなを座らせる。高学年になっていくとお互いにだんだん慣れてきて、十年のクラスでは「ありがとう」とか日本語で挨拶をしてくれるやつもいた。確かミラン君という奴だった。

NVS 高校の道は、リキシヤにとっても大変そうだった。でこぼこの道をこいでくられて、たまに手で押して。僕なんか歩いてもいいと思ってるくらいだから、ちよつと気がめいる。彼らにしてみれば仕事で当たり前のことなのかもしれないが、これはバングラにいるうちには慣れなかった。途中で歩いている人を見たりすれ違ったりすれば、なおのこと。



【写真】 PAPRI ナラヤンプール事務所の前。部屋を出たすぐのところで昼間、男や子どもたちが水浴びをしている。

くれる。僕がいるのを面白がって近づいてくるおじちゃんとかいるし、僕は僕で絵を描いたり写真を撮ったりして勝手に勉強している女性とコミュニケーションをとっているし、先生はちょっと迷惑そうだった。この日の予定はこれだけだった。

戻ってきて体を休める。この日は木曜日で、明日からお休みに成るから多くの人が自宅へ帰るようだった。やがて静かになっていく部屋の様子。集中して本を読んでいると停電が起こって、もうどうしようもなくなった。蚊に刺されないように蚊帳に入って寝るところがりながら物思いにふけていると、帰り際の人が、いろいろ訪ねてきてくれた。僕の姿を見てびんびんに起きているとは思えない。「眠っていたのかい、失敬」ってな感じで一言残して帰っていった。

暗い中では。暗くても日本にいたるときみたいに不気味な感じがしない。この国には妖怪がないのかな。事務所には、昨日外で寝ていたキンリン君と僕だけに。ごはんの後、ちょっとおしゃべりをしていたら、また日本の唄を歌わされた。まあ、彼にしてみたら僕とのはじめてのやり取り。でも物思いに浸りたいので、お休みを告げて部屋に入ってしまった。

カエルの歌が聞こえ始めたのは七時くらいからだったか。キンリン君もなにやら歌っている。甲高い声がしばらく聴こえていた。

晴れ

PAPRI

タバコ 17TK マッチ 1TK

一月七日 Sukurabaar



【写真】農家訪問。僕みたいなのがリキシャに乗り、PAPRIのサービスタッフの人は自転車で行く。

この日は事務所が休みなので、希望していた農家訪問に。でも最初に訪れた人は病気で、作業風景や生活風景は見せられないとのこと。別の人を探ることになった。シヨミティメンバーではない人の農場を希望していたのだが、結局メンバーがいるところへ行くとことになった。でも楽しかった。

一番の印象は結構いろんなものをつくっている。僕はこの辺の目をきちんと持っていないが、しかも結構大きい面積で。米ばっかりだと思っていたが、これはPAPRIのフィールドならではのかもしれない。写真を撮るのに夢中になった。

お昼を取った後またフィールドへ。また見て回る。牛が田んぼでぐちゃぐちゃやって

いるのが、僕には印象的でとてもうれしい光景だった。別の牛は米を干している横で紐でつながれて草食っている。この牛は僕を大変怖がっている。こいつの写真を撮った後、何食わぬ顔でその横を通り過ぎようとしたとき、がーとかやってみた。牛はびびって跳ねまわって逃げ惑おうとしていた。それを見ていた村の女性たちが一斉に大笑い。全然怒られなかった。子どもが真似したが牛は全然びびらない。

この日までに何回か移動したが、気づいたのは結構障害者がいる。白内障の人やびっこ引いている人を良く見かける。聞いてみたら、十〜十五％は障害者なのだと言う。障害者の定義にもよるだろうし、その概念は広いから、この数値をどう捉えるかはムズカシイ。でも見てきた感じでは素人目にもやはり結構いる。そして、これを開発の枠組みで何とかしようとするのはさらに難しいのではないか。問題の本質からいって、やっぱり農村の方が難しいだろうと思う。というのは、都市ではごまかしが利くから、というか、後から振り返らないと、分からないことが多いから。その点農村はごまかしは利かないし、建前と本音、意志と現実、勘違いされる振幅も大きい。

農村を歩くのは僕にとつても楽しいことだったが、ただ、いい目をしている人ほとんど会わなかった。子どもも含め。途中で一人英語を使って話しかけてきた男の子がいた。何歳くらいだろう。日本でいえばゆうに高校生には値するだろう。しきりに話しかけてくれるのだが、僕はそれほどお人好しではない。そういうのに付き合いに来たのではない。僕のカメラに興味を持って触りたがる子どもの方がよっぽどました。あつそ、みたいな態度をとり続けた。彼の目は全然輝いていなかった。

帰り際に野菜市場に連れて行ってもらった。事務所のすぐ近くにあるもので、市場と言っても大きくはない。路上で野菜売りや魚売りが集まっているくらいものだ。だけれども、どんな食材が並んでいるのか大変に興味があったし、そもそも市場の雰囲気が好きだ。立て続けにシャッターを押ししまった。

これらの野菜は一度中央に出されたものを売っ



【写真上】逃げ惑う牛。この写真撮影の後に「がー」っとやった。

【写真下】大根畑。手だけでも写りたい子どもたち。それは一体何なのか。



【写真】PAPRI事務所のすぐ近くの市場。魚や野菜、香辛料の色鮮やか。しかしここにあるものは、この付近でとれたものではない。

ているのだそうだ。つまり当たり前のことだが、この土地の人はこの土地のものを食えないわけだ。日本の地域づくりでもよく言われることだが、ここをキーと捉えて何かストーリーが描けないだろうか。

この日は金曜日。付き合ってくれたスタッフもみんな帰っていった。本当にありがたい。

晴れ

PAPRI

Nothing

一月八日 Sanbaaar



【写真】MC ショミティの集金は、とつてもとつても待つ仕事。

ごろごろしながら七時まで。目をつぶって考えると、日本のことをすごい思い出した。かつこいい人たちのことも思い出した。

朝、時間を勘違いしてちよつと準備に遅れた。この日の午前中はMC ショミティへ。とてもゆつくりと、彼女らが返済しに来るのを待つ仕事。待つ、というのはいつだって大切なことだ。これは毎週行う仕事なのだそうだが、意外に思ったのは返済の金額を受け取るだけの仕事だということだ。『開発』と言ってしまえば少し気合が入ってしまうのだが、こういう雰囲気が進んでいるものなのだ。どんな具合で活用されているか、見に行ったりすることはないのである。でも忙しいし、大変だろうなあ。毎週行くのも得策ではないだろう。コミュニティの中に入り込んでやる仕事としては、とても辛いと思うし。小額とは言え、村人にとっては大変なことなのだ。

MC の方法論と結果はすごいものだと思う。でもプロセスはやはりきついでだろう。これをどっちが良いのかを論じるのは、倫理観などがすごい絡む。少しでも良いからSNとかPAPRIとかで楽しいイベントが催せると、またいいのだが。イベントなんていうと手垢がついていてインチキ臭く聞こえるが、なんと言うかな、この新しい生活リズムに見合った『ハレの場』を、今までを踏まえたこれからのアプローチの中で位置づけられたら良いのになあ。こういうのは、『生活』をサイクルのな観点から見た場合に、とても大事なことに思う。モチベーション、なんていうとまたインチキ臭いなあ。

帰ってきて、「どうだった？」と聞かれたが、簡単には応えられない。このショミティの仕組みを聞いた。「明日話しますよ」と伝えたら、もう次の出発の時間になってしまっ

た。

午後は poorest of poor のグループへ。空間性に貧しさが描かれているような気がする。こういうのは結構大切なのだ。日本でも地域づくりがいいところは、農業や生活道の風景も含めて、美しいものだ。それに見合ったスケールもあって、ここは、そういう点でちょっと雑然としている。

Patan の Sanepa のようなおおざっぱともちと違う。ちと心が窮屈になった。少し時間を置いて、グループのところへ。家や集落の雰囲気を見せてもらうことにした。レンズに収めた草を食っていた牛に早速突っ込まれた。

歩きながら、PARR のスタッフにいろんなことを聞いた。聞いているうちに、後ろと横と前とは、総勢五十人ほどの子どもが僕の足取りにあわせて付いてきていた。バイクの通れる一段高い道まで出たところで急に子どもを追いかけてみた。泣き出す子がいたのでやめた。僕は大笑いした。向こうで女性たちも大笑いしていた。

こういうのを見ると考えずにはいられない質だ。今の PARR のアプローチは、彼らとの関係づくりだという。それはとても重要なことだが、その先まで見据えてどういう支援がありうるのか、アイデアをいろいろ考えてみた。どれも現実的ではなかった。彼らの子孫がいなくなるまで、待たねばならないのだろうか。それともその前にこの国がインドになっちゃうのかな。

最後にグループメンバーの彼女らに質問する時間を得た。といっても何をどう聞いたら良いのか分からない。「僕がこうやって訪れることをどう思いますか?」と素直に悩みを打ち明けてみた。「とてもうれしいことだ」と言ってくれた。うれしかった。とても。僕に質問はないか、聞いてみればよかった。後から思い返ってそう思った。

夜はワーキングチルドレンのための夜間学校へ。これはとても面白かった。自己紹介をして、授業。途中で歌なんかも入った。一人、十五歳の何とか君といったか、国歌を歌ってくれた。すごいテンションだった。周りの子どもたちももつと歌いたいと盛り上がったが、盛り上がりすぎて怒られた。隣に迷惑だろう、つてな感じで。僕はもう大笑いだった。あー、オモシロかった。

こういう学校の体系を経験したのは初めてだ。なんか、こういう中で、良い子くんに育つやつばかりでは、もちろんないだろう。あるいは悪者になるやつだっているだろう。僕らの知る“教育”を受けることと、“師”を得ることというのはまったく違うのだ。このとき、外部者の人間は何をすべきだろう。こういう試行錯誤を含めてバンガラデシユなのではないか。今、コミュニティ・アプローチという大きな流れの転換期において、外部者が入ったせいで変なになるのが一番良くないと思う。自分たちの民がやっ



【写真】突っ込んできた牛。カメラを抱えたまま後退。僕はうなった。

たことではなければ、良くないと思う。それでも外部者の視点、というところにプロ意識を持つとするならば、きちんと日本のことを知らなければならぬ。方向性を示すのではなくて、ギャップを伝える、そういう外国人でありたい。

帰りの真つ暗な道。たまにライトで照らす人がある。タバコの火が、ある存在証明になっているのが面白かった。彼らには、芸術に触れる機会があつてほしい。地域、という観点から内発的な発展を目指すとき、これはすごい意味を持つと思うから。

晴れ

PAPRI

Nothing

一月九日 Aaitabar.

シャワーを浴びてまずCEPへ。この日出会つたのは五年生。きつと全員が同じ年ではないだろう。僕は写真を撮つたりえんぴつで遊んだり、邪魔ばかりするから大体子どもには人気がある。

いつも面白いなあと思うのは、彼らはノートをほとんど間横において、あたかも下から書き上げる縦書きのノートのように文字を書く。まあ、最後の上部の線を引くのにその方にした方が書きやすいのは、図面を書いたことのある僕には良く分かる。そしてびつくりしたのは、彼らの英語の教科書が結構ハイレベルなことだ。こんなの中学に入つてから習つたよ。いつから英語習っているんだろう。そして変な発音で習っている。先生の発音とか、変だ。このクラスでよくできる子がいて、彼女が読んだ英語もなんだか意味が分からなかった。そう、これでいいのだ。これが何なのかなんて、誰もわからないのだ。みんなにバイバイして戻ってきた。

戻ってきて朝ごはん。なんか、女の子がやたらいた。JICA関連で農業訓練を受けた女の子たちだという。彼女らへのインタビューがこの日あり、中森さんはJICA職員や役人なんかの付き添いでPAPRIに来るらしい。みんなきれいな格好をしていた。なんかきらきらしちやっっている人もいた。

十時から障害者に会いに行くことになっていたが、十時半になつても音沙汰ない。こういうのにも慣れてきて、ハサンさんに聞いてみた。忘れていたようだ。すぐ出発した。障害者の人たちにはさすがにガツンと来過ぎてしまつて、逆に何も建設的な思考が出来なかった。こればかりは家族や社会の中で、ともに暮らしていくほかないのではなにか。少なくとも今は、でも結構普通にその人たちの暮らしの中にあるようで、面白かった。会つたのは四人。口元にわずらいを持っている人と、二人のポリオ患者。そして知的障害者の人。後に会つた三人は、十八歳や十二歳という年齢が信じられないほど小さ

【写真】ポリオ患者の子。顔の筋肉を動かしてみているのだろうか。触診の様子。
【写真左下】この子は家の二階に、竹の囲いの中にいた。





【写真上】二人目に会った、18歳の子。座椅子の上に乗っているのは、12歳の知的障害者の子。

【写真下】PAPRIからの帰り際に女性ショミティのひとつに立ち寄った。たくさんの人が集まってきた。多くの人は、何に関心があるというわけがなく、何となく集まってきてしまっているだけだろう。

く、そのうち一人は家の前の竹で組まれた囲いの中にいた。僕たちがこういう生活風景を知らなくなったのはつい最近のことなのだろう。うちの母親の実家や、僕がこれまで訪問した地域でも、よくあった話なのだろうと思う。

戻ってくると中森さんがもういた。女たちへのインタビュをのぞかしてもらった。女性省からやってきた女の人は偉そうで、最初印象が悪かったのだが、後で中森さんに聞いたら僕が予想しているよりもっともつとイメージ通りの人で、逆に大好きになってしまった。

帰り途中に女性ショミティに寄ってインタビュ。ここでJICAの人のインタビュ内容がとても気に喰わなかった。自分が満足するための質問つて、馬鹿だと思う。ダツカに入ると、赤信号で停まったところで男の子が車に近づいてきた。ふんふんふんふん鼻歌のような呪文を口にしながら車の窓を拭いた。僕はその姿が面白すぎて、で、思った通りのタイミングと姿で運転手に手を差し伸べたとき、思わず声を出して笑ってしまった。思わず中森さんが財布からお金を取り出した。

晴れ

シャプラニールダツカ事務所

タバコ 17TK

一月十日 Sunbaar

この日の朝、シャワーのお湯の出し方、温度調節の仕方をはじめて知った。何でもやってみるもんだ。あつたかいお湯に触れるのが久しぶりで、少しうれしくなった。朝ごはんもうまかった。PAPRIのレポートを作って、次の日からスタッフ合宿に出かける中森さんに託した。

この日はオフ。午前中ABに挨拶に出かけたのだが、中森さんはすごいきれいな格好をしていて行く先々で褒めちぎられていた。この日は日本大使館の新年会なのだぞうだ。

僕は招待状がないから行けない。別に行きたくもない。何でこんな限られた時間の中で、日本人に会いに行かなきゃならないのよ。ABで話をしてくれたセリムさんはとても紳士な方だった。言葉の話し方や順序のえらびかた、その他の雰囲気全般的にとっても賢そうな印象を受け、正直曲者だなあと思った。

事務所であうだやりながら、時間は過ぎてゆく。やはり疲れもたまっていただろう、それが心地よかった。〃わくわく〃のために撮ったストリートチルドレンたちの写真を見せてもらった。ABの子どもらが撮ったやつだが、すごい良かった。ネパールは負けているかもなあ。やはりABの方が子どもたちとの関係づくりが良く出来ている、という印象を受けた。ただ気になったのは、みんな同じシーンを取っているということ。目線やそれぞれの構図があるけれども、基本的にトコロは同じだろう。もしかしてスタッフが付いて回ったかな。と思って中森さんに聞いてみたら、やはりそうだという。No.8の子は、優れた写真家だと思った。

翌日のスタッフ合宿に向けて、PAPERからスタッフが二人来ていた。ダツカ事務所に泊まるようで、部屋の前の共有テールで緊急支援の計画だか何だかを確認しているところだった。ちょっと問いかけてみた。これまでのサイクロンのこと、洪水のこと、それに対応するバングラデシユの文化や歴史のこと。そこから議論が始まって、ターゲットアプローチからコミュニケーションアプローチへの変換期を迎えている（と言われている）現在の活動コンセプトまで、いろいろ話をした。つたない英語だけれども、僕の知っている知識や活動経験などを踏まえてみた。どう伝わったかは分からないが、基本的にターゲットアプローチからの発想を抜けていないんだろうと思う。コンセプトチュアルな議論が必要なんだろうな、と改めてそういう印象を受けた。

晴れか曇りか判断しにくい

シャプラーニールダツカ事務所

Nothing

一月十一日 Mangalhaar

いつも聞こえるのはイスラームの音楽かな。放送だろうけど、あれで目が覚める。本を読み始めたらいつの間にか七時を回った。いかん、今日からABだ。

八時近くなつて、トゥトゥールさんが朝ごはんに呼びに来た。素っ裸だったのでドアを開けさせなかった。一時間あれば着くはずだ、そんなことを中森さんから聞いていたので、九時集合のためにさっごはんを食べてしまつて、八時に準備を済ませていた。下へ降りて行ったら「八時半ごろ出よう」とトゥトゥールさんが言う。今日は初日で、しかもABの遠足の日だ。三十分でつけるのか疑問だったから、大丈夫なですか、



と聞くと、大丈夫だと言うので、従うことにした。メールチェックなんかしてみたが、二十分にはOKだった。ずっと下で待っていた。

なかなかつかまらないTAXIにうんざりして、ベイビータクシーに乗り込んだ。このときすでに八時四十分。案の定渋滞につかまり、全然前に進まない。こればかりはしょうがないので、地図を広げてどの辺を走っているのか確認していた。ダツカはさみしいなあ。絵心の沸く風景がまるでない。

やっぱり四十分ほど遅れて到着。これはどうなんでしょう。責任は僕にはなく、やはりDZにあるんだと思う。もちろん気を煩わせたことに対する申し訳なさを、僕個人として勝手に感じはするが。

迎えてくれたのはアロムさんだった。DZはとても良いところにある。うきうきする。木材加工の掘っ立て工場が立ち並び、バナナの酸味を帯びた匂いの立ち込める市場の先にある。ベイビータクシーで乗り付けた大通りから300mくらいのところだろうか。

中へ入るとどうわさつと子どもがいる。びびる。列になって本当にきれいに並んでいて、DZのスタッフにいろいろ説明を受けている。僕たちはスタッフ用の職員室のようなどころで少し時間をつぶしてバスへ移動。バスの外には、他の子どもを見送りに来た別の子どもが何人かいた。見送り方が面白かった。なんかの荷台かなんかに乗って、バスの窓の高さまで持ち上げて、いろいろ話している。どっかのおじさんに怒られるのだが、彼がいなくなるとまた乗っていしまう。意味の分からないポーズをとっている。バスの子どもらは大体きれいな格好をしていて、気質もネパールの人たちと大分違うのだからと感じた。

遠足のスケジュールは、どこか遠くの公園までバスで移動して、その後公園を見回り、お昼ごはん。そして出し物をして一気にバスに乗り込んで帰る、というの。まあ、あんの位の子どもらを喜ばせるには大分慣れている。子どもたちも露骨に僕に関心を持ってくれるし、言葉を扱えないなりのことが出来たような気がする。

実際のスケジュールはこんな感じだったが、この日はあいにく雨の日だったので、いくつかのプログラムを行わなかったと聞いた。でも雨の日は雨の日で面白いもんだ。僕はこの日個人的にゆるっとした土の上で滑って遊んだし、それは大変面白かった。というより、環境というものは大体オモシロイもんならと思う。晴れの日の遠足という形骸化されたイメージを越えて、雨の日のプログラムも用意しとけば良いのに。

曇り、雨

シャブラニールダツカ事務所

TAXI 80TK TAXI 120TK



【写真】いつの間にかこのような舞台が出来上がっていた。僕がどれだけ辛かったか、君たちは知るまい。

「ごめんなさい」と言ってくれた。良かった。僕の認識ミスではないのだった。

ABのストリートスクールへ。ピクニックにいた元気な女の子、変な踊りを強要してきた彼女はやっぱりAB側の人間だった。結構いる小さい子なんかの面倒を見ている。ピクニックのときにもしきりに彼女に呼び出されたのだが、ダンスがすごい人気があって、ここでも彼女の見よう見真似で踊らされた。いろんな子が入ってきていたように思う。騒いでいるうちに別の女の子と二人で前に立たされて、子どもたちは並ばされて、いつの間にかステージのような配列になっていた。二人で踊ったり、意味の分からない芝居をやらされた。この無邪気な殺し屋どもめ、僕がどんなに辛い思いしていたか知るまい。

リキシヤに乗ってDICへ。本当、みんなすぐにリキシヤに乗る。勝手に乗せられて、お金だけ払え、と言われるのもなあ。歩きたい。そもそも歩きたい。

DICで、僕が「フィールドを見たい」というと、すぐOKが出た。僕はこの地域の雰囲気を見たい、というつもりだったのだが、子どもらが鉄くずを集めるどころ、換金するところを見たい、という風に受け取られた。これまでABを視察に来た人間は馬鹿なのではないか。まあそれでも僕次第で目的は達成されるかなあ、と聞き直して待っていると、四、五人の子どもらがすぐに集まった。なんともサービスピ精神旺盛な子どもたちよ。

外へ出て歩き回る。久しぶりの「歩き」が楽しい。まちの雰囲気としては、やはり絵心はまったく沸かない。それは残念かな。この空間の質から感じると、やっぱり大人っぽい気質ではないのだろう。生活を規定するような意味合いが感じられない。本当、東京みたい。東京はもはやルールでしか治まらなくなっているような気がする。ここにはルールもないでしょう。逆にそこら辺の良さが見受けられたように思う。絵心は沸かないが、人間の面白さがあるので写真をパシャパシャ撮った。子どもたちが鉄くずを見逃さない、というのはうそですな。僕はいつも後ろの方にいたが、二つばかり拾った。それを見ていたそこらのお兄ちゃんが大笑いした。

いつもの音楽で目を覚ます。

また八時には準備を完了させて下に待っていた。この日はセリムさんが来て、SとDICを見せて回ってくれることになっていた。その約束の時間が八時。でもなかなか来ない。朝ごはんはオポロジェヨで、と聞いていたのだが、トウトウルさんが八時を回ってから、朝ごはんが出来た、と言ってきた。何がなんだか分からないが、言われるままにごはんを取った。結局九時半を回った頃にセリムさんはやってきた。会うなり「遅れて

【写真】くず拾いに出た子どもたちと歩いているときに、リキシャの台を車にはめ込もうとしている。【写真右下】子どもたちがまちへ繰り出した。



換金を済ませた子どもたち。一人がそのお金で露店の軽食お菓子を買ってくれた。優しい子達だ。

DICに戻ってお昼ごはん。なかなかのもんだった。ダルスープはシャブラ事務所の方が圧倒的にうまいが。一緒に歩き回った子を中心に結構気に入られて、少しばかり遊んで、その後8の午後の授業へ。準備段階から手伝わせてもらった。8が始まるまで、少し今度はサエダバッドの地域を歩かせてもらった。といってもバスターミナル内だけだ。

あの元気な女の子が子どもらとコミュニケーションを取っている。こうやって、8が始まるのを知らせ、子どもたちを集める。こういうのが職業になるなら、きっと負けないなあなんて思ってみた。でも少なくともSSやDICの子どもとABとの関係はすごくいいなあと思った。

付近を歩きながら地域活動について聞いてみた。アクション・コミュニティなんかの話がメインで、何人かのそういうメンバーにも会うことが出来た。こういった大人たちとの関係づくりもなかなかのもんだなあと思う。でもこれは一緒に回ってくれた彼特有の個性によるかもしれない。話を聞くうちに、そしてこれまで東京で思ってきたことをあわせてみて、やはり地域活動における構想部分が弱いんだろなあという気がした。僕なりの意見をレポートできそうだ。そして、シャブラもここに役割を果たす意味合いは大いだと思う。レポートに関しても、シャブラの許容量が試されるころだと思う。

そのまま四時まで遊ぶ。「MAXに乗りながららウトウルさんが、「白幡さんが僕と食事するために戻ってくる」というのでびびった。僕と食事するためだけに、一人だけ先に帰ってくるというのだ。だがそれは勘違いだったらしい。そして多分、僕に彼が伝えてくれた言葉も、そのときの勘違いとまた違った内容なのだろう。白幡さん



【写真上】 道端の鉄パイプの中も覗き込む。

【写真中】 二人ペアで。相方に鉄くずを渡す。

【写真下】 露店でのお菓子をあげてくれた。



【写真】 午後のストリートスクール。子どもたちも準備を手伝う。

が帰ってこないことが伝わればそれでいいのだ。

ダツカ事務所へ戻ってきて、メールや秋庭さんから頼まれた仕事をやっているうちに十時を回った。少し本を読んで寝た。

晴れ

シャプラーニールダツカ事務所

TAXI 67TK` フィールド 109TK` リキンヤ 10TK` TAXI 70TK`

一月十三日 Bihibar

はじめて目覚ましで目が覚めた。

例によって八時ごろ下へ行って待っていたのだが、トゥトゥールさんが「十時ごろに出発しよう」という。メールなどをやっていたら、九時半ごろ、出発しようと言われる。約束って、意味ないのだろうか。コンピュータをシャットダウンするだけで、他の準備はとくに出来ていたし、早く行きたかったから良いのだが。

そういえば、トイレなど、バングラデシユでは内側と外側にそれぞれ鍵が付いている。これが面白いなあと思った。これはこれで、トイレ使っているよというサインにもなっている。僕ならきつと、外から鍵をかけていたずらしちゃうなあ。

なかなかつかまらない「TAXI、ベビータクシー」。もうちょっと歩いて大通りまで出ればいいと思うのだが。そうはしない。DICに向う途中、物乞いさんがやってきた。お母さんらしき人を抱えている少年。前方では別の、目の見えない男の子を抱えるお母さんが別の車にせがんでいる。これと、「お金くれ」というのが、うまく結びつかないんだよなあと思いつながら、試しに冷静な目で見つめてみることにした。途中から目をそらし始め、結局彼はあきらめた。やつぱりそうなんだなあ。

DICへ。事務所業務をしばらく眺めた後、子どもらと遊び始めた。この日はDIC内でははだしで過ごしてみた。前日のくず拾いから僕を気づかせてくれた男の子が何人かいる。そのうちべたべたくっついてくる坊主のやつがいて、彼と二人で遊ぶ時間があった。ちよつとダンスっぽくなって、彼がやるように飛び上がった。辞せずしてズボンの股下が裂けた。さすが、これひとつでKTM後半から過している。一緒にいた彼は笑い転げた。いつかははいてみたいと思っていたルンギ、思わぬハプニングでよくことになってしまったが、大変快適だった。その間に別の女の子がズボンをぬつてくれた。子どもたちと呼ばれ、僕も望んでいたDICの雰囲気は「もちOK」という感じだったので、一緒に地べたでお昼ととった。子どもたちと食事を取るのにはダメだとセリムさんに言われていたのだが。

午後も遊んだ。子どもらはゲームで勝たせてくれるなど、露骨に特別なやさしさを見

せてくれる。トイレに立とうとすると、「ブローノ」と行って、どっかへ行ってしまうのかと勘違いする。安心したのを確かめて戻ってくると、新しい子が僕のところへ座っていて、みんな熱中していて僕なんかには気づかないほどだった。その後は女の子にかまってまたダンスを。気楽に臨んだので時には彼ら彼女らを圧倒して見せた。芝居をまた見た。ああいうダイレクटनाメッセージのストーリーは、一体どうなんだろう。そういうのがウケるのかな。演じていた男の子はとても面白かった。



【写真】サエダバッドのバスターミナルのストリートスクール周辺。とところどころに人が集まっている。

三時ごろ、見計らってSSへ。またリキシャ。歩きたい。ティトウさんはこの日もフィールドを一緒に見て回ってくれた。いろいろ説明してくれた。僕の意見を求めてもくれた。僕は「SSは地域に対してどのような役割を担っていると思う？」と逆に聞いてみた。やはりきちんとした答えはもらえなかったのだが、きちんと構想が立てられていないと言ふことは、彼も認識していることらしかった。バスターミナル付近のスラムにも入ることができた。自分を「井口（元ダイエー）」と自己紹介する、SS働きの者のお母さんとお父さん。コミティメンバーの

に來る男のこの家なのだと言う。
だそうだ。

この部屋はすごい蒸す。この国で、この立地は大変なことだ。ここの付近だけで八百世帯ぐらいあるだろうとのこと。一緒に地域を歩いて回ると、やはりSSをもうちよつとほしいなあという気になる。DCもほしい。地域活動という面からすれば、サエダバッド、ジャットラバリにそれぞれSSとDCがセットであるのが良いだろう。それぞれのセットで、それぞれの地域活動が行えるのが好ましいと思う。逆にどっちもABを名乗るとムズカシイと思う。

ティトウさんについて、「この人いいなあ」という印象を強く受けた。頭もいいし、人との接し方が抜群だ。こういう人がいるのなら、地域活動にも何か期待が持てる。地域活動ってながーい時間が必要だ。そして成果が見えにくいことも事実だ。何をやったかよりも、誰がやったかとか、何でやったのかとかも重要な要素になる。後で白幡さんに聞いてみると、彼はSSとのパートナーが始まる前のSSで、ピカイチの先生だったのだそうだ。やっぱり。

全体として、ABは大変優秀な、そしてバランスの取れた組織体だなあという印象を持った。

晴れ

シャプラーニールダツカ事務所

TAXI 62TK TAXI 75TK

一月十四日 Sukrabaar



【写真】バングラ帰りのトリブバン国際空港。ビザ関連でこずけて、待っているうちにもう周りには人がいなくなっていました。

前の日は、白幡さんに連れられて夜のお食事会に参加させてもらった。その後もメールやネットでもそもそ遅くに床に就いたのだが、部屋の本棚にある漫画を読み始め、結局四時過ぎまで耽ってしまった。朝も六時に起きてまたすぐ読み始める。中森さんとの清算を済ます前に、ギリギリ読み終えた。

空港は嫌いだ。またてこずった。KTMについてみれば、またビザ関係でもめてしまつて、ああ、疲れた。思い出したくもない。

もめたことで小松さんに来てもらつていて、一緒に事務所へ。メールをチェックして帰った。もう、すぐ寝た。

Dhaka は晴れ、Kathmandu は曇りっぽい

Honestay

TAXI 130TK TAXI ? (おしりを全部中森さんに渡してくれと言つて、トウトウー
ルさんに全額預けた) TAXI 200RS TAXI 100RS (小松ちゃん) TAXI 40RS
写真 200RS.

一月十五日 Sanibaar

のどが痛い。首も痛い。首の痛さはきつとリンパだか扁桃腺だかが腫れているんだろ
う。ちよつと外見にも膨らんでいる気がする。ダツカで風邪を引いたのだ。

久しぶりに子どもらに会いに、朝早く出る。朝霧がすごかつた。寒くなつてきていて、
こうなつて来つつあるんだろ。Jawalakheiの朝霧を抜けて、ごみ集積所へ。この朝
霧をきちんと撮つておかなければならないなあ。

ごみ集積所には、二つの入れ物が無くなつたときにいた、バブルーとラザ兄弟(多分
兄弟。顔そっくり)の二人だけだつた。クリシュナたちはいなかった。彼らは外回りの
ごみ集めもしていて、ここで見かけないこともよくあつた。結局どういうリズムでそう
しているのかは分からなかつたのだが、順番こでもないようだし、曜日もあり関係な
いようだ。彼らは笑顔で迎えてくれた。

この二人だけだったので、正直「あちゃー」と思ったのだが、決めていたのでパブルーに問うてみた。すると、やっぱりあの荷物はごみ分別所にあつたのだと言う。よかつたあ。いろんなことが、良かつたなあと思つた。その後はいつも通り焚き火にあつた。

しばらくするとクリシユナがやつてきた。イメーシしていたよりも小さいやつだつた。「あれこんなに小さいやつだつたっけ?」、少し意外だつた。ラジツトもそのちよつと前から来ていて、ズボンに絵を描いている。その絵のセンスのないところが愛らしい。

この日はごみが少なかつた。回収車も早くに来た。ラザの左足小指の膿が心配だが、あいつ、すぐ触っちゃうんだから。まあ、きつと何とかなるのだろう。その後クリシユナ、パブルー、ラザがかわりばんこで他のところのごみを回収しに行つた。この日もお茶屋さんは来ない。土曜日は来ないのかしら。途中の道でとることにして、結局出発したのは九時二十〜三十分ごろまでその集積所でうだうだやつていた。そう、こんのくらの時間が必要なのだ。このイベントのキーマンは僕に違いないのだから、僕がゆつたりと待っていられる土曜日というのは、結局のところ全体的に無理のないいいタイムイングなのだ。

お茶屋に行く前、ゲーセンに入った。彼らは結構お金あるんだなあ。というか、それほどお金的には「困っている」わけではないだろう。なければこの遊戯をあきらめる、その程度のもんだろう。僕だって、あのお金をとつておけば、という経験はいくらもある。彼らには、もしかしたらそのような「とつておけば何か」の「何か」がさほど大きな欲求ではないかもしれない。自分のスケールというものをきちんと知っているんだと思う。それはとても大切なことで、僕なんかは見習わなくてはならない。

画面のサッカーゲームではラジツトとクリシユナが闘っていたが、知らず知らずのうちにはクリシユナを応援していた。どちらかをひいきするわけではないつもりだつたのだが、こういうのからはなかなか逃れられないもんだ。ゲーセンからごみ分別所に行く間にあるお茶屋に行く途中、クマルにも会つたが、彼は忙しいらしく一緒にお茶をすることが出来なかつた。残念だ。ラザはテンションが高くて変な歌を歌つてばかりいた。クリシユナは(ネパール語で)「ちんこまんちんこまんこ」うるさかつた(前に体の名前を彼らに教えてもらっている)。分別所の前でコンドームの説明書を拾うといよいよハイになった。僕はそれがおかしくつて大笑いしていた。

この日はクマルがいなくて、クマルの家まではクリシユナが生ごみを持つていった。クマルがいなければいけないでこうやつて持つていく役割分担があるんだあ、などと感じていると、途中で生ごみの袋の口がひとつはじけた。拾い集め、せいの、でまた自転車へくくりつけ、出発。クリシユナが自転車を押すには、このでこ坂道はまだきつらしい。所要所で少し後ろから押してやつたりした。

クマルの家につくと、前来たときにはいなかった仔豚たちが生まれていて、ひとつの囲いの中は大騒ぎだつた。お母さんなんかは僕を覚えてくれていて、「中へ入りな

よ」といつてくれたのだが、この辺り、クマルたちの家も入れた絵を描きたかったのが断った。囲まれながら絵を描いていると、クマルのお父さんに「話がしたいから、Jwatakeiから戻ってくるまでいてくれ」と言われた。なんだろう、とびびる。

描きながら、クリシユナに名前を聞かれた。前にも言ったのかもしれないが、彼らにとっては日本人の名前は大変覚えにくい。名前を伝えると、どうやらやはり、僕の名前は女の子っぽい音の響きのようだ。それがさらに覚えにくさに拍車をかける。バンガラでも「ユーコ」とよく呼ばれた。それが「バイ」。こちらでチフスの予防接種を受けるときにも、受付で「ユーコ」と呼ばれた。予防接種記録として、有効になるのだろうか。描いている途中も、クリシユナは結構いろいろモノを言った。こいつは結構明るい。そしてかなり頭のいいやつだと思う。間もいい。描き終わった後、家の周りをぶらぶら。今から食べる鶏を捕まえるのを手伝ったり、それを「つぶす」のをずっと見させてもらった。その部屋でちょこんと座っていると、お土産に、と手作りのお手玉のようなものをおばちゃんに渡してくれた。

どうやらこの日は、親類者が週に一回集まる日なのだそう。いろんな話をするらしい。「待っていてくれ」というのはそれにお呼ばれしたと言うわけだ。そこに居合わせて、さっきつぶした「鶏の炒め物と、ウイスキーをたしなんだ。一時から仕事だと言うのに。クマルのお父さんは、僕がクマルやクリシユナのようなさほど小さくもない子どもにアプローチをしているのを不思議に思ったらしく、それについて聞いてみたかったようだ。僕が何者なのか、少しの情報をごこからか得て、彼なりに解釈を持っている。一般的に、国際NGOは評判が悪い。そんなことは僕も知っている。だけれども、そのうちの僕の居方や片言のネパール語の説明を聞いてくれるうちに、僕にはネパールに友達がいるわけではなくて、単純に面白からやってきているのだということが伝わったようだ。そう、僕にとつて彼らは「新しい人」だから、よく観察する。だけど何も聞かない。一緒に焚き火したり、「ちんこまんこ」一緒に言っているだけだ。しゃべってやることには耳を傾けるが、基本的には何も聞かない。それでもお父さんは、せっかくこういう日なのに、僕のネパール語には物足りないらしく、ネパール人の友達を来週連れてきてくれ、と言った。僕は事務所での話をするが、彼らが来るかどうかは分からない、とだけ伝えた。

ステイ先に向けて出発。ウイスキーというものは結構「きく」ものだ。よい天気の中で段々畑の間の道を歩いていると、ちょっと酔っているなあと感じずにはいられない。一杯だけだが、1800ccほどのグラスにいっぱいづがれている。もちろんストレート。それをあの短時間に飲み干したのだから。

午後の仕事というのは、ヒマラヤホテルで小松さんのスリランカ報告に出席するというもの。小松さんの報告の後、定松さんが少しSSOの活動報告をして、大使館、JICA、その他会場の人のコメント、みたいなものが続いた。やはり定松さんの喋りが

印象的だった。どんなものにしたって、「伝える」とき、普遍的なフォーマットがあるんだと思う。それを魅力的に伝えられるかどうかは別問題で、その人次第だ。もしそのフォーマットに則らないのであれば、報告する意味を失いかねない。もしそれを「あえて」はずすのならば、明確な意志とそれに堪えうる技術力が求められる。意志と技術、二つ合わせてセットで「センス」と呼びたい。前者であればフォーマットには両方が含まれている。

定松さんとも、その後お話が出来て楽しかった。報告会終了後はすぐ帰った。

ダツカの状態を見ていたからだろう、僕はKathmanduで、まだ路上で寝る子どもを見たことがない、それが結構気がかりだった。子どもの状況はこんななのだ、とプロポーザルに載っていることを、さも自分が知っているかのように人に説明するが、それを見たことがないなんて、そのことをお茶飲みながら藤倉夫妻に伝えると（達朗さんは滞在を延長して、まだここにいた）、「ええー？」とか言われた。やっぱりいるのだぞうだ。でもどこで見た？ と聞いても応えてくれなかった。「見えないところにいるんですよ」という。だって「ええー？」って言ったじゃん。結局彼らの属する分野の「常識」に則った発言に過ぎなかったということだろう。まあ、僕も遅いと言っても九時ぐらいまでしか外にいたことがない。今度、JAEONに夜一緒に歩いてもらう。願わくば、夜事務所へ泊めてもらう。

晴れ

Homestay

お茶 20RS、バスケット 10RS、ドーナツ 10RS

一月十六日 Aaitabaar

日曜日なので午前中はのんびりした。この日は前に行ったスラムにもう一度行ってお茶をご馳走してくれた彼に会いに行くつもりだった。その前に午前中に「Hamel」で換金を済ませておきたくて、出発した。しようとした。すると、この家は外と中との入り口のほかに、家族用の柵とかシャッターというかがあって、それには別に南京錠がかかっている。僕はこの鍵を持っていないので、誰かがいるうちにしか外に出られない。いつもは僕が出かける頃には開いているのだが、この日、お母さんたちはこの時間には出かけてしまっていて、この鍵が珍しく閉まっていた。入れないで待っているのは結構我慢できるのだが、出られないというのはちよっと我慢ならなくて、四階まで駆け上がって、恥ずかしながらも藤倉さんをお願いして開けてもらった。

T/Cからの換金にはパスポートが必要である。だけれども、そんなこと知らなくて部屋に置いてきてしまっていた。Hamelの換金所では僕のおきりめも早く、すぐに立ち

去ろうとしたのだが、彼らもこのお客さんを逃したくないのだろう、呼び止められ、パスポートなしで換金してもらった。「ネパール語話せるから」と言ってくれた。あの空港やビザのごたごたのおかげでパスポート番号も覚えていた。役に立った立った立った。その後ネットカフェに行きThamelを少し歩く。Kathmandu Cityの西側のスラムあたりに出て、TAXIを拾ってステイ先へ戻った。

久しぶりにPatunを歩く。Mangal Bazaarから広場に向う。「わくわく」に参加してくれた女の子の仕事場で、彼女はいるかしらときよるきよるしていたが、彼女は見当たらなかった。道途中のJAFONの事務所へ、夜のお世話をしてくれないか、と頼みに行った。でもレワットさんもラズーもいなくって、なかなか話が伝わりにくかった。また連絡することにして、先へ歩いていくことにした。

橋の手前で一休み。後ろでやっていた瓦の葺き替えの風景を描いた後、橋へ差し掛かると人だかりが出来ていた。何かと思つて橋の下へ目をやると、人が横たわっている。お葬式のようなものようだ。隣の人に「あの方は死人ですか?」と聞くと、「死んだ人」だか「殺された人」だかと言った。前者であることを願いながら、じつとその模様眺めていた。

一人ひとりがまずポットのような容器から水を手に受け、死体に手からふりかける。右回りに死体のまわりを一周し、お供えやお祭りのときに使うような赤い花びらのどつさりとかけ、死体の服を脱がす。これは男の仕事のようだ。周りから見えないように布と人の壁とでスクリーンをつくり、その後死体に布を巻く。白い布を巻いたあとにオレンジの布で再度覆い、最後は金きらきんの布を巻き、竹製のタンカへのつけた。奥の方に組まれている死体を焼く場所へ運んで行つて、数人の男たちは白っぽい布をまとい始めた。きつとなんかの役を担っている人たちなのだろう。

死体をのせたタンカは木組みの周りを二回まわつて、その上に死体がのせられた。白装束の男たちもやはり何かをやりながら死体の周りを右に回つて、全員が回り終わったところで死体から布が取られ、代わりにわらがのせられた。

次々に濡らしたわらが運ばれてきて、すごい煙が舞い上がる。だんだん火が大きくなっていく。わらが運ばれるたびに煙がもくもくもくと立ち上がる。西に沈みかけた太陽に背を押された影が、死体の足元までをすっぽり覆うように落ちていた。結局二時間くらい見入ってしまった。だんだん火が見えるほどに大きくなっていき、するめが焼けたような臭いがして、「ああ、人に火がまわりはじめたのだなあ」と思った。

さすがに寒くて、腰も痛かったから、移動することにした。バンングラで撮つた写真をThapahallまで受け取りに行く予定だったが、目と鼻の先のJAFONの事務所へもう一度寄ってみることにした。今度は五人そろつていた。レワットさんに事情を話すと、「Very nice!」と言ってくれ、僕のお願いを快く受け入れてくれた。もちろん小松さんのOKをもらつての上でだが、彼は何というだろうか。

歩きたかったが腰が痛くてしょうがなかったので、珍しくTAXIに乗ってThapathaliまで。でもそのために現像にかかった金額に50Rs.ほど足らなくなっていました。次の日に取りに来ることを伝えると、「明日はバンダ」という。はじめてバンダが見に迫った。もう一度戻って写真を受け取って、すぐまたステイ先に戻ったのだが、またシャッターの前で足止めを喰らった。これは別にしようがないことなので、気にならない。ニワにしゃがんで写真の整理を始めた。しばらくするとお母さんが帰ってきて、僕がしゃがんでいる様子を見てしきりに謝った。僕は、不当でなければ待つことはそんなに苦にならない。何でもないことですよ。写真はたくさんあって整理するのが大変だった。まあまあな写真もいくつかはあった。

のどが痛い。リンパだか扁桃腺だかが腫れているだろう。少しもつくり首の上っ面が膨らんでいる。ここまでの症状が出るのは、アレ、久しぶりだ。バンダラから持ち帰ったものだ。症状はこれだけだが、一応早く寝よう。

晴れ

Homeslay

Tempo 5Rs. TAXI 45Rs. ネット 20Rs. TAXI 70Rs. 髭剃り 20 28Rs. 石

鹼 34Rs. 洗剤 42Rs. リップクリーム 63Rs. TAXI 65Rs. Tempo 5Rs.

Tempo 5Rs. アルバム 225Rs. 三本 3Rs. Tempo 5Rs.

一月十七日 Sombhar

JAFONの事務所へ朝早く行くことになっていたので、朝ではんはなし。お茶だけいだけた。

Paranを歩くのは楽しい。朝歩くのは懐かしささえ感じる。それほどバンダラでは歩いていない。そして、その前から子どもたちに会うようになって、歩くのがしばらく出ていかなかった。以前にスケッチを取った水汲み場に出て、また中庭を通って、牛かなんかの解体所をぬけてJAFONの事務所へ着いた。ステイ先を出た頃にはぼつぼつ顔に当たる程度の雨だったのが、その頃には結構しつかり降り始めていた。

ブッディも子どもたちも起きていなかった。屋根の下でじっと待ちながら、雨のこととか考えていた。目の前のごみが積み上げられた風景を見つめ、その先から火の煙が立つのをまた楽しんだ。この雨の中、クリシュナたちやディペシュたちは仕事しているのだろうか。四十分ぐらいぼうっとしていたが、さすがに少し歩きたくなった。八時ごろだったと思うが、歩き出して、寺院から橋のところ辺りまでをぐるっと回ってきてみる。ごみを拾う少年がいた。雨の中だ。当たり前のことだが、雨なんて関係なく人はごみを捨てるのだ。戻ってきてみると、まだ誰も起きていなかった。

待っていても埒が明かないようなので、散歩を続けることにした。橋を渡って、前は良く通っていたスラムの前を通っていく。久しぶりにこうやって歩くのは楽しい。前に何度か覗き込んでくれた女の子がいた。このときは制服姿だった。

お腹が減ったので、途中のお茶屋でドーナツとお茶をいただいた。あげパンのようなやつでなくて、ほのかに甘い普通のドーナツっぽいやつ。このドーナツが結構おいしかった。なかなかいい朝ごはんだなあとと思う。その後時間を見計らって事務所に着いたが、やはり誰もいなかった。この日はバンダ。歩いてくるしかないから遅めに来るだろう。ゴパールさんはきつと来られないだろう。

朝のミーティングで、JAFONにお願したこと、僕が子どもらに毎朝会って、しかも付いて行って親に会ったことなどが問題になった。後者に関してはもちろんこれまでも伝えていたし、スリジャナさんはどちらでもいいんじゃないか、という意見だった。小松さんは露骨に賛成しかねていた。結局結論は出ずに、後でもうちよつと詳しく話を聞く”ということになったのだが、この日はどうとうそんな話はしなかった。

イミグレへ。もうすっかり雨はやんで、少し歩けば汗ばんでしまうほどに暑い日だった。バンダの日は快適である。道はゆうゆうで空気が車の排気ガスが無い分大分良くなる。路上では自転車を乗り回したりバドミントンをしたり、ボール遊びをする人たちが。ラトナパークにはこの日も日向ぼつこをする人の群れ。平和そのものだった。

しかしながらうかつだった。USDしか持っていなかった。ステイ先の家賃として別個においておいたお金を取り忘れたのだ。どこかで換金をしなければならぬが、航空チケットのおつりもきつと刃で来るだろう。そんなに刃は要らないのだ。使いきれん。USDが、外貨がほしい。それでもこの日までしか三日間のフリービザは有効ではないから、そんなことは言っていられない。でもバンダで銀行は閉まっている。どうしたらよいのだろうか。イミグレでいろいろ交渉した結果、まず航空チケット代の支払いを済ませ、そのおつりで支払う、ちこつと離れているから十五時まで間に合わないかもしない、それでも受け付けてくれる、ということになった。必要書類の記入を済ませて一度はパスポートを置いていくそぶりをまで見せて、納得してもらった。

旅行会社も閉まっていた。いよいよどうしたものか。ここまで歩いてくる途中で見た、別の銀行へ行ってみることにしようか。これも閉まっている。門の前に立っている警備員にだめもとで「今日は開業していない？」と聞くと、「いや、こっちから入れる、やっている」という。！ そうなっているのか。後で聞いたことによると、旅行会社も裏から入れたのだという。イミグレに行く前にわざわざ行った銀行も、同様に裏の方から入れたようだ。大変なロスをしてしまった。

事務所へ戻る途中、講義行列を見た。Paramの方からドンドン音を立てながらやってきた。コールをして歩く集団。旗とか持っている。後ろの方には子どもなんかもいて、ゴミ箱を蹴つ飛ばしたりしている。なんだこりゃあ。これが三、四月に起こったような

過激なもので無いのは間違いないが、外国人の僕が危険になる気はまるでしなかった。彼らは興奮しているのであって、Kathmandu が治安が悪い、ということとは本質的には違ふと思ふ。

朝は雨、昼前から晴れ

Homestay

お茶 ドーナツ二つ 14Rs、イミツレ 2175Rs、一本 1Rs.

一月十八日 Mangalhar

この日は事務所へ行く前に、イミグレと旅行会社へ行って、ビザの受け取りとチケット代の支払いを済ませることになっていた。コンピュータも持って帰ってきていたので、大きな荷物ももう一度戻って取りに来ることにして、焚き火をしにステイ先をあとにした。

ちょうど雨が降り始めていた。Jawalakhel につく頃には、結構な雨になっていて、前の日より大げさだ。ちゃんと仕事しているかなあと見に行ったら、いた。みんないた。あのもう一人の居候とサンデーがいれば、僕の知っている子全員揃っていることになる。ディリブはまた飛びついてきた。

火にあたる。土曜日に来ていなかった連中はお茶をおごってくれよ、とせがむ。逆になんで来なかったかを聞いてみたら、何日前？「みたいな相談を互いに行っている。やっぱり土曜日とか何曜日だとかいうことは、彼らの生活の中で関係が無いのかもしれない。木曜日辺りには、「明後日だよ」と言っておくのが良いだろう。

雨の日の仕事は寒いだろう。ディベシユはその中でも薄着で、ぶるぶるいつている。それでも僕がずぶぬれなのを氣遣ってくれる。焚き火なんかもなかなか火が盛り上がりがない。

ふとすると、ディリブとパブルーが喧嘩を始めた。最初は口論ばいモノに過ぎなかったが、ディリブがかなり興奮して、真っ赤な顔をしている。勇敢にも彼は殴りかかった。身長差は30〜40cm ぐらいいはあるだろう。僕より小さい背のやつらの身長差だから、かなりのものだ。パブルーはちょっと相手をしてやるか、って感じで足を取ろうとしている。ディリブはそれでも蹴りや拳を振り回し、攻撃を続ける。ちょうど回収車も来ていたところで、そのおにいちやんが「おいおい」と言っている。すると二人が倒れこんだ。雨の日のゴミ捨て場で倒れこみながら喧嘩をする男たち。なんかヤクザ映画みたいだ。なんて思っていたら、その期を見計らってディリブが体勢を上に取り、いつでも殺せる、という感じになった。完全にディリブの勝ちで喧嘩は終わった。

こういう喧嘩というのは、大体二回目の方が酷い結果になるものだ。なりふり構わな

くなり、不意打ちや卑怯な手を使い始めることもある。それはいろんな意味で、悪いことだらけの連鎖反応が起こり、周りにいる人も含めて後味が悪くなるもんだ。喧嘩が終わって二人が焚き火の回りに戻ってきたところで、やはり何やら嫌な空気が流れた。当然だ。バブルーにしてみれば偶然的なこともあったとは言え、ちびっ子にやられたのだ。そしてディリブはそもそも屈辱的なことを言われたのだろう、切れている。二人が再度いがみ合いをし始めたところで終わらせた。さすがだなあとと思ったのは、ラザとディベシュが何も手出し口出ししなかったことだ。どちらも兄弟の味方をしなかった。そういうA兄弟とB兄弟みたいな構図になってしまうのが、最も醜いことを良く知っているんだらう。

いい時間になるまでその後もうだうだやっていた。雨の日は荷物も重くなるだらう。そしてこの珍しい雨は体を本当に冷やす。ステイ先の荷物を取りに行つて、イミグレ、旅行会社と行つて事務所へ。やっとバングラの怨念から解き放たれたような気がした。グムナを書きながら、バングラの報告について考えていた。

お昼を取つてしばらくして、十三時半ごろからバングラ研修の報告を始めた。ミーティングルームの寒い部屋で三時ごろまで。大きくPARTとABという二構成で話をして、それぞれに質疑応答をくださった。小松さんは大分納得がいていないようだった。そりゃあそうだ。そもそもシヨミティは自立しないのではないか、とか、現在の活動はコミュニティ・アプローチの構想に基づいたものはほとんど無いと思う、とか。反対に別団体であるABは優秀な、バランスの取れた団体だと思つてか、Child's Rights については地域住民にとつてあまり意味の無いものだという前提で地域活動をすべきだ、とか。インターン君がいきなりそんなこと言うんだから。

その後グムナを書き続け、十七時半まで。この日はステイ先ではちょっとした食事会が行われ、結構ロキシーを飲んだ。

雨

Honestay

マイクロバス 7Rs、TAXI 30Rs、TAXI 70Rs.

一月十九日 Budhabaar

いつものごみ集積所へ。ラザしかいなかった。こいつは相変わらざるぶざけたノートンキ野郎で、歌つたりしている。そのうちバブルーがやつてくる。すごい荷物を抱えてやつてきた。ラザは上着の右ポケットからビスケットを出して食べている。それをひとつづつバブルーに渡した。もうちょっとするとラジツトが来た。この日はちよっくら歩きたかったので、少し火にあたつてすぐ歩き出した。歩き出しの際に、ラザが僕を呼び止めて、「バ

イバイ」と言ってくれた。

久しぶりにこうやって平日の朝を歩く。どこへ行こうかそわそわする。初めての道を入ったつもりでも、すぐ知った道に出してしまう。もう大体の場所をつかめているんだなあ。しばらく歩いていないから、距離感が分からなくなっていた。

ドウルパール広場やそこからLagankhelまでの道、ちよこちよこした小広場。野菜なんかを売る市場は面白かった。各店は屋台のような態をとっていて、屋根がある。一段高くなったところに店主は座っていて、それがずーっと続くので、景観としてはなかなか安定感があり、しかも生き生きとしている。この一段高くなったところで焚き火をしていたりする。大体のつくりは木製だ。天井までも1mくらいなものだろうか。ともしれば火がついてしまいうる高さだ。そういう店が何件もある。やはり散歩は楽しい。このリズムが僕にとってはとても大事なだろう。特に自分の生活地ではないところでは。裏を返せば、まだこの地は僕にとっては、対象（フィールド）だ。

結局ぐるぐる回って焚き火のところへ戻ってきた。クマルとクリシユナも加わっていた。お茶飲みたそうにしていたが、今日はダメ。時間も迫っていたので、Jawalakhelまで出てすぐTempoに乗り込んだ。

事務所では緊急対応マニュアルを読み込んだ。昨日付けで「危機的状況」宣言がなされていて、小松さんに「読んでおいて」と言われたのだ。でもこの中に、僕は位置づけられていない。読んでも結局僕はどうしたらいいのか、まず分からなかった。

お昼後には停電があつて、その間にJAFONのレフトさんが来て。そんなこんなのうち刻になつてしまった。少しゆつたりとした、なんというか、ふわふわとした一日だった。

帰り、まだ明るかったので、久しぶりに夕方の散歩に出かけることにした。ネパール語が忙しくなっていたから、Bangラ行く前からのお預けだった。ゆつくりとLagankhelの方まで行って、Jawalakhelへ回っていくと、道途中の喫茶店の前で、なにやら子どもたちが集まっていた。そのうちの一人が僕を見つけて、早速いつもどおりの右手を差し出してきた。「まあまあ」みたいな顔ぶりで通り過ぎると、その八人ばつかしの子どもの中に、ディベシユとディリプがいるのにふと気がついた。彼らはみんな、残り物だかなんだかをねだっていたのだった。僕が戻って二人に「よっ」と言うと、「ツアーール」と言つて抱きついてきた。するとこれ見よがしに他の子どもが僕におねだり群がった。ディベシユはそれを「ツアーールにねだるんじやねえよ」と追い返してくれた。

彼らはやっぱり、自分たちがやっていること、そしてそれが一般的にどういふことなのか、ちゃんと分かっているのだと思う。それで、「あえて」やっている。何でもお見通しなのだ。「じゃあね」と言つてその場を後にすると、後ろの方で「誰のツアーールよ？」みたいな話をしているのが聞こえた。

帰り道はさすがに上機嫌で、これで何も文句は言わせないぜえ、と思う反面、「じゃあみんなでお茶飲み行くか」とするんがよかつたかなと、少し心残りがあつた。

午前は雨を引きずつて曇り、その後晴れ

Homestay

Tempo 5Rs. 一本 2Rs. 一本 1Rs.

一月二十日 Bihibar

前の日は早く寝てしまった。自分でも驚くほど早く。

出発は七時半ごろになつてしまった。それでも朝もやの中をまず Jawalakehal のロータリーへ。ここではいつもタバコを売っているおじさんがいる。前の日は早く来たのでいなかったのだが、このおじさんにもちよつと関心がある。こちら辺に住む人なのか、どっかからかやつて来たのか。いつからこの仕事をやっていて、何時ぐらいまでやるのか。今度聞いてみよう、と思つていたら、僕の横でこのおじさんがつばを吐いた。ぴつとまっすぐきれいに飛ぶ。そのとき、*びゅーっ*と口笛のような音が鳴つた。そうか、そういう口の形で飛ばすんか。

ちよつと遅くなつてしまつたが、ごみ集積所へ。この日は三人。ラザとラジットは最近の顔なのですぐ分かつたが、あとの一人は誰だろう。こいつは久しぶりのアミットだつた。

彼は本当に久しぶりで、三週間くらいは見えていなかったのではないか。実は、前の日の夕方 Lagankehal から Jawalakehal まで歩いたときも、彼はいないものかときよろきよろしていた。相変わらず人懐っこい笑顔で迎えてくれた。彼は早速「お茶飲もう」と言つたが、僕が応える前にラザが「お茶は土曜日だよ」と言う。これにはさすがに「おおっ」と思つてしまつた。そう、そしてこのラザだ。こいつは馬鹿だ。クリスマスとかにかぶるような（かぶりはほしなと思うが）、金色に緑の水玉といったような三角すいの紙製の帽子、アレをかぶつていた。そしてきつとこいつは分かつてかぶつている。手ごわいやつだ。

この日はビスケットを持っていた。そこで「お茶は土曜日だけれども、今日はビスケットがある」と言つて MARE をかばんから取り出した。三人は大喜びだつた。特にラザのにやりな顔と、アミットのほころんだ顔が対照的で面白かつた。早速ラザが山分けする。がばつがばつととうまく三等分する。「他のやつらは来ないのか」と聞くと、ラザは「来ない」と言つた。「パブルーも来ないの」と聞くと、やはり「パブルーも来ない」という。じゃあ仕方がない。三人で山分けでもしようがないか、と思つて、ラザのを一枚、アミットが、いいから、いいから食べんさいな、というおばちゃんみたいな愛らしい表情でく

れる二枚をもらった。

しかしこいつ（ラザ）は相当適当なやつで、山分けして十五分くらい経ってアミットとラジツトが食べ終わる頃、バブルが回収車の荷台部分に乗っかってやってきた。程なくしてクリシユナとクマルがやってきた。そしてもうちよつとすると、デイベシユとデイリブもやってきた。ほとんど勢ぞろいだった。こいつは。

ひがむかなあと思いきや、このあと結構盛り上がった。デイリブは相変わらず飛びついてくるし、アミットはオリエンテーションのときに見つけた僕のスケッチブックに絵を描きたいとせがむ。クリシユナが踊っているのに一緒にリズムをとったり。デイベシユはちよつとさみしそうにしていたが、「あさってお茶な」というと、聞き入れてくれた。必ず来るように。クマルはみかんをくれた。これ、きつとそのごみの中から拾ったやつだ。いよいよそういう感じになってきたんだなあ。あと三週間か。残りの時間が楽しみだ。

八時四十分ぐらいになると、次々と移動を始めた。最初隊はラザとバブルとデイリブ。ラザは道路を渡った後、「ツアール！、バイバイ」と言っで行った。こいつはほんとにふざけたやつだ。クリシユナとクマルは自転車に乗っていった。別の場所へ回収に行ったんだらう。最後に残ったデイベシユとアミットに別れを告げ、反対車線側に渡った。なかなかTempo が来なそうなので Javakhal のロータリーの方へ歩き出すと、アミットが「ツアール」と呼ぶ。振り返ると「来い、来い」と手招きをしている。一緒に付いといで、ということだろう。事務所へ行かなきゃならないから行けないよ。苦笑いしながら首を横に振って、先へ歩き出した。もしモニタリングの仕事だとしても、もはや彼らは対象になるまい。

少しぼかぼかした気持ちで「Tempo に乗った。「明日は散歩をしよう」そんな気分でした。そのくらいいいんだと思ってきた。

事務所ではまずメールをチェックして、そのあと Gumna を。 Gumna はバングラからずつと書き溜めていたので、最近そのタイピングにはまってしまっている。でももうあといくばくもない。午後も少しやって、すぐ終わった。レワットさんがやってくる。 Agreement の話のようだ。英文で書かれた内容について、スリジャナさんがネパール語で細かく説明している。 Padat とお昼前に約束していたバドミントンを少しやり、それからその話に加わった。すぐく形式的で面倒くさいやり取りに、レワットさんはうんざりしていた。そういうしているうちに小松さんとゴパールさんが帰ってきて、もうちよつとすると高津さんがやってきた。高津さんは、やはりなんか異様だ。そのうち新しい机と椅子がやってきて、残りが三週間となったところで僕の机が出来た。僕が来たばつかりのときに考えた配置プランは台無しになった。

夕方の散歩へ。夕方は楽しかった。そこまでの道はただ薄暗いだけとも言えるが、ドゥルバール広場ともなれば、朝より断然活気がある。座っている人が多い。それがこの場所の賑わいを確実なものにしているのだろう。そして、いわゆる働く子ども朝には見

られないほどの数でいる。多分学校が終わってから手伝いをはじめのだろうと思う。若者も多い。Tagankhelまでそうだった。そんなこんなで歩いて帰ってきた。

晴れ

Homestay

Tempo SRs、一本 1Rs.

一月二十一日 Sukrabaar

出発が遅れてしまった。この日は子どもらのところへではなく、久しぶりな朝散歩をしようと思っていて、そして描きたいところも決まっていた。それは「SEM」の寺院の大きな木。この木を中心に、いろんなものが成り立っているのだ。

久しぶりの朝のSamepa。ゆっくり思い出しながら歩く。それでも何度も通った道だ。そんなに変わるわけではない。橋へ差し掛かって、吊り橋の震度を感じながら、右手に見える寺院を越えていく。木のところへついた。だけれども時間が少なかった。適当には描きたくないので、日曜日に来て描くことにした。どこから描くんがいいかなあと、木の周りを一周してみ、具合のよさそうなベンチのようなどころにちよんと腰をかけた。庇がちょいと出て、日を受けて影になった部分が視界に入った。それが上部を切り取るようなフレームになって、この木と周りの建物が目の前に広がった。「幸せだなあ」と口から漏れてしまった。

ほんのちよっとだけ眺めて、また川沿いの方へ。出てみると、なんとということだ。川から霧が発生して、もう20mくらい先は見えないようになっていた。歩けば煙の中からぼんやりと人やものが形を確かにしてくる。その温度も気持ちよく、のどを潤した。気持ちが良かった。

この日から新しい鍵を持っていたので（前の日、ドアの鍵も新しくした）、他の人の出勤時間を気にせずに事務所へやってきた。メールやグムナなどをやって、その後「わくわく」の展示会場視察について行かせてもらった。現場って楽しいよなあ、と思う。なんかいろいろイメージが湧いてきた。

行ったのは三つ。一つはステイ先のすぐ前で、もう一つはドゥルバール。そしてもう一つがPatan Dhokaの目と鼻の先。諸条件から、空間としてはドゥルバールの方が良いのだろうか、Patan Dhokaのところへ決めた。

その後はちよっと暇が出来て、本を読んだり、この前のスケッチの色をつけたり。そんなことをしているうちに、レワットさんが来た。あれ、何しに来たんだっけ？ 確か、多分、銀行がなかったらかんだらでその確認に来たんだっけと思う。

五時くらいに事務所を出た。明るいうちに、New Roadに行つて、カメラおキャッ

プを買いに。バングラデシユで失くしてしまったのだ。これが結構高くてたまげた。Nikon 純正のものは 600RS もしやがる。そんなに出すのはあほらしいので、名もないただのキャップ、しかも中古のものを見つけてそれを買った。それでも 250RS もした。Tempo かマイククロに乗りたかったが、なかなか行きたい先へ行くのが来ないので、TAXI を拾った。

この日は JAFON と夜の Patan を歩くことにしていた。ステイ先のお母さんにそれを伝えるのを、朝うっかり忘れていた。ちょうどお母さんたちもパーティがあるとかで、ごはんの準備が大変そうと、逆に都合が良かったようだ。ロティをおかず無しでホクホクさせて、それでも結構うまいものだ。その後すぐ出発。八時集合にしてはかなり早めの出発だが、もう少し早い時間の雰囲気も、自分で見ておきたかったから。ちよっと大回りする感じで JAFON の事務所のところまで歩いていった。

レワットさんを含め、JAFON の三人が火にあたっていた。そして、もうすでに一人子どもがいた。JAFON はこの前新聞に載っている。焚き火に当たりながら、レワットさんはそれを自慢げに話した。子どもたちもわらわら集まってきて、七人になった。みんな臭い。中にはシンナーをやってきたらうやつもいて、気楽な雰囲気だった。Ashok など、もう何度か見たことあるやつが何人もいた。そういうやつらが僕らのパートナーのところへ泊まりに来ているのは、うれしかった。こいつらは、"Hanno Sansar" という言葉を使っていた。そのメンバーは、十〜十五人くらいいるんだぜ"と。予定より大分遅れたが、レワットさんと小松さんと三人で歩き出した。Sundhara の寺院の方を抜けて、Laganakhei の方へ。その途中でまず Sonam に会った。なんか彼は疲れたような、集中力のない顔をしていた。そして、ドウルバール広場では、Tara にも会えた。寝てはいないものの、そしてさほど多くはないものの、結構遅くまで子どもらにはいる。と言っても、こいつら大体中学生くらいの年齢を上回っているから、東京の池袋辺りの方がよっぽどストリートチルドレンが多い町なんだと思う。ドウルバールでは、集まってきた（近寄っていった）子どもらは明らかに僕のかばんの中を狙っていた。その感覚が面白かった。小さい子で、子どもっぽく僕にべったりな雰囲気ながらも、その左手が気になっているのは僕の青いかばんでしょう。隙を狙っている。やってみろ。何にも入っていないから。僕はいつもたいたお金を持ち歩かない。そんな安心感があるから、Tara と小さい子どもとも、結構普通の感覚で接することが出来る。

レワットさんはいいお兄ちゃん、という感じで、やつぱりいいなあと思う。あの接し方には、誰もがほれ込んでしまうだろう。そして肩書きが面白いじゃないか。JAFON が大人気なのは当たり前のことだ。そこは逆に気をつけなくてはならないと思う。

Laganakhei から Jawalakhei、Pulchok へぬける。僕が毎朝会っているごみ集積所の前も通って、お化け屋敷なるところにも行った。さすがに彼らの生活に関する実感があるから、少しそれを元にレワットさんの言葉を解釈したり、少し意見を言うことも出来た。

そしてゆっくり歩きながら、JAFON事務所まで。そこにはSonamとその連れのやつも加わって、結局九人の子どもが泊まっていた。

夜は小松さんちへ。僕はロティを少し食べていたが、小松さんはこの時間まで、夜は何も食べていたなかった。一緒にごはんをいただいで、その後少し議論をした。シャブラのこと、開発のこと、地域づくりのこと、社会問題のこと。シャブラのプロジェクトや国内活動にまで話は及んで、結局二時近くまで話し込んでしまった。明日は子どもとの約束がある。

……

晴れ

小松さんち

マイクロ TRs、カメラキャップ 250Rs、TAXI 70Rs.

一月二十二日 Sanibar.

前の日は話し込んでしまった。お酒が入っていたからすぐ寝つけたものの、普通の夜だったら眠れずじまいだろう。すごく眠いながらも、いつもの部屋ではないばかりか小松さんちだったので、朝のうだうだもなしにむっくりと起き上がることが出来た。服を着て、身支度を整えて、なるべく音を立てないように部屋のドアを開けた。でも最後の出口の鍵の場所と仕組みに戸惑って、結局ガタゴトいわせてしまった。

まだぼんやりとした明るさの道を歩きながら、少し頭がいたい。風邪気味の治りかけだったのに、あんな風に過ごしてしまっただから、ちょっとぶり返したのかもしれない。特に後頭部がおかしかった。ステイ先まで戻って、すぐ出かけようとも思っていたが、朝ごはんをつくってくれていた。ありがたく頂戴して、早速出発した。

ごみ集積所に行ってみると、クリシュナとクマル、そしてラジットしかないなかった。ちょっと予想外だった。土曜日は、最初のときはたくさんいたんだが、その後の集まりはそんなに良くなかった。なので前々日にアナウンスしておいたし、そのときは「オックケー」みたいな風だったのだが、やはり前の日か、その日の朝かに何の仕事をするかが決める（決まる）のだろう。デイペシユやデイリブ、アミットには悪いがそういう約束だ、しょうがない。

寝不足や体調の悪さがもろに出て、来たはじめはちょっと元気がなかった。といっても、口数が少なかったり、こいつらの話を傾けにくかったりする程度で、彼らの動きや目のやりどころには関心を持っていた。でも発泡スチロールやらビニールやら、結構大きな火になって熱をもろに受けているうちに、頭がぼーっとしてきた。そんなときは立ち上がって、頭の血を落とすようにした。これは間違った対処なのだが、あの時はその間違いを思い出せなかった。

ラジットは先に「カバル」(こみ分別所)へ行つた。三人になつて、やつとこの場は一区切りついた感じになつた。彼らにも、もう「土曜日」が定着している。さあゆこう。お茶の前にゲーセンに立ち寄つた。彼らは特に一緒に過ごした時間が長く、結構たかつてきたりする。最初は分別のきくお兄さん風だったクマルも、やはりそこら辺のバランス感覚があるやつなのだ。まあ、ゲーセンくらいは特別に許してやろうと思つた。サッカーゲームに熱中し、ちよつとやらせてもらつて。そのうちに、かなり気持ち悪くなつた。タバコの煙なんかも気持ち悪く感じる。眠いし。

ゲーセンを出て、前の週に行つたお茶屋さんに向つた。この場所はちよつと好きだ。面白いなあと思うのは、前の週のとときよりお茶が一杯高かつた。おぼちゃんも、僕が日本人だというのに、二回で気がついたんだろう。ドーナツも買ってこさせて(僕はクッキーを買つて来るのだと思つていたのだが)、食べ終わつた後、すぐ出発することにした。慌てて出ようという雰囲気だつたのを尻目に、僕が支払いを済ませて外へ出ると、彼らが見当たらぬ。どこにいるのかと辺りを見てみると、あいつらは気まぐれに魚屋の手伝いをしていた。手伝いというより、鱗取りをやつてみたかつたのだろう。店の主人も若いあんちゃんだ。クリシュナたちがやるのを、そしてこのあんちゃんがお客さんとやり取りしながら魚をがつがつと切つていく姿をしばらく楽しみ、再出発した。

いつもの道と違つて、大回りしてクマルの家へ行くことにした。こいつらはまたお菓子を買いたいと僕に願ひ出た。そんなのはダメだといつた。僕はお茶とお茶にまつわるエトセトラにしかお金を出さない。そういうことを良く知つていて、クマルはよくちようだいよ。みたいなしぐさをする。クリシュナはまた、卑猥な言葉を口ずさむように連呼していた。馬鹿なやつらだ。

僕はこの日はデイベシユたちの家をスケッチするつもりでいた。後で家に行くよ、と伝えて一度別れた。前の週はクマルのお家を描いた。そのスケッチをこの日は彼らの差し上げる予定にしていた。

描いているうちに、やはりその辺りの子どもらや冷やかし半分のおっさんがちゃちゃを入れにやつてくる。こういうのも久しぶりで、また楽しいもんだつた。一度描き間違えたところがあつて、それを消そうとすると、「なぜ？」と一人の女の子がいつた。そうそう、彼らの関心は絵ではなくて、なぜか知らないが絵を描いている僕にあるのだということを思い出した。

一人で歩いていると、いよいよ陽の勢いが強くなつてきて、これはもう、大分辛くなつてきた。道も間違えてしまった。前の日の夜かなんかにちよつと降つたらしい雨の残りに足をとられてしまふし。クマルの家にやつとこさつたときには限界だつた。絵はあまり好評ではなかつた。会心の出来では確かになかつたが、まあ、へえ、というものだろう。十時過ぎだつたが、ちよつとごはんを食べる時間のようだつた。クリシュナが外の日当たりのいいところでごはんを取つていた。こいつは最近自転車を持つてゐる。前

の週もクマルのところへ生ごみを持って行っていた。もしかしたら最近はこのつちに世話になってるのかも知れない。そんなことはどうでもいいのだが。

もうふらふらだったので、絵を渡すとすぐに事務所へ向った。Jawalkhalまで Tempoをつかまえて歩くのも辛かった。何度も帽子を取ったりまたかぶったり。そこから辺のことはあまり覚えていないのだが、やっとこさ事務所へついて、メールやグムナを少しやった後、本当はインターネットで調べたいことがあったのだが、少しばかりそれに触れたらいいようにしようもなくなって、事務所の奥の部屋で横になった。昼寝をすることにした。Parbatがうるさかった。

起きると四時で、ぼうっとする感じはなかったものの、頭痛は酷さを増していた。その後の勉強会への参加をどうしようか迷ったが、事務所のバファリンを持参して参加することに決めた。話はまあまあだった。そこで出たご飯を食べた後すぐステイ先へ戻った。眠いことを告げて、すぐ寝ることにした。バファリンを飲み込んで布団に入った。

晴れ

Homestay

ゲーム 20Rs、ドーナツ 10Rs、お茶 18Rs、Tempo 5Rs、Tempo 5Rs。

一月二十三日 Aatiabaar

バファリンを飲んですぐ寝るといふのは、結構いい選択だったようだ。起きるとすつきりとしていた。そしてずっとあった首の右側の痛み、リンパが腫れていたのだろうと思っていたが、これは寝違いだったことに気づいた。いや、リンパがはれていたときもあったのだろうか、長く続いていたのは寝違いの方だと思う。

外では雨が降っていた。大分降っている。この日はスケッチするところを決めていたし、スラムにも行きたかったのだが、体調が良くなりきっている気もなかったもので、部屋でのんびり過ごすことにした。持ってきていた本もまだ読んでいないものがある。寒いので布団の中で、この本を読み耽ることにした。

本は面白いのだが、布団の温かさに集中力を奪われることもしばしばあった。ふとすると雨が止んでいて、すごい晴れ晴れとした青が、僕の部屋の狭い空からものぞむことが出来た。意地悪なお天気だなあと思いながらも、布団から出ずに、一つの体勢にすぐ飽き飽きしながら時間が過ぎていくのを忘れていた。そんな一日だった。

お母さんは終日何か仕事をしていた。

雨、のち晴れ

Homestay

Nothing

一月二十四日 Sombar

この日は僕の誕生日だった。そんなこともあったのだろう、体調が良くなっていたし、少し気分が明るかった。

スラムへ持っていくかと思っていたお菓子をかばんに入れ、まずドゥルバル広場の方へ行ってみようと思った。裏の方の道をあっち行ってみたりこっち行ってみたり。100Rs 札しかまとまったお金を持っていなかったの、これをくずしたかった。何度かお店で断られるも、やっとこさお茶屋さんで換えてもらった。すごく快く引き受けてくれた。特に何の見返りも求めないようなお兄さんの対応に、気分をよくした。「今度はお茶を飲みに来ますね」と言つて、もうちょっと東へ行ってみようと歩き出した。そのドーナツはうまそうだった。たまにこういうのを子どもらに持つて行ってやつてもいいかなという気がした。

ドゥルバル広場から Mangal Bazar を歩くと、Tempo やらなんやらがよく通るので、ちよつと行つたところで右の小道へ入つた。Lagankhal に近づいたところでまた小道に入り、くるつと回つて職人さんのお仕事や水溜りがなかなか引かないところ、そんなところからまた Lagankhal の方へ出てきた。

僕のこの散歩は一体なんでやっているのだろうか。最初の時期の、初めての風景に開心を持ち、それをよく考えたい、というのはもう終わつていた。その後子どもらに会うようになって、やっぱり彼らの生活に最も関心があるのだろうと思う。ビニールやくずを拾つたり、Tempo の引き込み屋さんをやっているような子どもに少し目が行つてしまふのも確認済みだった。そういう観点からすると、大分的外れな道を歩いていると思つた。彼らの仕事場は、大通りだ。CAPICRON のおねいちゃんたちと歩いたのも、そういう道やポイントがメインだ。でもこういう道に気が引かれるのは、多分最初の時期によくスケッチを取っていたのが利いていると思う。子どもらの仕事ぶりや汚い格好も、きつとこういう、後ろの空間からにじみ出るものとして捉えているのだろうと思う。

その後ごみ集積所へ行つてみた。すると、久しぶりのプロバープやアマミットもいた。他にラザ、クリシユナ、クマル、ラジツト、こちら辺はなじみの顔だ。僕が火に近づいていくと、ラジツトが「ナマステ、ツァール」と言つて迎えてくれた。最近ディベシユ兄弟を見ないのが気になったが、持つてきていたクッキーをみんなに渡し、そのうちの一枚だけをもらった。クリシユナは最近僕が来ると露骨にテンションがあがる。クッキーをみんなで食べていると、道端で天に向つてネパール語で「まんこー！」と叫んだ。さすがに甘やかせ(放つとき)過ぎたかなあと思つた。その後も僕のところへやつてきて、卑猥な動きをやつて見せた。さすがにぶつたたかれると思つたのだろう、ちよつと顔を

手で覆い隠すようにして身をかがめた。僕がそんな気がないことが分かると、安心してまた近寄ってきた。本当、馬鹿なやつだ。

「まもなく彼らに別れを告げ、Jawakhelへ向った。Tempoに乗り込んで事務所へ。朝のミーティングでは、金曜日夜の訪問がどんなものだったかを伝えた。最後に僕の誕生日であることを伝えると、言ってみるもんだ、お昼過ぎにお茶と一緒にお菓子が出てきた。

午後のミーティングで、わくわく、本番に向けて、どのような役割分担で仕事を進めるかを決め、僕は早速招待状のデザインに取りかかった。

帰りの散歩もLagankhelの方から、大きく回ってステイ先へ帰ってきた。この日は僕の誕生日ということで、娘さんがピザを作ってくれた。これが結構田舎臭いピザでおいしい。これまでも何度か出てきたが、うれしいものですな。少しお酒が入っているのもあるし、最近はまだ散歩をするようにしているから、夜すぐ眠くなる。

晴れ

Homestay

一本 2Rs、Tempo 6Rs、一本 1Rs.

一月二十五日 Mangalbaar

この日はPatunのあたりを歩こう。子どもらに会いには、先週から毎日行っていない。行ってもずっとそこにいるのは土曜日と気が向いたときだけ。だんだん彼らの気質も分かってきて、僕にとってもただの「新しい人」ではなくなってきた。距離感が定着してきていて、こんのくらいがちょうどいいと思うようになって来た。

Lagankhelの方にも行き慣れてくると、いよいよこのリングロードが小さく感じる。最初は結構遠くに感じていたのだが、ちよつと行ってみればあのLagankhelのバスターミナルを意識してしまうところに出る。

前に歩いた道を確かめながら、ゆつくりと歩いた。木のあるところ、ちよつこり現れる塔、塔に木がよきによき生えてしまっている様子。今までにスケッチを取ったところにも何度か出会う。この前ここを歩いたのはお昼時だっただろうか。朝の表情はまた違うもんだ。長く子どもらと会うようになってきて、またバングラデシユに行っていたから、散歩して感じ取る僕の生活スケールがふやふやに崩れていたんだろう。歩くのを楽しむことの延長で彼らと出会ったのだという感じがしてきた。

東の方の朝の表情が見たくなってきた。Mangal Bazaarを越えていくところで、ちよつと遠いから日曜とかにしか歩いたことがなかった。これまでの感じなら歩くだけなら時間的距離的にも大丈夫なので行ってみよう。

こういう心持になるとはじめての道に入りたくなるもんで、小道を見つけては入ってみた。抜けると広場になっていて、サッカーに興じるやつらなんかいた。東の方は、朝だからといってどうのこうの、ということはなく、前に来た通り雑然とした心地よい雰囲気があるだけだった。なーんだと思って坂道をあがっていくと、目の前に障害者らしき子が歩いている。ちょっと異様なのだろう、四人の通学グループがその子をさっと避けた。

障害者の子、こいつが結構歩くのが早い。やや右に傾き気味な体勢なのに。ちょうど僕が歩くのと同じくらいだ。四人グループはこいつが何でもないことに気づくと、古い映画のように「やいっ！」という感じでからかい始めた。どこにでもこういう奴はいるもんだ。彼らは岡の上の大きな木のある広場の前に停まっているバスに乗るらしかった。このまま行くといつもの寺院の東側に出る。そこら辺の町並みを感じるのもいいかなあと思っていたら、右手（北方）にあの畑の風景が広がった。足はここを歩かないわけにはいかないと、ふらふらと坂道を下りていった。八時くらいだったかな、この時間にはあまり人の作業風景は見当たらない。うっすらと水の煙が生まれる気配だけがあつた。そんな中の小道を行くのもまたいい感じだった。この道から寺院前へ出て、あとはいつもとどおりのルートで事務所へ行った。

「わくわく」の invitation card づくりに取り組んだ。スキャンしに行ったりして、出来もだんだん気に入ってきていた。

帰り道は Mangal Bazaar の方から。この帰り道もお決まりになつてきた。夕方のこの賑わいは素敵だ。細い道を通っているうちからその気配が染み出てきているはずなのに、広場に出るとまた別世界のような空気になる。時間が経つにつれてだんだんこういう賑わいが出るのではなく、いつもある瞬間に大変化を起こすんだろう。今度は夕方、東の方から大回りして帰ってみよう。

晴れ

Homeslay

一本 1Rs、お菓子 44Rs

一月二十六日 Budhabaar

起きてみるとちよっと鼻声っぽかった。風邪だろうか。

ステイ先を出る直前までどこへ行くか決めかねていたが、ドアを出たところで Saneipa を通つて「へん」にした。

まず国際機関が連なる方へ。でもそんなところへ入り込みたくはなかったので、適当に右（北方）へ入ってみた。東京で言えば、郊外、とまではいれないが、山の手の住宅地っ

ぼい雰囲気。でもこはそれよりもほのかな起伏で、何でもない緑がごちゃごちゃ生えている。なんというのかな、気にしない。風景、とでもいうのかな。この感じを楽しむんでいると、少し方向を失いかけた。でももうそんなことには不安がったりしないのだ。Saneapa は、実を言えば好きなところがポイントポイントであるだけで、散歩道としては断然 Patan の方がいい。あちらは小道も多く、複雑な完成系。その上に結構歩いてきたから、歩いているうちに退屈になってきた。どうしようかなあ、と思っていると、人がひよっこり出てくる小道を見かけてしまった。そこへ入ってみた。

この入り具合からすると、途中で行き止まりだろうと思っていたが、これが結構続いていて、本当の小道。生活道だ。へえ、なんて思っていたら、はっとした。折れて出てみたところからは、ちょうど地形が Bagmati 川に向かって落ち込むところで、そんなところには建物が建たない。一気に視界が Kathmandu City の方まで広がって、Thapathali の交差点付近の大きな木も見えた。おお、と言って立ち止まってしまった。僕の行動が不審だったのか、後ろに歩いてきたおねいさんがそそくさと歩みを速めて行ってしまった。

ここに棲みつく家々も、レンガの平屋、掘っ立て小屋がぼつぼつ建っているだけ。すぐ先の曲がり角では、温かい煙がもれ出っていて、朝ごはんの香りが漂ってきた。振り返り気味にこの道をくだりながら、知らない道がまたあるもんだなあと反省した。道のりでは言えづらいものの散歩道より短くなったので、ダントツの一番で事務所へ到着。メールをやったりインターネットでちょっと調べ物をしたりした。

この日は学生団体の抗議運動が予定されていて、遅くならないうちに帰りましょう、ということになっていた。ちょっとした事情があつて、僕は外でごはんを食べなくてはならなかった。それでも外にずっといる状況がかなわなくなって、結局小松さんちでごはんを一緒に食べていただくことになった。カトマンズ事務所の上に部屋を借りている子も来ることに。この子の話が結構面白かった。話も盛り上がりつつ随分遅い帰りになってしまった。

晴れ

Homestay

TAXI 50Rs.

一月二十七日 Bihibar

来た頃に比べると、大分日の昇るのが遅い。ごろごろしてしまっているではないか。

この日は焚き火をした。Jawalakel のロータリーでいつもタバコを売っているおじさんに話しかけてみた。七十二歳だという(本当は何年前からここで仕事をしているの

か、と聞いたつもりだった。そして、Mangal Bazaar よりももっと向こうから来ているのだそうだ。結構遠い。僕の見かけたところからすると、この人は七時十五分ごろからここへ来て、商売をしている。暗いうちから出てくるのだろう。

Krishnaともう一人、名前を知らないあんちゃんがいる。そのうちすぐにクマルがやってくる。最近、ディベシユたちを見ない。あいつら元氣だろうか。

こいつらにクッキーをやって、火にあたっていた。この日は結構ごみが多くて、僕にとつての足場が少なく感じた。それでも使えるものは少ないようだったが、ダンボール系のごみが結構あって、焚き火をしに来ている僕にはよかった。

途中で燃やしたビニール製の簡易ファイルの解け燃えていく様がきれいだった。とけていくチーズにも例えられるかもしれないが、それよりも透明で、それよりも下にある灰や炭にまわりついていく。他にも電気関連の図面にくっついていた紙は、燃やすとまず赤紫に染まりあがって、白抜きで図面が浮かび上がる。やがて真っ白になり、消えていく。トレーシングペーパーはポツポツと沸騰したように表面がはじけあがり、くしゃくしゃと燃えていく。楽しい焚き火だった。

Krishana は相変わらず馬鹿なことをやっている。ノートと描くものがほしいということから貸してやったら、なんか変な絵を描いていた。アミットはうまいもんだったが、こいつにはそういうセンスが感じられん。というより、この絵にあるように、彼のいいところはもっと別のところにある。でもこいつもあと五、六年もすると、どうなっているだろう。ノートを手渡される時、焚き火の灰のすぐ横に落としてしまった。

一番に事務所へ着いたが、やがてスリジャナさんが現れた。今日は早いなあ、と思ったら、そういえばこの日は抗議運動で交通封鎖を行っただけ。早めに出てきたようだ。小松さんはそれに加え、バイクのタイヤがパンクしたとかで、どうにもこうにもならなかったようで、かなり遅くにやってきた。

晴れ

Homestay

Tempo 5Rs. 一本 1Rs. 一本 1Rs.

一月二十八日 Sukrabhar

前の日よりもちょっと早く出たので、あの Jawalakhel のおじさんはまだいなかった。そそくさと焚き火の方へ行くと、いつもとちよっと様子が違っていた。大きい目見たことのないやつらがいて、焚き火に近い歩道の上には見知らぬお婆ちゃんがいる。僕が知っているのはクマルだけだった。

このお婆ちゃんはすごい独り言をはいっていて、もちろん言っていることもよく分から

なかった。周りにいる若者たちも時折苦笑いを見せる。でも一度彼らのうちの一人がタバコを彼女に渡すと、フィルターをびつと捨てて、右手を丸め、その手をパイポの管に見立ててほくほく吸っていた。その姿が面白かった。そういうえば、そういう風に吸っている人をまち中で見かけたなあ。

クマルもちょっとおとなしい。いつもなら“chya(お茶はっ)”というのだが、そういうのも洩らさなかった。彼らぐらいの年齢になると、観察だけでは量れないものがある。どうしても言語が必要だ。短時間ではどうにもならないし、きつと、いつも来るというわけではないだろう。そう思うと時間も時間をもったいない気がして、Lagankehalの方へ歩くことにした。

歩きながらいつものやつらはいないものかときよろきよろしていたが、あつという間にParan Hospitalの前まで来てしまった。ちよつとこの様子を伺いたくなくて、タバコを一本買った。ここは病院の前だというのに道売りの店は出ているわ、待ち合わせの人がたむろっているわ。ちよつとマイクロバスやTempoがよく停まる場所になつていて、排気ガスもタバコの煙もすごいことになつている。

タバコを吸つていれば、その場にいやすくなる。安心してきよろきよろしていた。八時あたりだったが、かなりお店も出ていて、お茶屋さんももうフル回転している。確かもうSonam(“わくわく”)に参加したレストランで働く子ども)もいた気がする。前に来たときもいた人が同じところにいたりするもんだから、いい気分になつてそこを立ち去つた。

ロータリーの方へ歩いていくと、道の反対側に大きな大きな袋を持ったクリシュナとラザが歩いてきていた。クリシュナは僕にいち早く気づき、“सुだ、सुだ”とラザに伝えていた。近づいていくと、「お茶お茶」という。明日だつて言っているのに。最近よく差し入れのビスケットを持って行つていたから、期待が大きいんだろう。あと、実際彼はよく腹をすかせている。「明日な、明日」というと、「明日明日(またそれかよ、みたいな)」といった。それにあわせて踊つてやつた。

「じゃあな」というと、クリシュナはちよつと元気をなくして“うん”という小ささをしたが、ラザは「バイバイ」といった。こいつの感覚は不思議だ。不思議というか、まあ、そうまじめな奴ではないのだ。

ロータリーに行つてみたものの、よくたまっている場所には気になるやつは誰もいない。もう商売が始まつていて、それに関係するらしき人が背を向けているだけだった。特に何を出来るわけでもないな、と思ひ、ちよつと市場を覗いてみてもよかったのだが、Tempoに乗り込んだ。

この日も“わくわく”関連の仕事をして、お昼過ぎのミーティングで確認したことをやつているうちに夕方はあつという間だった。

Lagankehalの方を回つてみた。Jawalkhelのロータリーのすぐ近くにミスタードーナ

ツのようなお茶のお店があって、その前に居座っている男の子が一人いた。中にはその仲間だろう、何か買っているのかねだっているのか。知っているやつかと思つて外にいる子の顔を覗き込むと、店の前で待っていた彼は、何か期待して僕についてきた。何か言っている。にわかにはリズムがあって、それにあわせて「るんるんるん」みたいな鼻歌ともいえない言葉を僕も口ずさみ、たまに彼の肩に腕を回してみた。あつという間にあきらめてどこか、多分あの店まで戻っていったんだろう。

晴れ

Homeslay

一本 IRS' Tempo SRS' 一本 IRS

一月二十九日 Sanibar

JICAのボランティアの人たちがサツカーをやるという誘われていたのだが、土曜日は子どもらと約束があるので断った。当然。

さてさてとて焚き火を見に行く、誰もいなかった。土曜日なのに。「おいおい」と思つてちょっと、ほんのちよつとだけ突つ立つていたら、前に見たことのあるおじさんが、ごみ捨てかなんかに来ていて、「今日はいないぜ」「みたいなさぶりをした。そうかね」と首で合図をして、まあそれはそれで、と彼らの生活ぶりに逆に好感を持ちながら、久しぶりに土曜日の散歩へ出た。

行ったことのない道と距離感をつかむのをテーマに、Lagankhelの辺りからもつと西のPulchokの辺りから、Sundharaや東の郊外地の方まで、のんびり歩いてみた。やはり土曜日ということもあるだろう。裏の空間は僕のテンションに合わせるようにのんびりしている。この時間ともなれば、平日なら結構せわしくなっている。この日は野菜売りに自転車を押すおっさんや屋台風のアクセサリー売りのおっさんや。僕のいつも歩くようなところでは見えない雰囲気か動いていた。

大体の位置はつかめている。リングロード際の東の地区からは道なき道にも入つていつて、あの畑の中にも入り込んでみた。時間をたっぷり使いたいから、寺院の方へは行かないで、また引き返すようにもとの道の方へ歩み寄っていく。

そこからJAPONのオフィスの方やいつも渡る寺院前の橋のところまで行つて、そこから辺の住宅地の雰囲気のをぞいてやろうと思つた。前の朝もそうしてみたいと思つていたんだが、畑の魅力に負けてしまった。「そうはいかん」とこの日は決めた。

やつぱりオモシロかった。質としてはやはり俗っぽいのだが、つくりだてのゲートがあったり、やはり何よりも起伏の魅力だろう。右手（北方）に見え隠れ、たまにどかんと広がる畑の空間も魅力的だった。何か、新しい雰囲気が出来てきているんだなあとい

う気がした。そもでもって、知らない道がたくさんあるもんだ。細い路地や袋小路、広場のような空間に出くわす。もちろん中庭や袋小路の空間そのものは長い時間を伴ってあるんだろうと思う。必ず子どもが遊んでいたり、女の人たちが座ってよく洗濯していたりする。作った空間ではない。ふーんなどと思つてひよっこり通りに出てみると、不意によく通る、JAFONの事務所のすぐ近くの通りへ出た。一度スケッチを取ったこともある。ちよつと裏手や道とは思わなかつたところに、これだけのもんが隠れていた。なんか、うきうきするもんだ。

橋のところまで行つて、引き返してきて、そこから地形の変わり目あたりを西へ向つてみることにした。もちろんテーマに沿つてはいるんだけど、こちらの方が割合に古く、予想のつきやすい町並みだった。また、結構近くを歩いていることもあるのだろう。たまに出くわす。知つている場所を確認しつつ、歩いていく。「大分行ったなあ」と思つたところで、ぐいつと南へ方向転換し、また行き止まりに出くわしながらも Jawalakeh の方へ行くことにした。

ごみ分別所の前を通つて、ディベシュたちの家へ向つた。前に描いた彼らの家のスケッチをあげようと思つて。リングロードへ出て彼らの家の前へ出ると、彼らのお父さんがいた。前と違つた服を着ていたので、後ろからは分ならず、横顔が見えたところで僕もやつと気づいた。

「ああ、こんにちは」というと、彼はもうすっかり忘れていた様子だった。ああ、ああ、と思ひながらも、最近見かけないディベシュのことを聞いてみた。「ディベシュたちは元気ですか?」、彼は大きく笑顔でうなずいた。まったく当てにならないので、直接家を訪ねて、絵だけ渡して動物園に行こう。顔で誰かいるか、行つていいか、とお父さんに確かめて、よつこらせと歩き出すと「シー」と聞こえた。

見返してみると、ディリップが小さな自転車で遊んでいた。久しぶりに見る彼に、おお、と途端に気が楽になつて、早速持ち上げてやつた。わかるかね、と彼に絵を見せて、「あげるよ」とノートから破り離して渡すと、すぐにお父さんへ渡しに行った。ああ、ああ、と思つた。

すぐ近くにはカイレもいた。手持ちのお菓子があつたので、彼らにあげようと思ひ、目と鼻の先にある水汲み場に腰を下ろす。ディリップは坂道の上の方から、ちよつとした勢いをつけて自転車で降りてこようとしていている。この日の彼の格好はかわいい。ピンクっぽい赤のダウンチョッキをきている。よく見ると自転車の後輪はぐにやぐにやで、坂の上の方へ上るのも分るなあという気がした。全然前に進まないんだもの。

「こつち来い」と呼び寄せると、自転車を押しむことは忘れずに、しつかりとこつちへやつてきた。彼にお菓子を見せると、六袋のうち四つをさつととつてしまったので、「おいおい」とひとつ取り返した。カイレと一緒に遊んでいる女の子の二人にもあげたかつたから。ディリップは三つ、カイレは二つ、女の子は一つ。

彼らには不思議な平等観、というか、あきらめというか、そういうもんがある。女の子がカイレが二つ持っていることに気づき、ディリアが「俺は三つ」というと、その子は「みつつ、ふたつ、ひとつ」と言っ、笑顔だった。その後はどう化けるかは知らないが、まあ、そのときは楽しそうだった。

Jawalkehelの動物園へ向う。前の土曜日にクマルとKrishnaと行った道を帰り道にして歩いていたら、おながが減った。動物園のすぐ近くのお店でドーナツ二つとお茶をたしなんだ。

動物園の前にはグラウンドがあつて、そこではたまにサッカーをやっている。この日もサッカーが始まる様子だった。動物園のチケット売り場のすぐ前にベンチスペースのようなどころがあつて、そこへ回ると、集まって体操をしているのはJICAのボランティアさんたちだった。断ったサッカーは、ここでやるんだつたのだ。ディベシュたちの家へ向うのに通つたときにもそんな気がしたのだが、いよいよ動物園の入り口まで来てしまった。気づいて何も言わないのもなんだから、数少ない知っている人の名前を呼んだ。サンダル履きの何も持たない姿だったが、「今日は大丈夫なですか？」の質問に断る理由もなく、靴も借りることにして結局サッカーに興じた。結構楽しんだ。

動物園はなくなつたが、予定通りの時間で小松さんへ。with、というドキュメンタリー映画のビデオを観ることにしていたのだが、微妙な映画だった。悲しさや心への訴えかけはもちろんあるんだけど、映画としてはどう評価したらいいのやら、分からない。そしてテーマの彼女の本業である芸術の方面ではなく、これを僕たちのような国際協力のボランティアたちがござって観ているのにも、僕にとっては少し考え物だった。

映画の前にお昼ごはんもご馳走になつて、お茶やお菓子、ケーキなんかもたらふくいただいて。屋上にも上つて、いい眺めを楽しんだり、猫ともなんともない様子を伺つたり、夜になるまですっかり長居してしまつた。ちよつと遅れて帰つたけど、ちよつとごはんの時間に間に合つた。

晴れ

Honestay

一本 1Rs.、ドーナツ二個、お茶 11Rs.、一本 2Rs.、TAXI 35Rs.

一月三十日 Aaitabaar

日曜日だし、ゆつくりしようと思ひ、ごはんを食べた後も本を読んだ。九時くらいに出られればよいくらいに思つていたのだが、すっかり読みふけてしまつて十時近くになつた。

出かける際、「今日は昼ごはんいらないうす」と伝えて出ようとすると、この日は日本人のお客さんが来る、一緒に食べる、だからダメだ、という。ダメってなあ。この日こそ、逃し続けていたスケッチとスラムに行くことにしていた。どちらもステイ先から近くはなく、事務所でも少し作業をしたかったので、行って帰ってくるタイムロスが大きい。そのまま外にいたかった。まあでも、そういわれてしまったのはしょうがないので、事務所ではできないネット関連のことだけ済ませて、コンピュータを持って帰ってくることにした。

いつもなら歩いていくところだし、この日もそうしようと思ったが、ステイ先のドアを出たところでとこさに「Tempoで行くか」と思い立ち、帰りにスケッチを取って帰ってくるどちらようどいい時間だろうという算段をつけた。

Thapahai Hospitalのすぐ近くには、いつも道売りが出ている。そのあたりで立ち止まっていると、結構人が歩いている。一人だったり数人のグループだったり。みんながここに住んでいるわけではないだろう。でも何かしら生活に関わる目的で、ここにいるんだらう。これだけの人が。そんな風景に心地よさを感じる。僕の住んでいる町に、このような風景はあるだろうか。

十二時少し手前になってしまったが、Tekuの寺院の向った。久しぶりに、しかもこのお昼時に川沿いを歩こうというもの。臭かったり、たまに人がじろじろこつちを見たり。相変わらずだなあ。最近ではKahmanduもびりびりしているから、武装警察のところは通れないだろうと思っていた。この前も朝からバリケードが張られていて遠回りをしていった。だけれども、遠目からは人が歩いているように見えた。バリケードも少し脇にはずされている。しめしめと思つて入っていくと、やはり呼び止められた。最初「pai, dai」と言っているのが、僕に言っているのに気づかなかつた。それがより不審を匂わせたんだろう。

「兄さん、どこへ行く」「ただ歩いてこつちに行くだけなだけだ、ダメかね」、僕も歩き慣れていると言つても、ここを生活道や通学道として使う人々のような雰囲気ではない。「どうぞで」、説明をしてやつと納得してもらつた。

スケッチしたかつた木は、相変わらずどしりとそこへ座つておられる。この前のベンチも空いていた。手持ちのコンピュータも僕のバッグも足元へおいて、描き始めた。すぐに寄ってきたのは子どもだが、なんか物珍しいやつが来たことと、少しのおこぼれを期待してきたやつらだつた。描くのに集中していれば無視するのも容易だ。三十分ぐらいだらうか。右手にはじつと見ていくれた男の子がいた。スケッチブックをしまいながら「あなたも絵を描かれるんですか?」と尋ねると、「描きます」という。「よいね」と言つて別れの挨拶をして歩き出した。

随分予定より遅くなつてしまつたので、橋のこつち側へ渡つてきて「AXIに乗った。メーターがあることを確かめて乗るのだが、このメーターがくるくる勢いよく変わつて



いく。そんてまあ、この「MAX」はオンボロで、ことあるごとにエンジンをかけなおす。大変な商売だよ。

道を直しているところでは、なかなかこつちを気にするそぶりを見せない作業員たちと時間の経過を彼は気にしているらしかった。僕が「行ってくれ」と頼んだ道だし、こういうことに聞かしては、気にはしてもイヤつきはしない。しかし彼は焦ったようで、やっとこさ通りすぎるのが出来たその道の先の交差点を左折したとき、徐行ほどには速度を落とさなかった。曲がりきるところで危うく左方から来た車と衝突しそうになった。僕は、まあネパールの運転はこんなもんかなあ、という気がしていたのだが、相手の運転手は怒っていた。大きな手振りでこつちに向って何か素振りを見せている。いや、それはお互い様だろう。やれやれ、という感じでこちらの連ちゃんに愛想をふると、この一連のことでやつとこさ打ち解けた感じになった。

せっかく帰ってきたのだが、すぐにはごはんにならなかった。当の日本人のお客さんがまだ着かないのだ。予定は十時着、今は二時。スラムに行く時間が気がかりだが、落ち着くためにも先ほどの木の絵の色付けなんかをしていたら、お母さんも痺れを切らして、「ぶっぞ」と呼んだ。先に食べさせてもらおうことになった。

おでんになすの味噌和え、ほうれん草のおひたし風のやつにお味噌汁。お客さんに合わせて日本食（風）をそろえた。そんなことしなくていいのに。情けない気持ちになりながらも、おいしい料理をあつという間に平らげた。落ち着いて食後のお茶を飲んでるところで、そのお客さんはやってきた。少し挨拶をして、多少お話をさせてもらった。そして、この日のメインイベントのスラムへ行くことにした。

お土産に、前に買ったビスケットとあらたにみかん1kgを購入して、100Rs 札しかなくなってしまったところで両替。ものごとがとんとん進んでいく。気分がいいのかしら。途中で「Tempo」で行って、そこから道を思い出し思い出し歩いていく。というより、この前は不意に出くわしたから、道そのものも分からない。不確かな方向だけを意識して、またもや知らぬ間にスラムとを仕切るレンガ壁に差し掛かった。

どっから入ったもんか、おそるおそるだったけれども、最初に出くわしたのはないている男の子。学校の制服を着ている。きつとここのスラムからも、結構学校に行く子がいるはずだ。歩く先々には、彼らは間違ひなくスクンバシなのだが、レンガ造りに改築していたり、窓枠の色を換えたり、かと思えばやっぱり途端にブルーシートがはみ出ているような、そんな家もあったり。一口にスラムと言ってもいろいろある。角でゲームに興じる大人たちや小さい畑で作物を栽培する人たち、柱の周りをくるくる回っている子どもなどなどめまぐるしくいろんなものが目の前に現れてくる。まさに迷路。この巨大なスラムで道を失わずに行くことはまず無理だ。前に通った道も、メインストリートかどうかあやしくなってきた。と言ってもBagmati川の方向にあわせて、あるしつらえがあるので方位は失わずに歩ける。このスラムはこの前イメーজしていたよりも大分

大きくて、びっくりした。多分このスラムだけで二千世帯くらいはあるだろう。もつとかな。やっとこさ知っている道に出て、前にお茶をご馳走してくれた彼んところへ辿り着いた。

彼は最初不在で、彼のお母さんと娘さんがいるだけだった。外に出ているんだという。彼がいらないとお土産渡すのもただあやししいだけのような気がして、どっちかな？ と聞くと、あつちあつち、と手でどこかを指しているようだった。このスラムで指差されても、僕にはよく分からない。ふらつと出て行って、ちょっと広いところで彼を待とうと思っていたら、思わぬ援者が現れた。子どもが、「こつちこつち」といふるところに連れていってくれた。さほど大きな範囲ではないだろう。でもたつくさんの道を行つたし、本当に「棲みついた」という感じのする空間にも出会った。これだけでも十分に楽しかった。

「なんで来たの？」と女の子らに聞かれたもんで、「一度お父さんに会つたの。だから会うために」というと、「会うために、会うために」ぎゃつはつはつはと笑いながら、いろんなところへ連れて行ってくれた。でも彼は見つからず、仕方がないので、彼の家に居座らせてもらった。少し待ってみてすぐ帰ろう、と平ばあきらめ気味だったのだが、僕が来たことが近くの人に知れ渡ってしまつて、この家の入り口は、連れて行ってくれた子どもらも合わせて七、八人の群れになっていた。程なくして彼が現れた。あれだけ外で彼を探し回つたので、誰かが教えてくれたのだろう、駆けつけてくれた。

もう一ヶ月以上も経つのだが、僕のことを覚えていてくれたようだった。UMBLOの緑のジャージを身にまとつた彼は、この間よりも血色がよく、元氣そうだった。早速みかんとお菓子を差し出すと、牛乳を買ってきてくれた。お茶が出る間にお母さんにタバコを二本ももらつてしまった。周りからもさらにいろんな人がやってきて、その中の一人の別の家にも連れて行つてもらい、いろいろ聞かれたしいろいろ聞いてみた。本当に楽しかった。翌週の土曜日に、あたりを案内してもらえらることもあった。「今度の土曜日においで。土曜日は休みの日だから。一緒に歩こう。十時に来なさい、たつくさん歩くところがある。行くべき場所は少なくない」と。その彼のうちは天井にダンボールを使つていて、その上にブルーシートが使われている。そしてトタンの外壁。ダンボールは断熱材わりだろうか。彼のうちにも女の子たちや家族の人、近くの人が入れ代わり立ち代り来て、それだけでも楽しかった。途中で帰ってきた奥さんも、最初こそ、何だこいつは？ と思つているらしかつたが、最後には慣れて、チャンを勧めてくれた。いただいた。写真も見せてもらつて、チャウラーメンもご馳走になった。最後に来たおばあちゃんは、僕が何度も日本人だといつているのに、「中国か？ 韓国か？」と聞く。「ネパールなんて全然よくない。顔も黒くつてべっしや」としていて、背も小さくて。でも日本人は背も高いしきれいだわよ。日本人も中国人も韓国人もお箸を使うでしょう？ ネパールなんて手でこちゃこちゃやつて、ご飯だつておいしくないよ」。怒涛の言葉に、

ちよつとやばいかなと思つたが、彼女は卑屈になるわけでもなく、周りの人も笑つて落ち着いていた。

一緒に歩いてくれた女の子は、今は親がいらないんだそうだ。この家に弟と二人で一緒に住まわせてもらつているのだそうだ。「どこを歩いたんだ？ 一人で歩くのか？」と聞かれ、「いつも一人で歩きます。ネパールには友達がいなくていいですから。」と答えると、彼は「もうみんな友達だぜ」と言つてくれた。そういうことに感傷的になるわけでは全くないが、ここへ来るまでに見た風景や人々の居座り方、僕に対するきよんとした感じ、こういうのも全部、普通だなあ、と思う。彼らは本当に普通の人々だと思ふ。

少しばかり長居させてもらった。次の週は土曜日朝に来て、いろいろ案内してくれる、約束を確かめて、帰りは単純な道を歸つた。帰り際、しきりに「泊まつていけ」と誘われたが、「今日は行きます」と断つた。今度の土曜日は、そうさせてもらおうかな。大通りからかなり近いところにあつたんだということを知る。TempoでPulchokまで。座席部の壊れかけの白熱の明かりと小揺れ、停まつたりを繰り返すリズムに心地よさを感じている。

晴れ

Homestay

Tempo 5Rs. 一本 2Rs. TAXI 65Rs. みかへ 35Rs. Tempo 8Rs. Tempo 8Rs. 一本 1Rs.

一月三十一日 Sombaar

いつものようにJawalakhelのロータリーを回つて焚き火の方へ。土曜日にはいなかったから、この日はどうかと思つていたが、歩道の植栽帯にまだ姿を確認する前から煙が見えていた。いたのはクマルとラザ。

クマルは「何で日曜日来なかつたん？」と聞く。日曜日に来たことはない！ スラムに行つていた、ということ伝えるのは難しかったので、友達と約束があつた、とだけ伝えた。いつも通り「お茶飲もうぜ」と言われる。もうそろそろ空気が分かつてきたし、関係も出来てきていた。土曜日がおじゃんになつていたので、「屋台が来たら飲むか」としていた。

その間、結構いろいろ燃やした。実験してみた燃やし方が好きで、あえて乾いていないダンボールなんかを燃やすのが好き。実験じみたと言つても洋服の切れ端とかビニールとか、今まで燃やしたことがあるものがほとんどだった。

クマルも「まんこ」とか言うようになってしまった。僕に向かつてあえて言う。いや、そういうことではないのだが。彼は微妙に大外しする、そんなタイプの人間だろう。

そんな話とは全く関係のないことだが、このごみ集積所には犬がたくさん集まる。その中で、子どもらにかわいがられているプチという茶グレイの中型のメス犬がいる。こいつが今発情期なんだろうと思うのだが、周りのオスに大人気だ。特に同じくらいの大きさの黒犬が熱烈なラブコールを送っていて、後ろからすぐ乗っかって、*sex*したがっている。こういう風景はもうこの辺りでは茶飯事で、この子どもらもよく見ているだろう。前はもうその最中に、追い掛け回していた。

プチは露骨に嫌がっている。ここへ来る犬は、この子どもらにはむかうことはまずない。ラザは近づいて行って、黒を引き離す。プチに寄り添いもたれかかりながら、どういふことなのかよく分かっていない黒を何度も追いつ返した。もう何がなんだか。結局もつと大きい黒犬がいて、このボス格の犬もプチに関心を持った。首輪をしている。中型犬の黒は、もうプチに近づけなくなってしまうた。

お茶屋は来なかった。時間もなくなってきたので、僕は行くことにした。「お茶は？」とクマルが言うが、別の日にしよう、と行って立ち上がると、ラザが「お金ちやうだいよ」とする。「お金あげんのは好きじゃないんだ。一緒にお茶飲もうぜ」と初めに伝えることが出来た。

あいつらはどう思っただろう。でもこれまでの関係が、勘違いを基にして成り立っているのなら、つまらない。あと少ししかネパールにいないから、とごまかしごまかしするのはあほらしい。Tempoをつかまえるために反対側に渡ろうとすると、ラザが「*Hi!* バイバーイ」といつも通りだった。

お茶屋が来ないのは、逆に好都合かもしれない。たまに差し入れを持って行ってやる。

最初に乗ったTempoは間違っていて、Sanepaの方からKamukiに行くのだそうだ。Pulchokを曲がったところで気づいて、慌てて、それを隠しながら降りて、歩いて戻って別のTempoに乗りなおした。

タイでのホテルの予約なんかを済ませて、*わくわく*の仕事に。この日は印刷の打ち合わせも行った。夕方にはParbatと一緒に焚き火をした。六時を回って事務所を出た。部屋をきれいにしてくれていた。きれいだった。いつもは部屋だけなのだが、なんかズボンが汚かったらしい。すごい臭かったから、とたまたまんで洗ったのだそうだ。焚き火やって、その後ずっとはいてなかったからなあ。

晴れ

Homestay

一本 1Rs. Tempo 5Rs. Tempo 5Rs. 一本 2Rs. Tempo 5Rs.

二月一日 Mangabhaar

朝の焚き火をしに行く。いつものように Jawalakehal のロータリーを回って行って、この日はタバコを買う。ちょうどおじさんも来たところ、という感じで、この商品たちには大きなかばんを「ごそごそ」といじっていた。5Rs. 札しかない。「5Rs. で一つ?」お釣がないようだ。しきりにこのタバコがいくらで、と説明してくれた。別になきやないで買わなくてもいいんだけど、2Rs. のを二つと 1Rs. のを一つ、選んでみると大変喜んでくれた。おじさんの横に座ると彼が敷いている座布団代わりを一つ分けてくれた。

「Namaste」と言いつて焚き火の方へ。この日もラザとクマルしかいなかった。お茶をいつものように行こうぜ、と言う。「いいよ。でも八時半までしかいらんないから、それまでに行けるか?」、大丈夫だという。全然当てにならないが、まあ一緒に過ごすことにした。

ちよつとすると、Tagankhel の方からバブルーが大きな荷物を持ってやってきた。袋のほかに、大きな旅行かばんを持っている。持ってきたかと思ふとかばんを焚き火の燃え上がった火の中にかぶせた。何でも燃やす彼らの習性かと、「おお」と言いつて笑つたが、目的はかばんについた鉄のフレームだった。周りを焼け落として鉄だけにしようというものだった。黒く燃え上がる煙を避けながら、なるほどねえ、と思つた。

もう八時半に近くなつた頃、ディリプがやつてきた。さほど大きくない袋を持つている。この間のバブルーとのいさかいがまだ続いているんだろう、僕らのいる焚き火のところまでは来ないで、ちよつと先の歩道に座り、プチと戯れている。クマルやバブルーが近寄つて行つても、そう仲良うしている雰囲気ではなかつた。でもラザが一人で近寄つたときには、大丈夫さうだった。ラザは、そういうふざけたやつなんだろう。

やがてごみ集積車もやってきて、時間もなくなつた。「もう行くよ」と急かせてやつと動き出すかと思つたら、ディリプがなんか周りを気にしてか、周りが彼を気にしてか、なかなか動き出さない。こういうのは面倒くさい。そんなもつて、行き先もどこに行くんだか意見が分かれた。時間がないというのに。

行つたお店は一月一日にも行つたお店。隣にゲームセンターがある。ここはお茶やドーナツなんかがちよつと高い。最初に入つてきたディリプも機嫌を取り戻したようだったが、どうやら彼らの中で決めて、先に分別所へ荷物を持っていくようだ。やがて来るというので、クマルとバブルーと三人でお茶をたしなんだ。時間がなくなつて、一言残して僕は先に出た。

少し遅れてしまった。慌ててメールをチェックしようとする、スリジャナさんとゴパールさんが何やらストーブの前で話していた。話し込んだ会話はさすがに聞き取れないので、そそくさと作業に取り掛かっていると、ゴパールさんが「テレビを見よう」とみたいなことを言つた。何やら政治問題がどうたらこうたら言つている。ネパール語の放送だ

けれどもよかったら、というのだが、実は何がなんだかよく分からないでテレビの前に腰を下ろした。

テレビはある放送局のもの以外は白黒にしか映らないらしい。十時になるとそれらしき音楽が流れて、おっさんが一人突っ立っている。王様さんである。きつと昔の日本の放送でも、こんな風にゆっくりしゃべっていたんだらうなあ、というぐらい、少しコミカルに感じるくらい丁寧なしゃべり方で、長くしゃべっている。編集も荒い。たまにゴパールさんが「よしっ」と、小さくガッツポーズをとる。それでまたテレビの放送に見入る。ゆっくりしゃべってはいるが、単語が分からないことばかりだったので、そういうことでもない他の事を考えてしまうのだ。喜びの瞬間の音は、どこの国の言葉でも変わらないもんだ。

この放送がつまり、国王によるクーデターと海外メディアがこぞつて伝えた、内閣解任のアナウンスメントだ。

小松さんがお昼あたりにやってきて、この日は事務所を閉めることになった。いろいろな予想をして、そのときの対応も考えて、お昼ごはんを取った後、一斉に引き上げた。

帰り道、何やら笑いが止まらなくなった。もう笑うよりしようがない、というような積極的なものではなくて、何がなんだかよく分からないが、ネパールは大変革を起こした。その不思議な雰囲気と不釣り合いな自分が滑稽に思えたんだと思う。Kahmanduの町並みも慌しく見えた。一緒に帰っていたスクマヤさんが僕が笑っているのに気づいたので、「何がなんだか分からないんだよ」と伝えた。死んだように日向で寝ている黒犬がいて、こいつも知らないね、という、知っているわよ、と笑った。

スクマヤさんが、僕の住む Puloch の方から行ってあげるよ、と行ってくれたのだが、この日は前もっての予定で学生の抗議運動が予想されていた。時間は不明だったが活動場所のリストに Puloch も入っていた。「抗議運動があるかもしれないからよくないよ」というと、うちの方から帰りなよ、と行ってくれた。知らない道を行けて僕は結構楽しんでしまった。スクマヤさんの家に近くなった頃、「お茶飲んでく？」と誘ってくれた。「のん気なやつだなあ」と思ったけれども、あたりは見事に平和だった。せつかくなのでご馳走になった。それでもカフェューが予定されているというので結局これはデマだった、あつという間に飲み干して、家族にさよならを言って出てきた。

帰ると、ドアを開けてくれた娘さんが、「小松さんが来た」ということを一生懸命伝えてくれた。なんだろう、のん気にお茶飲んでたなんて言えないなあ、と思っていた。帰ってもやることがないのでコンピュータを持って帰ってきていた。ためていたグムナを書いていると、小松さんがまたもややってきた。言い訳をしようと思っていたが、小松さんから結論を先の言われてしまった。僕はすぐに日本へ帰ることになった。

小松さんにどういふことなのか、家の人に伝えてもらって、お茶をしながらやすこさんも交えてお父さんと政治の話をし始めた。ニュースを聞けば、国家非常事態宣言がな

されたとのこと。もういよいよ帰ることになるんだなあという思いが強まってきた。

今度行く予定だったスラムのことや、朝会っている子どもらのことを考えた。もう最後だからということで、何をするか、いろいろ考えてもいた。同時に日本のこともよく考えていた。日本でのことを考えて、後の十日間のことを位置づけていた。なんともこんな結末とは。何か騒ぎのようなものが起こる気はまるでない。それほどいつもと変わらない、そんな午後である。旅行で来ているのなら、最後の日まで残る決断をするだろう。でも国際NGOのインターンとして来ている。プロの仕事を学びに来たつもり。そう考えたら、僕の情報収集能力は著しく低く、状況が危険になったときに足手まといになるだけでなく、お世話をしてくれる人たちを危険な目に遭わすかもしれないし、プロジェクトにも悪影響を及ぼすかもしれない。すんなり何でもなかったような素振りであるのが全うな判断かあ、と思うと少し気を落とした。何も出来ない自分に腹が立つとかそういうことではなくて、もったいない、というのに似た気持ちだ。この朝にたまたま数本買ったタバコが余っていたので、屋上に出てふかした。

グムナをやっていたら足がしびれて、少し休んでいるとご飯になった。食べ終わるとすぐ眠くなった。考え事もなく、寝てしまった。

晴れ

Homestay

二本 5Rs、Tempo 5Rs.

二月二日 Buthabaar



【写真】 Jawalakhelのおじさん。

いつも通り焚き火へ向った。Jawalakhelのおじさんに「二、三日で日本に帰らなきゃいけないんだ」と言って、写真を撮らせてもらった。まあ、帰る帰らないに関係なく撮らせてくれただろうと思うけれども。

この日はごみ集積所のすぐ横にバスが停まっっていて、その脇からクマルとラザと、黄色い服を着た男の子が見えた。垣間見る様子を撮った。カメラはやはり大人気で、ラザなんかは妙なまでにテンションがあがる。彼らの様子を撮っておきたいと思って持ってきたのだ。

火にあたる様子、ごみを持ってきたおばちゃんに群がり必要なごみを採り分ける様子、荷物の様子、犬がやってくる様子。などなど、これまでちょっとだけだけれども感じてきた距離感を確かめながら撮ってみた。オリエンテーションや写真セレクションのとき

【写真】ごみ収集のお兄さん。毎日八時半ころにやってきて、子どもらがのこしたごみをスコップでかき上げる。【写真右上】子どもたちは大きな袋を担いでここへやってくる。写っているのはダブル。





【写真】ごみ集め。一気にとりかかれ！

面白がってフレームを覗き込んでいる。

後から来たパブルーも楽しそうだった。次は俺、次は俺、と僕の首から下がるカメラに何度も手を伸ばし、EMSは彼らの手を盥回しになる。全然フオーカスをいじる気配がない。何か撮っている、そんな気分が彼らにとっては重要だ。それはとてもいいことだと思っ。

ラザのテンションは、すごくオモシロかった。ごみ集積車もやってきて、それに乗るクマルや集積車のお兄ちゃん、おじさんなんかも次々とパブルーの手でフィルムに収まっていく。この日、バンガラから帰ってきたときからカメラの中に残っていたフィルムもあわせて三本使った。まあ、二、三枚いいのがあれば、それで十分だろう。おそらく半分以上は彼らが撮ったものだと思う。

相変わらず事務所には電話は来っていない。いつ出発するか分からないから、昨日のうちに大分荷物はつめておいた。事務所に残る荷物をおおざっぱに詰め込んで、グムナに取りかかった。せっかくなので、一素人NGO関係者が見た今の様子をちゃんと記録しておこうと思っ。

スリジャナさんがやってきて、机の脇の荷物を見て、何かと思ったらしかった。小松さんから伝わるのが一番いいと思っただが、僕からちょこつと伝えることになった。『そうね』といった様子だった。やがて小松さんがやってきて、東京オフィスとの判断と、僕や小松さんの家族がどのようなのか、万が一のときにどのような対応をシャプラがと



【写真中】クマル（左）とパブルー（右）。後ろで手を上げているのは、耳の聞こえないおじさん。

【写真下】ラザとごみ収集車。

【写真】 焚き火と子ども。この日は大量にあったダンボールを次々と燃やしていった。手前はラザ。この焚き火にあたりに僕はやってきていた。



るのか、などが話された。緊急事態となって、小松さんがネパールを出国しなければならなくなったとき、連絡をとる手段からいって、おそらくメインの窓口になるのはスリジャナさんになるだろうということも伝えられた。

ミーティングが最後の方に差し掛かると、大きな車がやってくるのが小松さんの机の前の窓からぼんやり見えた。青い服の人が降りてきた。どうやらうちの事務所に来るようだった。定松さんだった。SCJには、SC-allianceとこう機関があつて、そこから支給されている衛星携帯電話が使えるらしい。訪問の目的は、SCJの東京を通じて坂口さんからの伝言があるのと、ちょっとした情報共有を持つとうという目的だったようだ。ミーティングも終わりに近づいていたので、一旦打ち切り、小松さんと定松さんとで話すことになった。日本語なので、僕もストープに足を当てながら聞いていることにした。

話ほどのような情報収集手段があるのか、SCJの対応やシャブラの対応、そういうものがどうなっているのか話された。衛星携帯電話によって日本との連絡を取れるようになったのが、SCJの東京は、状況の判断に全く関わらないらしい。定松さんは、それはいいことも悪いこともある、と言った。僕もそうだなあ、と思つた。そして、なぜか他のSCには連絡が取れないらしい。話は「BBCの情報がかかり詳しく信憑性が高い」といった現在の緊急事態に関する情報共有から、お互いの緊急事態に対する対応体勢へ、そしてプロジェクトのこと、それにまつわる段取り（報告書など）やまたまたそれにまつわる世間話へと続いていた。少し小松さんが席をはずしたとき、定松さんは僕がぼうっとしているのを氣遣つて話しかけてくれた。「インタビューの時期に大変なことが起こつたねえ、これは間違いなく後々の歴史の一ページに載るものだよ。上原君はそれに立ち会つた」といったことを言った。僕も「二月十一日に帰国する予定だったんで、最後の時期なんですけどねえ」と口を合わせたが、定松さんの言つたようなことには、僕は全く関心がなかった。

その後も少し三人でお話をしたりしていただけど、スリジャナさんに呼ばれたりして僕も何度か席を立つた。そんなこんなしているうちに、停電が起こつた。電話もないし、電源も落とさなくてはならない。僕のコンピュータはあと一時間くらいはなんともないが、こういうことはなんとなく気持ちの落胆をもたらす。苦笑いもれるが、なんとなく不幸を感じた。

定松さんが持つてきた衛星電話を使って小松さんが日本と連絡を取つた。それをもつて定松さんは帰つていった。大きな白い車の6の赤いマークは、少し消えかかっていた。よくここで方向転換をやつたもんだ、と思ひながら見送つた。

この日はCAPCRONの新しいスタッフに対するオリエンテーションが、CAPCRONの事務所である。そういえば前の日にCAPCRONの人たちがやってきていて、話をしていた。帰り際に何かそういつたことをやることを、見送りついでに犬と遊んでいた僕に言つて行つたが、すっかり忘れていた。小松さんも僕に伝えるのをすっかり忘れて

いた。

スリジャナさんと一緒にTAXIに乗っていくことにした。

出発までに少しだけ時間がある（といっても遅刻気味。スリジャナさんの準備が遅れている）ので、写真を現像に出してきた。出際に待ち合わせ場所を決め、「五分で行くから」と彼女は言っていたが、それでも少し不安になるぐらい、僕は彼女の到着を待たなければならなかった。スリジャナさんの横に座り込んで、子どもらと遊んだときに染み付いたごみと煙の匂いが残っているのが気になっていた。

CAPRONのオリエンテーションはもちろんネパール語で話されるので、何がなんだか分からない。だけれどもOHPを使ってくれたので、要点をつかむことは出来た。正直、何をするのかぼやけているなあという印象を持った。それに対するシャブラの発表も気になった。お互いに、目的の達成具合や効果を確かめられないままに、三年間という時間が過ぎるのではないかなあと感じてしまった。

小松さんは僕のチケットの手配に行ってくれていた。結局出席するはずだったオリエンテーションには間に合わなかった。二時を回ってすっかりお腹がすいていた。帰るとDhaka Weavesの女性が来ていて、小松さんは彼女と話をしていた。ごはんを取ることが出来ない。さてどうしたもんかなあと想着って、写真を受け取りに行ってきた。出来は思ったより悪かった。というより、あいつらの、本当に撮っていることにしか関心が無いことが面白かった。ミーティングが終わらない間、ACPだったかな、そのスタッフが訊ねてきた。電話が使えないので、予定されていたミーティングのことについて、用件を伝えに来たようだ。今の状況はそういうことなんだなあ、と感じた。スリジャナさんとそのことを笑った。

ミーティングが済んだ後、チケットの状況について話があった。当たり前なのだが、結局電話が生きていないので、チケットのマネージメントが全く出来ないらしい。小松さんの家族に関しては、まだ様子を見ることにしたそうだ。でも僕はタイムリミットがあるし、この状況がどうなるのか、実際予想がつかない。なるべくすぐに対応をするようにした。現状が危険かどうかというより、シャブラの社会的組織としての体裁が問われる問題だ。それが一番いいだろうと思っただ。

パターンとしては、この日のうちに空港に行って、問い合わせることも考えられた。それが一番早い手段だろうが、明日から三日間、マオイストによるパンダが予定されている。状況から、電話線が復旧してからすぐに確認を取るのがよいだろう、ということになった。電話線は、ここ二日か三日のうちには復旧するだろうという噂が流れている。その噂にもいろんな説があるが、全部を組み合わせて考えてみて、そうなるだろう、という予測を立てた。

小松さんとそういったことを話していたので、さらにちょっと冷えてしまったごはんを食べた後、小松さんが打ち合わせに出かけた。するとまた停電が起った。スリジャ

ナさんと話をした。

*

「こういう政治的不安になると、ネパール人は外国に行きたがるの。仕事がなくなるわ。私も一生懸命仕事がしたいと思うけど、そうなったとき何も無い。あなたはすごくいい経験をしていると思う。出発はいつになるの？ 明日？ 小松さんの家族はどうするのかしら。」

「さっき話したんだけど、電話がつかってからマネージメントをやることになった。小松さんの家族の様子を見ることにしたんだけど、僕は早く帰ることになる。タイムリミットもあるから。」

「ネパールは今変わるとき。ネパールの人々は、悪く変わるのももちろん嫌だけれども、これまで何も動かなかった。だから何か「変化」がほしかった。この状況を喜んでいる人は多いと思う。昨日は何か抗議運動とか、暴動とか起こるかと思っただけど、いつもと同じだったわね。」

「そう、すごく平和だった。」

「今、政治のリーダーたちは自宅軟禁の状態。外には警備隊がずらっと並んでいるの。でも、彼らにとってはその方が安全なんでしょう？（僕は大分間違った認識をしている）」

「私たちにとっては安全だわね。彼らは外に出たがっているの。こういう状況で、いろんな話を民衆に向って話したいの。そうするといろいろ問題が起こるでしょう。だから囚われの身になっているの。」

「なるほど、僕は勘違いをしていた。 今ね、シャプラニール東京はパニックになっていと思う。こちらからは連絡が取れないし。日本人もイラクで殺されていて、それ以降、北朝鮮のことやなんかのこともあって、NGOは変な目で見られていると思う。日本では、NGOはそれほど一般的ではないの。多くの人は、NGOがどんなものであるか、知らないと思う。そんなときだし、シャプラニールはすごい敏感になっている。こういう状況で僕を送り出したこと、そして駐在員の家族のことを。小松さんのこと、スリジャナさんやスクマヤさんやゴバルさん、みんなのことをすごく心配している。特に僕は、ね。僕はすぐ帰らないといけない。」

「それがいいと思うわ。」

「シャプラニールは日本のNGOや関係者の中ではすごく有名で、きちんとした組織体だし。」

「そう、でもNepalではそんなに有名じゃないわね。友達に言うと、「新しいNGO？」とか聞かれるもの。もう十年やっているのよ、というのと、「十年？」とか言われてびっくりされる。」

「バン格拉デシュと日本ではすごい有名だよ。」

— そうね。

*

順序もあべこべかもしれないし、他にもいろんな話をしたと思うが、印象に残っているのはこんな会話だった。特に、「ネパール人はアンラッキ―」という「ことば」がすごく心に残った。その後シャブラの名前の由来やそのユニークさ、それが僕は好きだということなんかを話しているうちに停電が止み、スリジャナさんは仕事に戻った。僕は終わっていないグムナに取りかかった。すると間もなく四時半を回って、スクマヤさんが帰り、やがて僕ら二人とも帰ることにした。

Thapathaliの交差点は、いつものように騒がしい。車がよく通る。すごく普通の風景なんだろうと思う。だけれども、正直僕はそわそわしている。そんな目で見ると、この普通の風景も、なんだか落ち着きのないものに見えた。たまに通る「Z」のマークの車や、公用車のナンバーが目に残まる。きつともいつも通り走っているだけだと思っただけども。後でそういうことを確かめようと思っ、交差点の写真は何枚か撮ってみた。

荷物を多く持っていたのでTempoに乗って帰った。早めの帰宅で何をしようかと迷ったが、こっちで買ったジャケットが破れていたの針と糸を借りてぬってみた。それもあつという間に終わり、ほぅっとしていると、お茶と呼ばれた。「何も心配することない」とお母さんは僕を氣遣ってくれたが、僕の気持ちはそういうことではないのだ。

ごはんを喰って、やつぱり早く眠くなった。また時差が戻ってきた。それは帰郷を目の前にした僕にとっては、ちょうどいいことだろうと言いつい訳を身にかぶせて、明かりを消して床についた。

—

晴れ

Honestay

一本 1Rs. Tempo 5Rs. 写真現像 490Rs. 一本 1Rs. Tempo 6Rs.

「 Gumna 」 Copyright なんち屋 <<http://doratomy.jp/~nancha/>> All Rights Reserved.



【写真】カトマンズの Bagmati 川沿いのスラム。二月四日、良くくれた人たちに挨拶に行った。

わせていた旅行会社でもチケットのマネージメントは出来ていなかったが、直接空港へ赴いて掛け合ってみることにしたのだ。そして、見事、出国。

直接空港に赴くのを決めたのは二月三日。子どもらに会った後事務所へ出勤し、小松さんと話し合って決めた。小松さんは次のような考えを持っていた。ちなみにこの日はバンダが宣言されている真つ最中だった。

*

二月の中旬にはマオイスストの決起記念もある。今はこんな風に平和だけでも、自分はこれがそのまま続くとはどうしても思えないんだ。絶対に荒れる。うちの家族はまだこのまま住み続けるという保障があるが、上原君には期限があるから、様子を見ているうちにこの機会を逃すのは良くない。今タクシーが動いているうちに、一度空港へ直接訪れて、掛け合ってみるのが良いと思うんだ。これを逃したら、週末をはさんでどうしても来週になってしまうね。

*

こういう考えをしてくれる人のところへお世話になっていたんだなあ、という思いをあらためて持った。

二月五日はこれまで二度訪れていたスラムに行く予定だった。いろいろ案内してもらう約束をしていた。僕はこの訪問をすごく楽しみにしていた。小松さんに内緒で週末を使って一日泊まってしまおうかと思っていたくらいだ。彼らの僕への関心と、心持の豊かさ、スラムの奇妙さに触れ、素直に「もつと知りたいなあ」と思ったのだ。

保障もないし何となくだけでも、直接空港へ掛け合えば出国できてしまうだろうと思っていた。二月四日の朝は早くに起きて、タクシーですぐ事務所へ向い、大きな荷物を置いて、スラムへ挨拶へ行くことにした。

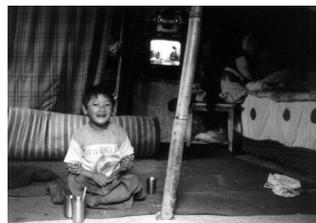
突然の早朝の訪問にも関わらず、快く迎えてくれ、またたらふく温かいお茶をいただいた。そういえばここへ来るまでに乗ったタクシーのおじさんも、すごいいい人だった。僕が少しネパール語を解するのを知って、彼も安心したのだろう。まだ開けていないタバコの箱から一本くれた。ちょうど一本ほしいところだった。こんなことを思い出ししまった。

チケツトはないがこの日この後空港へ行ってみると
いうこと、飛行機が取れなかつたら次の日また来ると
いうこと、そのときはどうぞよろしくということ、あ
なたたちに出会えて本当によかったと思っっているとい
うこと、などなどを伝え、すぐに御いとまし、事務所
へ向った。

事務所ではお別れ（になるかどうか分からなかつた
が）の挨拶をして、ネパール研修の感想などを話させ
てもらった。そして小松さんと一緒に空港へ出かけ、
カウンターで掛け合ってみた。なんてことはない、あっ
さりと言書のチケツトを出してくれた。なんとあっさりしていたことが。こんな手書
きの紙切れ一枚で、不安になってしまっただ。

小松さんに最後の挨拶をして、ダッカに行ったときのような失敗はしないようにと、
自分で時間を確認して、淡々と機内に入り込み、ネパールの土地からふわりと離れた。

僕は思い出をさほど大事にするタイプの間ではないが、この「 Gumna 」はとても大
切なものになるのだと思う。読み返してみても思う。これはひとえにこのような機会
を与えてくれたシャプラニールのおかげ、と言いたいところだが、本当にそう言いた
いのだが、真実は、やはりクリシュナたちとスラムの人たちのおかげだと思ふ。彼らは僕
にとつて、全く奇妙なところがなく、それでいて全くの新しい人だった。彼らに接する
中で感じたことをもとに絵本を書いてみたいと思っっているが、まだそれには手をつけら
れないでいる。



【写真】最初にお茶をご馳走してくれた彼の家。

平成十七年 三月
（うえはらゆうき）

